

逆行した日

恵猫

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

数十年が経った未来で、このかを失ってしまった刹那は、どういうわけか中学二年生の終わりに戻ってきていた。このかを失わない未来を目指して、刹那は歩き出す以前になろう様に投稿していたものを再投稿です。

※書き直し、再構成したものでエヴァ戦終了まで投稿予定ですが、その後については書き直しが出来ていないため今後も投稿しない予定です。

目次

過去へと戻った日	1
変わる日	15
注目を集めた日	30
密かな対決の日	47
友達になった日	66
常識人と会った日	88
図書館島初探検の日	108
地底図書室の日	125
帰省した日	138
彼女にとっての日常の日	148
賭けをした日	162
大浴場の日	176

吸血鬼事件の日	188
友達を助けた日	205
お呼びだしの日	221
看病の日	236
約束をした日	266
賭けの代償の日	280
一つの事件が終わった日	297
護られる人の日	315

過去へと戻った日

目に映る景色は、赤い炎と黒い煙に覆われていた。燃える炎が肌を焼き、焦げた匂いが鼻をつく。

屋敷のあちこちで火の手があがっていた。燃え盛る炎を掻い潜り、私は走る。

目指すはただ一つ、私が護ると誓った彼女の元へ。

「お嬢様!!」

長、と呼ぼうとするたびに止められた。名前を呼んでと言われて、私が困ったように駄目ですと言うと、不満げにしながらそれでも、この呼び方を許してくれた。あの頃に戻ったような気持ちになれるんだと、今は遠い友達を思い出せるのだと、懐かしそうに笑って言っていた。

襖を壊すのではと思う程の勢いで開く。炎は既にここまで及んでいて、踏み込んだ部屋の中、そこに広がっていた光景に目を見開いた。

「(気づ)覚悟……!!」

私が探していたお嬢様と、一人の男がいた。

絞り出すように言った男は刀を振り上げて、お嬢様は座ったまま、悲しげに目を閉じ

ている。

私は駆け出し、かれこれ十年以上愛用している刀を抜いた。二代目の相棒である刀が牙をむいて、男に襲いかかる。

「神鳴流——斬岩剣!!」

後ろからは武道に反する、そんなことを思つて、すぐにそれがどうしたと、思い直した。

背中から血を噴き出して、男が倒れる。お嬢様がゆっくりと目を開けて、私を見上げた。ふわり、笑みを向けられて、私は手を差し出した。

「せつちゃん」

「お嬢様、ご無事でよかったです。さあ」

逃げましょう、と。外は敵だらけで、早く逃げなければまた襲われてしまうから。仲間が食い止めてくれている間に、早く。

繰り返した言葉と、私の手にお嬢様は首を振った。拒絶された手を下げる事も出来ない私に、お嬢様は座ったままで、なあ、と話しかけてくる。

「もう、手遅れみたいや」

「いいえ、まだ間に合います。とにかく、今は逃げましょう」

「無理なんよ。うちの体に、毒が入ってるから」

毒、ということとは食事を用意した女中たちも、敵だったわけ。けれどそれは、今となつてはどうにもならない、遅すぎる真実で、後回しの真実。

お嬢様にとって、毒は意味を成さないのに。なぜ、と問いかけた。

「魔法がな、使えないんよ」

「え……」

「たぶん、結界やな。魔法を使えなくする……媒介がどこにあるのかも、今となつたらよう分からん」

魔法が使えれば解毒できる毒も、その魔法が使えなければどうしようもない。お嬢様の口ぶりからすれば、他の方法での解毒ももう間に合わないんだろう。絶望的だった。

「そん、な……」

口の中が乾いていく。どうしてお嬢様がこんな目に合うんだと、誰かを責める。

ガクリと膝をついた私に、お嬢様は、とても綺麗な笑みを浮かべた。

「うちも、お父様も……結局、西と東を仲良くさせる事は出来んかった」

「そんなことありません。だって、和解を成立させたのは、お嬢様じゃないですか……」

「紙面だけの、協力しましょうって綺麗な言葉を並べただけの和解や。皆、東に下つたんやって、怒つとつた。せつちゃんかて、知ってるやろ？」

「それは……」

東を倒せと、叫ぶ声は収まらなかつた。それどころか、お嬢様が長となられてからは、その声はより一層に激しさを増したように思う。表面上は穏やかで、けれど水面下では荒れ狂っていて、東に対する怒りと恨みの声は静まることを知らなかつた。

そしてその声は、お嬢様への不満でもあつた。

「うちが、過去に仮契約してたのも、原因やろうなあ……」

「……そう、ですね」

否定の言葉を吐けなかつた。お嬢様は、もう全てを分かっていた。

今はもう解除しているとはいえ、一時でも、西洋魔術師と仮契約を結んでいた。それは即ち、一時でも——東の者の、従者だつた。

それは、水面下で暴れている者たちにとつて、興奮剤でしかなかつた。与えてはならぬ劇薬。既にお嬢様は、彼らにとつて西ではなく、東に組みする者となつていた。

反発は強かつたが、それでもお嬢様は長となつた。西と東の関係を良くしようと、尽力した。それが余計にいけなかつた。

東との和解が成立し、彼らの不満が爆発した。そしてお嬢様は彼らの敵とされ、敵は滅ぼすのだと叫びがあがつた。

「——ゴホッ」

「お嬢様!!」

咳き込んだお嬢様の体が倒れる。支えた体は冷たくて、口からは血が溢れていた。もう、限界なんだろう。

悔しさに唇を噛みしめた。刀を握る手に力が籠って、どうしてと、もう意味を成さない問いかけが頭の中を駆け巡る。

どうして、このちゃんがこんな目に合うんだと、何もかも遅い今になって、私は問いかけた。

「はっ……せ、つちゃん……」

「お嬢様……」

「みんな、はな……西を、守りたいだけ、なんや。それは、うちも、みんなも……同じ、気持ち……」

「はい。分かって、ます」

「やから……みんなを、恨まんというて、な……?」

「それは……」

このちゃんをこんな目に合わせた連中を、恨むなど。確かに、彼らは彼らの信念をもって、彼らなりに西を守ろうとした。その結果が、このちゃんをこんな目に合わせた。どちらが正義とか、悪とか、そんなものは無い。ただ結果が、私にとつては最悪だっただけの話。

でも、だとしても許せる事じゃ無い。だってこのちゃんは、私の親友だから……許せるわけが、無い。

「うちな、みんなに……せつちゃんにも、西の皆にも、傷ついてほしくなかったんや……」

「お嬢様……」

「みんな、守りたかった。西とか、そんな大きなものや無くて、うちの周りにいる皆を……守りたかったんや。東と仲良くすれば、皆を守る力が、増える……そう、思ったんやけど、駄目やったみたいや。急ぎ過ぎたのかも、しれんなあ……」

「……間違つてなんか、いませんよ。私が、保証しますから」

「ほんま？　なら、よかったえ……」

東と和解する事は、間違つてなんかいなかった。ただ、それ以外のたくさんの事が、間違いだらけだっただけで。

でも、それを言う事は出来ない。言つてしまえば、これまでの思い出を否定してしまうから。言える筈が無くて、言いたく無かったのに……このちゃんは、自分でそれを言つてしまう。

「うちじゃ、駄目やったんや」

「お嬢様……」

「うちは、東に近すぎたんや。何も知らなかったあの頃に、うちは取り返しのつかない間

違いをしてもた」

無知とは時に罪である。そして世の中には、知らなかったですまされない事があるのだと、今更になって私たちは思い知らされる。絶望の中で、無知は罪だと突き付けられる。

「後悔は、してへんけど……うちは、ちゃんと知らなきやあかんかった」

「そう、ですな……」

「仮契約、な……うちは、絶対にしたら、いけなかつたんよ……」

「……ええ」

何も知らず、後の事も考えず、ただその一瞬の為だけに。

知っていれば別の道があつたかもしれない。けれど知らなかつた私たちは、その道を選ぶほかに無くて。

あの数年間で得た絆は、かけがえのないものだったけれど。本当にこれでよかつたんだろうか。

「なあ、せつちゃん……」

「はい」

「名前、呼んでえな」

開けているのも辛いだろう目を、開けて。そうして伸ばされた手を、強く握り返した。

「この、ちゃん」

「もつと……」

「このちゃん……このちゃん、この、ちゃん……」

「せつちゃん」

嬉しそうに、笑って。握った手から、力が抜けた。

擦り抜けていく手を掴もうとして、それなのに掴めなくて、落ちて行く。目が、閉じられた。

「この、ちゃん、このちゃん、このちゃん！」

揺すつても、叫んでも、このちゃんは目覚めない。閉じた目を、開けてくれない。

「あ、あああ、あああああああ——!!!」

慟哭、それが正しいのだろうか。溢れる涙も拭えず、体の奥底からこみあげる叫びを止められないまま、このちゃんの体に縋り付いた。

「どうして、どうして!?!」

何を間違えていたのか。取り返しつかない間違いを犯したのは、あの頃で。今となつてはもう遅すぎた。

後悔も、懺悔も、意味を成さない。無知が罪だと、私たちはあの頃に気づかなければならなかった。

結局、私はこの名前の通り、刹那を生きるだけの存在で。前を向きながら、先を見据える事が出来なかった。

止めればよかった、止めなければならなかった。そうすれば、こんな未来ではなくて、もつと別の未来を選べたかもしれないのに。

私も、このちゃんも、間違えてしまった。

「ごめんっ、このちゃん。ごめん、ごめんっ……」

体が熱い。炎がすぐ傍で燃えている、ここももう限界だろう。

逃げる事は出来るだろうか。出来ないかもしれない——でも、それはもうどうでもいい事だ。私に、逃げるつもりは無かった。

私も、ここで終わる。

「すぐ、行くから」

護れなくてごめんと、謝ることしか私には出来ない。

「刹那!!」

切羽詰まった、悲鳴にも似た龍宮の叫びに閉じていた目を開けた。目前に迫る巨大な斧と、それを振り下ろす鬼がいる。

瞬時に状況を確認。右手に馴染んだ懐かしい相棒の感触、ぐるりと周りを囲むのは十

数の妖怪。龍宮は別の数体に囲まれて動けない。服を見下ろす、見慣れたそれは中学の頃に愛用していた裏専用の仕事着だった。

「え……？」

思考時間はコンマ数秒。変わらず迫りくる斧をするりと避けて鬼の懐に入り込み、横薙ぎに刀——夕凧を振るった。

鬼が倒れて消滅する。私の思考はひどく混濁したままだ。

「どうして、私は……」

「刹那、ぼんやりしている暇は無いぞ！」

「あ、ああ……」

突拍子も無い事態に、記憶が混乱して意識はぐちゃぐちゃだ。龍宮の言葉にも、何とも気の抜けた返事をするのが精いっぱい、これでは駄目だと意識を無理矢理に切り替える。

どうにも状況は飲み込めないが、これは仕事で、私がいるのは戦場だとだけ考えればいい。そうすれば、これまでの経験が勝手に気持ちいを切り替えて、体を動かしてくれる。「つし、はああああ!!」

振り上げ、振り下ろし、振り抜き、突き刺し、突き上げ、薙ぎ払う。数は多いが、一体一体はそれほど手間取る事も無い。ただ、麻帆良に侵入してくる妖怪にしては強い。

この分だと先生はともかく、生徒は苦戦を強いられるだろう。

「せいっ!!」

私の二倍はある槍を持った妖怪を相手に飛びあがり、刀を振り下ろす。ガキンツ、と槍で受け止められた瞬間、その感覚に妙だと思った。

「(体が、重い……?)」

というよりも、動きずらいと言うべきか。とにかく、いつもとは違った感じがして顔を顰める。

それでも戦いを止めるわけにはいかず、粗方の敵を切り捨てたのを確認して私は気を高めた。

「神鳴流——雷鳴剣!!」

残る敵を雷で一掃する。雷鳴と共に強い光が妖怪を焼き殺し、焦げた匂いが辺りに充満した。

視線を巡らせ、周囲の気配も探ってみるが、他はもういないようだ。振り向けば龍宮の方も終わつたらしく、これで私たちの管轄は終了となった。

「お疲れ」

近づきながら声をかける。とても不思議そうに見られ、首を傾げられた。

どうしたのか、そう思うよりもまず先に、私の身に何が起こったのかを考える。よく

分からないままに戦ったが、状況さえまともに把握できていない。とりあえず、改めて着ている服を確認すれば、それはやはり中学の頃に着ていた仕事着で、右手に握ったままの刀は夕風だった。これは明らかに可笑しい。

だって夕風は、十年ほど前に折れてしまったのだから。

「刹那、でいいんだよな？」

「当たり前だろう。何を言い出すんだ」

突然おかしいことを言い出す龍宮。そもそもなぜ、彼女がここにいるのか。ああ、いや、違うか。ここにいて良いんだ、別におかしくない。前に仕事を一緒にした時も相変わらずの腕前で——あれ？

前って、いつだ。確か半年ほど前に仕事をして、随分と久々に会ったから色々と話した筈だ。なのに、何故だ？昨日も会った……いや、というよりも、今日、同じクラスで、先生の授業を——

「おい、刹那？」

「ツ……」

どうした、そう問いかけてくる龍宮を見上げる。おかしいな、こんなにこいつとは身長差があつただろうか。確かに龍宮の方が背は高かったが、私も少しは伸びて多少なりとも縮まった筈なのに。ああ、でもいつもこうして見上げていたような。

「(分からない)」

分からない。私はいったい、何を覚えている？誰を見ている？

「たつ、みや……」

「……さつきから様子がおかしいな。いったい、どうしたつていうんだ？」

「あ、ああ……その、このちゃんの、ことつ……」

このちゃん、その名前を口にした瞬間、激しく頭を揺さぶられ、かき回されるような衝撃に襲われた。何十年分の記憶が纏めて、滝のように私の中に流れ込んでくる。

燃える炎の熱さ、木の焼け焦げた匂い、視界を覆う煙の息苦しさ、嘗ての仲間を刀で向けられた衝撃、嘗ての仲間を斬る感触——抱いたこのちゃんの体の、冷たさ。

全部、覚えてる。でも、ああ駄目だ。ぐちゃぐちゃの意識が、記憶が、流れ込んできた記憶で更にぐちゃぐちゃになって、ぐるぐる回っている。それは吐き気さえ催させて、ぐちゃぐちゃぐるぐるになった頭を抱えて私はその場にしゃがみ込んだ。

「このちゃんつて、近衛の事だよな？珍しいな、お前が近衛をお嬢様じゃなくて名前です——おいつ、刹那？ どうした、大丈夫か？」

お嬢様。ああ、そうだ。私は今も昔も、このちゃんをお嬢様と呼んでいて……今も、昔も？昔なのか？未来では無く？ いや、そもそも今とはいつだ。

それに変だ。このちゃんは、死んでなんかいない。だって今日も明日菜さんやネギ先

生と一緒にいて、私はそれを見守って……でも、確かにこのちゃんは死んだ。

抱いたこのちゃんの感触を、冷たい体に縫って泣いた感覚を私は覚えている。擦り抜けて行った手を掴めなかったあの瞬間の絶望も、私は確かに覚えているんだ。

いつたいたんなんだ？このちゃんは死んだ？それとも生きている？どちらだ、何がどうなっている？分からない、私に何が起こっているんだ？

「龍宮、頼む……教えてくれ……」

震える声を絞り出して、不審と気遣わしげに見てくる龍宮の腕を掴んで引き寄せる。その力の強さに驚いたように目が見開かれたが、そんなことを気にすることも出来ずに、私は叫ぶように問うた。

「今はいつたい、いつなんだ——!?!」

流れ続ける記憶の濁流に、私はただもがき続けるしかなかった。

変わる日

目を覚ますと、外はまだ暗かった。二月の終わり頃、太陽の昇りはまだまだ遅い。

二段ベッドの上から飛び降りて、未だ暗い部屋を見回す。見慣れたような、懐かしいような、そんな二つの感覚に襲われて、その違和感にこめかみを指先で叩いた。

「——んっ、刹那……随分と早いな」

「ああ、おはよう。真名」

後ろで欠伸をかみ殺して起き上がる真名に、そう返事を返す。

真名には昨日一晩、随分と付き合ってもらった。おかげで、ようやく私の中の記憶の区切りがついた。

全てを話したわけでは無いが、話に付き合ってもらったので真名は私が多少なりとも『未来』の記憶を持っている事を知っている。

そう、未来。このちゃんが死んでしまう、あの未来だ。私はどうやら、中学二年生の頃まで時戻ってきてしまったらしい。

らしい、というのはそれを証明する証拠が無いからだ。もしかすると、このちゃんが

死んでしまう未来というのは、白昼夢よろしく中学二年生の私が見た夢かもしれないのだ。ただ、数十年という長い夢を、生死を賭ける戦場で見たというのなら修行のやり直しが必要だし、何よりも戦場で眠るなんて言う間抜けな行為をしたと思いたくなかった。

けれどもし、本当にこれが過去に戻ってきたことによる現象だというのなら——私は絶対に、このちゃんが死ぬ未来を回避する。

「ああ、真名。朝食は和食で良いか？」

真名、と龍宮を呼ぶのも未来の記憶だ。記憶が混乱していた昨日は違ったが、区切りを見つけた今はこちらの方が呼びやすい。何せ、何十年と呼んでいたのだから。

「……作れるのか？」

「え？」

不思議そうに問いかけられて、私は思わず首を傾げた。

でも、ああそうか。確かにこの頃の私は、剣の修行とこのちゃんを護ろうとすることばかりで、料理なんてまともに作れないだった。

いつだったか、このちゃんに手料理が食べたいと駄々をこねられて、必死に練習したんだ。それを何度も繰り返し返すうちに、結構な種類の料理が作れるようになった。味はこのちゃんのお墨付きで。

「まあ、一応な」

「それなら、任せようかな」

面白そうに笑う真名に任されて、私は朝食作りを始めた。さて、今日は何にするかな。

「……………美味しいな」

「そうか、良かった」

白米、味噌汁、焼き魚、ほうれん草の胡麻和え……………何の変哲も無い朝食だが、やはり味には人それぞれの好みがある。少しばかり緊張していたが、真名がポツリと呟いた感想にほっと胸を撫で下ろした。

「こんなに美味しいなら、毎日でも食べたいな」

「別に構わないぞ？ ああ、あと今日の弁当だが、お前の分も一応用意したが……………どうする？」

「もらう」

すぐさま返ってきた答えにちよつと驚いたが、まあそれだけ気に入ってもらえたとなると悪い気もしない。

朝食を食べ終えて、後片付けは真名がすることでお願ひしたら、学校の準備。といつでも用意する物も特に無くすぐに終わって、私は机に向かっていた。

どうにも早く起きすぎたようで、時間にはまだまだ余裕がある。もしかして真名も早起きさせすぎたかなと罪悪感に襲われたりもしたが、当の本人は私の後ろで銃の手入れをしていた。

……朝から尋ねてくる人間もないが、良いのかそんな堂々と。

「やっ、と」

そんなことを思う私の横にも、鞘に入れているとはいえ夕凧が置かれている。

机の引き出しを漁り、白紙のお札と、筆と紐を取り出して机に並べた。紐はまだ良いとして、まずはお札と筆だ。

深呼吸を繰り返して、気を落ち着かせる。これからするのは、お札を作る作業だ。

基本的なお札は、専用の紙に気を籠めて文字を書き、その文字に力を持たせる。それに再度気を流して力を引き出すことで、初めてお札を使うことが出来る。裏の世界には、お札作りを専門にする職人もいて、腕の立つ職人が作れば、効果の強いお札が出来上がる。

お札を作るには幅広い知識が必要で、通常ならば既に作り上げられたお札を買った方が早い。私も基本的にはそうだが、そうも言っていられない時もあるわけで。

だから私が作るのとはそれ以外の、私が必要とする新しい効果のお札だけだ。数十年で、時間はかかったが作れるようにはなった。未だ改良の余地があるものばかりだけ

ど。

筆に墨をつけて、ゆっくりと紙の上を滑らせる。慎重に、決して文字を間違えないようにしながら、同時に平等に気を流し込んで、そつと筆を紙から離す。

硯に筆を置いて、書き終わったお札を見やる。完成だ。

「ふう……」

戦闘とはまた違った気の使い方に、ひどく疲れを感じる。それはいつもの事だが、どうにもいつも以上に疲れているような気がする……たぶんそれは、昨夜の戦闘中に感じた、体の違和感と同種のものだろう。

精神的には私は中学二年生から数十年と時を過ごした。その分の経験や知識を伴った行動に、体が着いてこないのだろう。

「修行、考えないとな……」

少なくともこの体に慣れなくてはいけない。今までのように動こうとして、またあの違和感に襲われるのでは敵わない。

慣れない事に溜息をかみ殺して、出来上がったお札を手取る。文字に間違いは無いし、気の状態も良好。これなら大丈夫だろう。確認して、今度は夕凧を手に取りそれを分解する。手入れの時に分解して行うから、作業自体はいつものことだ。

違うのは、刀身の根元、柄に差し込む部分に、今作ったお札を巻きつけること。

「刹那、何をしているんだ？」

「ん？ ああ、夕風に細工をな……まあ、見れば分かる」

お札を巻きつけた刀身を柄に差し込み、きちんと嵌ったのを確認して鞘に戻す。手に持った夕風は、見た目には何も変わったところは無い。

私は少しだけ気を流し込んで、口の中で言霊を唱える。その一瞬の後、私の手には夕風では無く、赤い勾玉が握られていた。

「それは？」

「夕風だ」

「……………は？」

私の答えに、首を傾げる真名。まあ、確かにこれだけを見たなら、これが夕風だとは思えないだろう。

立ち上がって、今度は手に握った勾玉に少しの気を流す。今度はそれだけで、勾玉が夕風へと姿を変えた。握ったそれを真名に見せて、私は説明する。

「さっき作ったお札の効果なんだ。こうすれば、持ち運びが楽だろう？」

また夕風を勾玉に変えて、先ほど用意した紐を勾玉の穴に通す。紐を結んで輪を作って手首に引っかければ、少々簡易的だがブレスレットの完成だ。

さすがに数十年と生きれば、その過程で色々と学ぶというか……得物を持ったまま誰

かを護衛するというのは無理があると、そう学んだ結果作ったお札だった。何があったかは聞かないでほしい。

「……どうした、真名。ハトが豆鉄砲食らった顔をしてるぞ」

「……………いや、本当に刹那なのかと思ってね」

「……………ああ。私は真正正銘、桜咲刹那だ。まあ、多少は変わったかかもしれないが……」
手首に光る勾玉に触れる。確かに、変わったと思われるでも仕方が無いのかもしれないな。

余裕もあることからんびりと行動していたら、結局いつもと変わらない時間に学校へと辿り着いた。朝も早いとはいえ、騒がしく活気に溢れた教室に入る。視線を少し巡らせてみたけれど……このちゃんは、まだ来ていない。

「……………どうするのが良いんだろう」

このちゃんが死ぬ未来を回避する。そう決意したはいいが、私は自分がどう行動すればいいのかが分からない。

このちゃんを護るにしても、今までと変わらず遠くから見守って護るのか、それとも近くで護るのか。それだけで、私の知る歴史から大きく変わってしまう。

今はまだ歴史に関わるような行動を控えるべきなのか、それとも関わっていくべきな

のか…………分らない。

「とにかく、早くこのちゃんに会いたい……」

元気な姿のこのちゃんを見たい。どうしたらいいか考えながら、ただそれだけを強く思った。

「ん？ おおっ!!」

とりあえず今は、このちゃんが来るのを待とうと席に座ったら、後ろから驚いたような声が聞こえて振り向いた。クーフエイが、目を輝かせてこちらを見ている。

「…………?」

周りを見回したが、特にいつもと変わったところは無い。肉まんを売ってるのはあつちだし、いったい何を見ているんだろう。

「刹那!!」

「おはよう、クーフエイ。どうかし——」

「勝負するアル!」

「…………は?」

ズダダツ、と机の間を駆け抜けてきたと思えば開口一番、勝負。意味が分からないと首を傾げると、

「その勝負、拙者もお願いしたいでござるな」

「長瀬?」

声が聞こえたと思えば、目の前にシユタツと着地。やけに楽しそうな長瀬に、期待に目を輝かせて構えているクーフエイ。まさか、何か話したのかと真名の方を見ると、面白そうにこちらを見てはいたものの、首を振られた。

「二人とも、いったいどうしたんだ? 勝負ならこの間したばかりだろう?」

「昨日の刹那と全然違うアル! だから、勝負するアルヨ!!」

「いや、意味が分からん」

「たった一晩で随分と強くなったようでごさるからな。その実力、見せてもらいたいのでいやるよ」

「何を言ってるんだ。私は何も……」

長瀬の言葉に返そうとして、はた、と思い当たって口を閉じた。

昨日の私と違う、たった一晩で。二人の言葉と、自分の身に現在進行形で起きている事を考えると、一つの答えが出てしまう。

昨日の私と何が違うと言えば、内面の、精神的な部分が大きく違う。精神年齢は加算されている訳で、そして強くなったのかと言えば、おそらくは強くなったのだろう。精神で積んだ経験は、戻ってきた今も私の中に生きている。生きているからこそ、私は体との差に違和感を覚えるんだ。

……こうして考えると、本当に昨日までの私とは違う。だから真名は、何度も私に聞いて来たんだろうか。本当に刹那なのか、と。

「……とにかく、すまないんだがまた今度にしないか？ここだと少し……」

「なら外に行くネ！」

「いや、これから授業があるし」

「放課後なら大丈夫でござるか？」

「……………今日は、ちよつと」

考える事が山積みなので、暫くは放っておいてほしい。そう切に思ったところで、クーフエイには通じなかったらしく。

「うう、じれつたいアル!!」

「うわつ、ちよ!?」

ヒュツと風を切つて拳が突き出された。慌てて掌で受け止めた拳を、そのまま勢いを殺さず後ろへと流して、クーフエイのバランスを崩して席を立つ。

続けて挑んできそうな長瀬から逃れるように二人の間を擦り抜けて、教室の後ろへと逃げた。口笛や囃し立てるような声、委員長はやめなさいと叫ぶ声が聞こえたけれど、今は無視だ。このちゃんが来る前に、早くあの二人を大人しくさせて――

「せつちゃん?」

「ッ」

懐かしい声、聞きなれた声。呼ばれた名前、呼ばれないようにしていた名前。いつも傍で聞いていた、いつも傍で聞きたいと思っていた。

戻ってきた自分と、昨日までの自分が入り混じる。区切りをつけた筈の記憶は、たった一声でその境界をなくして、ぐちゃぐちゃに混ざり合って絡み合う。

混乱したままで、それでも声の聞こえた方を見ると、驚いたように私を見ているこのちゃんと、目が合つて。

「あ……………」

声が出ない。目の奥が熱くて、なんでだろう、手が震える。

「お、おはよ、せつちゃん」

緊張したみたいに、おずおずとこのちゃんが声をかけてきて、

『あ、せつちゃん、おはようさん』

目の前のこのちゃんと、私が見続けてきたこのちゃんの声が頭の中で木霊する。

面影が重なって、目の前のこのちゃんは確かに、私を知るこのちゃんなのだ、そう思うと、そう思ったら——それがこの上なく、嬉しい。

「この、ちゃん……………」

「！せつちゃん、うちのことわわわわっ!？」

気づけば私は、このちゃんの手を掴んで走り出していた。教室を飛び出して、廊下を走り続ける間、確かに感じる左手の温もり。

掴めなかつた右手の温もりが、今この手の中にあることが堪らなく嬉しくて、涙が零れた。

半ばこのちゃんを引きずるようにして走っている事に気づいたのは、教室とは反対側にある階段の踊り場まで走って来た頃だった。

「ご、ごめんっ、このちゃんー！」

慌ててブレーキをかけて立ち止まる。走っている間、どこか意識の遠くでチャイムの音を聞いた気がするけれど、振り返った廊下に誰もいないところを見ると、既に一限目は始まっているのだろう。

「え、ええよ、大丈夫やから。にしても、せっちゃん足速いなあ」

「そう、ですか？」

「せや〜」

息を切らしたこのちゃんが笑っている。それを懐かしいと感じるのは、きつと昨日までの私が、このちゃんを遠くから見ると見事かしていなかったからなんだろう。

言葉とは裏腹に辛そうなのこのちゃんに、握っていた手を離そうと思っただけれど、この

ちゃんが強く握り返して来て離せなかった。

「……………このちゃん」

「うん？」

名前を呼んだ私に、首を傾げる。それを見たら、何だかもうたまらなくなってしまうて。

「っこのちゃん!!」

「わっ、せつちゃん？」

思わず抱き着いてしまって、そうした私を驚いたようにしながら抱き留めてくれたこのちゃんが、どうしたん？ 問いかけてきて、嬉しかった。

「(生きてる)」

このちゃんが、生きている。私の目の前で死んでしまったこのちゃんが、今、私の目の前にいる。体からは冷えた感触じゃなくて、熱を感じる。

「……………よかった……………」

どうしようもなく嬉しくて仕方が無いのに——同時に襲ってくるのは、それを失った悲しみと、失わせてしまった後悔。

「っ護れなくてごめん、ごめん、このちゃん……………私、私はっ…」

「せつちゃん……………」

「絶対に、護る、からっ！ 今度は、今度こそ、絶対に護って、みせるから!!」
今、目の前にいるこのちゃんは、私の前で死んでしまったこのちゃんとは違うと、分かっていたけれど。

溢れだす涙と紡がれる言葉を止める術を、私は知らなくて。ただ涙を流して縋り付いた私を、強く抱きしめ返してくれるこのちゃんを、今度こそ護りたいと思った。

「(今度こそ、絶対に)」

護ってみせると、誓った。

「……なあ、せつちゃん」

「つぶ、はい……」

「うちはな、どうしてせつちゃんがそないに泣いてるのか、分かんないんよ」

「分からなくて、良いんです。私が……私が勝手に、泣いているだけ、なんですから」

「そんなん、うちが嫌や。うちな、せつちゃんがなんで泣いてるのか、ちゃんと知りたい。話してない間、せつちゃんが何をしてて、何を思ってたのか。うちは、せつちゃんの事、知りたいんよ」

「話し、ますよ。話していないことも、話さないといけないこともたくさんあって……話せない事も、あるけれど、長く、なるけど……」

「ええよ。話せなかつた分、いっぱい話したいんや。うち、せつちゃんの話、いっぱい聞

きたい。せつちゃんに、聞いてほしい事も、あるんよ」

それでな、と。問いかけてくるこのちゃんの顔は、私からは見えない。

「せつちゃんは、今でもうちと……友達で、いてくれるん？」

けれどその不安そうな声から、このちゃんがどんな顔をしているのは想像することが容易くて。このちゃんがそんなにも不安に思うのは、仕方が無いんだと思う。

再会してから、二年間。ずっとまともに話すことも出来ず、目を合わせる事も無かったのだから……そんな私に、不安を抱くのも当たり前だ。

ごめんね、このちゃん。ずっと不安にさせて、心配させて。もう、大丈夫だから。

「もちろんです。今も、昔も、この先も——私は、ずっとこのちゃんの友達です」

「ッ——せつちゃん!!」

感極まったように叫んだこのちゃんの目から、涙が溢れる。二人揃って涙を流しながら、互いを抱きしめ合った。止まる事を知らない涙は、悲しみの涙じゃなくて、喜びの涙で。

私たちはしばしの間、互いの体を涙で濡らすことも厭わず、抱きしめる腕から力を抜く事は無かった。

「(大丈夫)」

今度こそ絶対に、護ってみせるから。

注目を集めた日

中学二年の頃まで記憶が戻ったのが、昨日の夜。このちゃんに再会したのが、その翌日の今日、つい先ほど。

耐え切れない衝動のままに連れ出したこのちゃんと色々話していた結果、一限目をサボってしまう事となった。

「なんや、授業サボるのって初めてで、楽しいな〜」

「す、すみません、お嬢様」

「なんも謝らんでいいのに。うち、せつちゃんとこうやってお話出来て嬉しかったんやで？・あと」

ピツと指を一本立てて、このちゃんはムツと不満げな顔をする。

「敬語、嫌や言うたやろ？」

「う……ごめん、このちゃん。気をつけるね」

「うん。せつちゃんがうちのボディガードというのは分かったけど、友達なんやから、な？」

「……うん。そうだね、このちゃん」

このちゃんには、私が長より遣わされた護衛であると説明した。考えたが、未だ魔法については教えていない。教えてしまうのが一番いいのだろうけど、長の考えも聞いた上で行動しないと、今後に差し障りがあるかもしれない。だからこのちゃんは、私から彼女を護るのか知らないのだけれど、今はそれでいい。

「にしても、お父様も心配性やね〜」

うちは大丈夫なのに、と軽い溜息を吐いたこのちゃんに、私は苦笑った。

「離れて暮らしてるから、心配なんだよ。それに、危険はどこに潜んでいるか分からないよ、このちゃん。もしもどこか探検するときは、私に言っただけにしてね？」

「オーケーや。あ、それならせっっちゃちゃんも図書館探検部入り〜。楽しいえ〜？」

「ん……部活は、ちよつと。ああ、でも探検するときはつき合わせてもらいたんだけど……いいかな？」

「もちろん、大歓迎や！」

図書館探検部、結構危険な場所も探索するらしいし、用心した方が良さだろうな。まあ、今後はこのちゃん一人で行かせないで済むと思えば、少し安心する。

よかった、と笑うとこのちゃんが瞬きをして私を見ていて、それに首を傾げて問いかけた。なにか、拙い事を言ったかな。

「どうしたの？」

「ん〜……せつちゃん、話し方変えたん？」

「え？」

「ずっと標準語なんやもん……それに……」

少し考えるようにして、それからこのちゃんが言葉を続ける。

「落ち着いてる、いうんかなあ。なんや、凄い大人っぽく見えるんよ」

「ああ……」

まあ、中身はプラスされてるわけで。けれどそんなことを正直に言えるはずも無く、私は笑って言葉を返した。

「師匠がたまに使ってるのを真似して、練習してたらこれに慣れちゃって。大人っぽいかは、分からないけど……変、かな？」

「ううん、なんもおかしくないよ。どんな話し方でも、せつちゃんはせつちゃんやしな」

「……うん」

『せつちゃんらしいなあ。でも、無理は駄目やからな？』

……同じような事を、言われた。今も昔も未来も、このちゃんは変わらない。変わらず、私が私である言葉を言ってくれるから、私はそれが嬉しくて。

泣きそうだな、なんて思ったのは、きつとまだ記憶の混乱が続いているせいだ。私の涙腺は、なんだかとても緩くなってしまうらしい。

「さて、と。それじゃせつちゃん、いくえ?」

「うん、いつでもいいよ」

教室の扉の前に、二人で顔を見合わせる。今は休み時間、朝に教室を飛び出してからまるまる一時間は行方不明だった計算になる……そうなつて、このクラスが騒がない筈が無いと思うのは、昨日までの私の見解か。

戦闘とはまた違った緊張感を抱きながら、私とこのちゃんは覚悟を決める。少しでも被害を減らそうと、選んだのは後ろの扉だ。その扉を、このちゃんは慎重に、音を立てないようにして開けていって――

「このちゃん、ちよつと待つて」

「え?」

言うが早いか、私はこのちゃんを追い越して教室の中へ。

どう細工したのか、頭上から落ちてきた金ダライを誰もいない方向へと弾き、足元に張られた細い糸は足に気を流して踏み抜く。左右から互い違いに飛んできた矢は上体を後ろに逸らして躲し、最後になぜか、目を輝かせて襲つて来たクーフエイと長瀬は、二人の間を擦り抜けざまに足をかけてきよならした。

サツと周りを見回せば、ポカンと口を開けて固まるクラスの方たち。毘の類がもう無さそうであると確認して、教室の外で事の成り行きを見ていたこのちゃんに声をかけ

た。

「もういいよ、このちゃん」

「ふわあ……せつちゃん、凄いなあ。うち、吃驚したわ」

「私も驚いた」

特に最後のクローフェイと長瀬。あれは確実に二人の独断だろう、このちゃんに対してもやっていったなら、一発ずつ殴らないと気が済まない。

「え、えーつと……」

「あの……桜咲さん？」

「はい？」

戸惑いがちに名前を呼ばれて、とりあえず振り向く。するとやけに注目されている事に気づいて——クラスメイトの垣根の向こう、真名と目が合うと、声も無く諦めろと言われた。

何を諦めろというのか。それは分からなかったが、ただ現状が、どう見ても良い状況と言えないのは分かって、私は一歩後ずさる。

「せつちゃん？」

「……このちゃん、私もう少し外に出てようかな」

「え、なんで？」

「皆さんの視線が、恐い」

向けられる多数の視線は、何故か嫌な予感しかなかった。

「んー、なあ、せつちゃん」

「このちゃん？」

「諦めや」

「……………え？」

「このちゃんまで、何を——!?」

思った瞬間、押し寄せてきたのは人の波、基、クラスメイトの波。待つて、意味が分からない。

大体どうして皆さん揃って、そんなキラキラした目を向けてくるんですか。お願いですから教えてください。

「すごいすごい、ねえさっきの何!?!」

「桜咲さんって運動神経凄いなだね！　うちの部活入らない？」

「このかどこに行つてたの？」

「つてか二人はどういう関係なのさ!?!」

「二人とも目が赤いけど、いったい何があつたの？　もしかしてあんな事やこんな事とか!?!」

「美少女二人の絡み合い……うふふふふ」

「運動とかが得意なだけで、部活は遠慮します！ このちゃんとは普通の友達でちよつと話したいことがあつただけで、別に何も想像しているような変な事はこれっぽっちもありません!!」

「あはは、せつちゃん頑張れ〜」

人波の向こうでこのちゃんが手を振っている。どうしてこのちゃんだけ無傷なのか凄く不思議だった。

と、とにかく私もどうにかして、この波から抜け出さないと……。

「はーい、はい。ちよつと失礼〜」

考えていた私の前に、人の波を抜けて来た朝倉さんがやって来る。

「いやあ、凄い人気者だね、桜咲さん」

「嬉しくありませんよ」

「まあそう言いなさんなつて。でき、ちよつと付き合ってもらえる?」

「お断りします」

「まあまあ」

マイクを片手に構えた朝倉さんに首を振る。けれど私の反応などまるで意に介さず、彼女はそのままマイクをズイッと私に差し出してきた。

「桜咲さんってき、いっつも一人だし、あんまり話してくれないからさ。このかとの関係といい、いっただいどういいう心境の変化があつたのか知りたいんだけど？」

「……………なるほど、それが原因か。」

つまり、昨日までの私からは考えがたい行動を、今日の私はとっているということだ。このちゃんの件しかり、先ほどの罠の回避しかり。

護衛という立場上、なるべく目立たぬようにしていたが、それが裏目に出たか。もしくは今日の私の行動自体が問題か。

どちらにしろ、もう少し考えて行動するべきだったと思わざるを得なかった。

「黙秘権を行使します！」

「いやいや、それは勘弁してよ。私だけじゃなくて、皆気になつてるんだしさ」

「それでも話せる事はありません」

「だいたい、私に何を話せというのか。質問に答えるというのなら、先ほどの質問に全て答えたのだからもういいだろう。」

「ん、ガードは堅いかあ……………しようがない。このか」

「なんや〜？」

「ぼやいた朝倉さんは、人波の向こうにいるこのちゃんへと声を投げかけた。」

「桜咲さんとあんたってさー、どういふ関係？」

「うちとせつちゃんか？　せやなあ」

このちゃんが私の隣までやって来る。

ニコニコと楽しそうに笑っているのを見て、私は何やら嫌な予感を抱いていた。

「このちゃん……？」

「せつちゃんはな、うちの大切な人なんよ」

『おおおお……!!!』

「い、このちゃん!？」

どうしてそんな、あえて彼女たちに誤解を招きかねない言い方を——!？」

「えへっ」

抱いた嫌な予感は、これが原因だったとすぐに分かった。

このちゃんは、昔から……今も未来も変わらず、人が困るのを——とりわけ、私が困るのを楽しんでいる節があった。もちろん限度は考えているが、悪ふざけ程度に人を困らせるのは日常的だったと言ってもいい。

そして今、このちゃんが浮かべているこの笑みは、困っている私を見て楽しんでいる笑みだ。つまり全てが計算されていること。

「(何も今じゃなくても!!)」

距離を詰めてきた朝倉さんを前に、心底から叫びたくなかった。

「桜咲さん、どういふこと!？」

「誤解です!! 私とこのちゃんは、ただの友達でしかありません!」

次の授業の先生が来るまで、私はこのちゃんとクラスメイトの方たちに振り回される事になるのだった。

麻帆良の中、というのは魔法以外にも危険が多く存在する。

発達した科学技術は、時に悪用される事もあるらしい。それらは厳正に取り締まられるが、危険というのはその発達した技術だ。

麻帆良の中は盗聴される危険がある。それを考えると、私は外と連絡を取るのに、一度麻帆良から出なければならぬ。盗聴される危険性が無いとは言わないが、麻帆良の中よりはその可能性も下がり、防止が容易になる。

「報告は以上です。つきましては、長のご意見をお聞かせいただきたく思います」

電話越しの失礼を承知で、私は長に事の顛末を報告した。主にこのちゃんに関する事、そしてそれに付随して、現在は教育実習生として着任しているネギ先生の事。

魔法という存在がより一層、近くなつたことによつて、このちゃんに魔法の存在を教えるか否かという、その意見を長にお聞きしたかった。

……本来なら、私から連絡を取るのとはよくない。西の裏切り者とされる私が長に連絡

を取ることで、長に何か不利益があったら困るからだ。

けれど、この問題に関して報告しないわけにはいかなかった。このちゃんに魔法を教えるか否かは、このちゃんの今後を大きく左右するし、早めに伝えるべきだと判断した。

『ネギ・スプリングフィールド、ですか』

「はい」

『……………木乃香の様子は、どうですか？』

「今のところは、麻帆良に貼られている認識障害の結界の効果もあり、魔法の存在に気づいていません。ただ、度重なる不可思議な現象に疑問を持つのも、時間の問題かと思えます」

『刹那君は、木乃香の傍にいますね？』

「はい。私は、木乃香お嬢様の……………友人として、お傍にいます」

『ならば、今しばらく苦労はかけますが、そのまま木乃香の傍にいてください。魔法についてはこちら——』

長は一度、言葉を切った。それから少しの沈黙の後、

『未だ、教えぬように』

そう答えを出した。

『危険もあるでしょうが、今はまだ木乃香に魔法の存在を教えるわけにはいきません。』

こちらの方でも、少々意見のぶつかりがありますから』

「……………強硬派の方たちでしょうか？」

『ええ。木乃香の力は大きい、私の独断で決めてしまえば、余計な争いを生みます。こちらでも話し合いをしましょう。そして、それについてですが……………刹那君に、お願いがあります』

「はい」

お願い、そう言われて心臓がどきりと跳ねた。

長からの頼みとはいったい何なのか、緊張しながら言葉を聞く。

『こちらでも話は進めていきたい何なのか、緊張しながら言葉を聞く。』
「長、お嬢様の現状はともかく、私の見解というのは……………」

さすがにそれは、そう思い声を潜めて言えば、長はいえ、と言葉を続けた。

『木乃香の護衛として、そして友人として最も近くに居るのは君です。その君の立場から見て、木乃香の現状をどう思うのか……………木乃香に魔法を教える事について、どう考えるのか。私は、それを聞きたいんですよ』

「……………承知しました」

はつきりとそう言われては、私に断る術は無く。

細かな日時等については文を出すとの事で、これで今回の報告は終了となった。

「ふう……………」

少なくとも、今必要な報告は出来た筈だ。これで、長たちの方でもこのちゃんの現状について考えてくれるだろう。

それが争いに発展しないとも限らないが、こちらで事が大きくなってから報告するよりは良い筈だ。少なくともこれについては、早めに手を打っておいて損は無い。

「せつちゃん」

「あ、今行くよ！ このちゃん」

用事があるから、と出てきた麻帆良の外。このちゃんまで一緒に行くと言い出したのは予想外だったけれど。

道路を挟んだ反対側の歩道に並ぶお店の前で、私の名前を呼んで手を振るこのちゃんに、私は携帯を鞆にしまって走り出した。

それから、寮へと戻ってきたのは太陽も残りわずかとなった頃。

このちゃんと別れて部屋へ向かっていた私の携帯には、このちゃんとお揃いで買ったストラップが揺れている。

「変わったものだな、私も」

可愛らしくデフォルメされた猫のストラップ。これを買ったお店もまた、とても可愛いらしい雰囲気のお店で、店内には多くの女の子がいた。

昔の私なら、場違いな気がして入るのも戸惑っただろうお店。今となつては、あまり抵抗というものは感じない。可愛い物は昔から嫌いでは無かつたし、何かを可愛いと思う事が悪い事では無いと教えられた。

『好きなものは好きって言つていいんよ？ 別に、せつちゃんが何を好きでもうちはそんなせつちゃんが好きなんやからな！』

それからだろう、素直に可愛いと口に出来るようになったのは。入り辛かつたお店も、少しくらいならと立ち寄れるようになったのは。

たしかに、一人で入るにはどうしても多少の抵抗感を抱きはするが、今日のようにこのちやんと一緒になつて、色々なものを見るのは楽しかつた。

それに、ストラップをお揃いで買うというだけでこのちゃんはひどく喜んでくれた。それだけで今日は私にとって十分に満足できる日だつたと言える。

「……………」

そんな満足感を胸に歩いて、私と真名の部屋が見えた時、扉の前には一人の生徒がいた。

絡繰茶々丸。クラスメイトで、エヴァンジェリンさんのパートナーである茶々丸さん

がいたことに、私は驚いて足を止めた。

「……………こんばんは、桜咲さん」

「こんばんは……………あの、真名に何か用事でも？」

私の部屋の前にいたという事は、私か真名のどちらかに用事があったと考えていいだろう。

ある種の期待を持って問いかけたが、残念ながら茶々丸さんは首を横に振って私に近づいてきた。

「私がお待ちしていたのは、桜咲さんです」

「私、ですか」

「はい。これを」

スツと差し出されたのは、白い封筒だった。縦長ではなく、横長のタイプ。

封筒を私が受け取ると、茶々丸さんはそれで役目は果たしたのか、軽く頭を下げるとそのまま廊下を歩いて行ってしまった。

「……………」

取り残されて、とりあえず部屋に戻った。真名は出ているようで、部屋には誰もいない。

机に鞆を置いて封筒を確認する。表面には何も書かれておらず、裏面を見ると右下の

所に名前があつた。

『エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル』

差出人は、思った通りの人物だった。茶々丸さんからこれを受け取った時点で、そうじゃないかとは思っていた。

続けて封筒を開き、中身を確認する。中には一枚のカードが入っていて、カードもまた白というシンプルなもので、たった一文だけが書かれていた。

「今日の十時、桜通りに……参つたな」

理由は何か分からないが、私はエヴァンジェリンさんに呼び出されてしまったようだ。

エヴァンジェリンさんからの呼び出しとなると、嫌な予感しかしない。ふと思ひ出しだが、ネギ先生とエヴァンジェリンさんが最初に対決した事件というのが、桜通りの吸血鬼と噂になった事件だった筈だ。

私はその時の詳しい話を聞いていないのでよく分からないが、とりあえず言えるのは一つだけ。

「行くしかないか」

手紙を受け取り、呼び出しを確認してしまつた以上、行かないというわけにもいかず。カードを封筒に戻して、引き出しにしまつた私は、覚悟を決めるように手首の勾玉を

撫
で
た。

密かな対決の日

あの後、部屋に戻ってきた真名と夕飯を共にしてから、私は寮を出た。

日々の修練の一環となっていたランニングに行つて来ると言えば、真名は何一つ疑うことなく私を送り出した。なので、今この場にいる私は、上下共にジャージ姿だ。

「何事もなければいいが……」

呼び出されたという時点で、それは無理な話なのだろう。何事も無いなら、エヴァンジェリンさんがわざわざ私を呼びだしたりはしない。

問題なのは、その何事かあった場合の私の対応だ。既にこのちゃんとの関係や、長への報告など過去から変化した行動を取っているが、だからといって今後も積極的に関わつていいものか。未来の事実を変えるために行動するとしても、やはり過去を変える事に躊躇してしまうのは、その行動で何が變つてしまうか分からないからだろう。

どうやら、未来の事を知っている分、私は過去に無い出来事に弱いようだ。その行動で何が變化するのか、私の知る過去とどれだけ變つてしまうのか。私はそれを恐れている。

「(これも、その変化の一つか)」

今の時刻は九時五十五分で、場所は桜通り。呼び出しは十時で、きっちり五分前だ。

この呼び出しも、過去には無かった事だ。出来れば何事も無く、今はまだエヴァンジェリンさんと深く交流することなく終わらせたい。

そう思うのは、過去の私が今の時点ではエヴァンジェリンさんと交流を持っていないから。未来を変えると誓いながら、私は未知の変化を恐れている。

「——来たか、桜咲刹那」

「こんにちは、エヴァンジェリンさん」

十時。街灯の上に現れたエヴァンジェリンさんを見上げると、彼女は重さなど感じさせない軽い動きで地面へと下り立った。

見上げたままで話すというのは少しばかり首が疲れるので、下りて来てくれたのは有難かった。

「絡繰さんから手紙を受け取りましたが、こんな時間に呼び出しなんて、いったい何の用ですか？」

「ああ。まあ、お前に少しばかり、興味があつてな」

「興味？」

エヴァンジェリンさんの言葉に、首を傾げた。

興味という言葉に少し考えて、もしかして彼女は同性愛者だったのだろうかと思ひ、眉尻を下げた。

「興味って、あの……すみませんが、私にその手の趣味は……」

「アホか！ 私にだって無いわ!!」

「で、ですよね」

否定はしないが困り果てたので、心外だとばかりに叫んだエヴァンジェリンさんに安堵した。私が知らないだけ、というのも大いにあり得るので、余計な心配をしてしまつたようだ。

「つたく——で、お前いったい、何があつた？」

「またその質問ですか……」

昨日の真名といい、今日のクーフエイと長瀬といい、同じ事を言う。クーフエイ達には攻撃されるし……ああ、あの二人とは近いうちに手合わせをしないと。あの分だと、あまり待たせればまた教室で襲われ——

「おい、聞いているのか？」

「……聞いてます。何があつた、と聞かれましたも、お答えするのは難しいです」

「答えられないと？」

「答える事は出来ませんが、答えたくないです。言つても、信じてもらえないと思います」

し」

「だが少なくとも、龍宮真名には話しているな？」

「……なぜ、そう思うんですか？」

「お前の変化は明らかだ。だが、龍宮真名はそれに気づいていながら、疑問を抱いていた様子は無い……むしろ、それを理解していたようだからな。お前が理由を話し、それに納得したと考えるのが一番容易い」

「なるほど……たしかに、そう考える事も出来ますね」

「事実ではあるが肯定はしなかった。確かに真名は私が未来について知っているのを知っているが、それも全てでは無い。大まかな、ただ私が未来について知っているという事実だけであって、この先の学園での事件や、ましてやこのちゃんが死ぬという事は知らない。」

「だとしても、ここで領けばエヴァンジェリンさんは、理由を話せと言って来るだろう。彼女の性格とこの場所への呼び出しからして、もしかすれば戦闘に発展する恐れもある。出来ればそれは避けたいと思った。」

「なにせよ、その答えを聞けば、お前が腑抜けになった理由も分かるかもしれないな」

「……腑抜け？」

「そうだ。気づいていないのか？」

エヴァンジェリンさんは退屈そうに目を細めた。

「昨日までのお前に比べれば、確かに力は増しているようだが——今日のお前は、実につまらん」

「つまらない、ですか。エヴァンジェリンさんから見て、昨日と今日で私は、どんな風に変わったんですか？」

「なんだ、気になるのか？」

「まあ、それなりに」

真名たちは皆、殆ど感覚で私が変わったと感じているだけなので、その変化を言葉にはしてくれないし。このちゃんには大人っぽいと言われたが、それは真名たちの言う変化とはまた別のところで、それに仕方のない事だと思う。これで子どもっぽいと言われた方が、正直なところ複雑だ。

「そうだな、お前に分かりやすく言うなら——刀だな」

「刀……」

「昨日までのお前は、例えるなら抜身の刀だ。触れるものの一切を斬る鋭い刀……だが、今日のお前は、刀身を鞘にしまった上で、更に柔らかな布を幾重にも巻きつけた感じか。触れるもの全てを、絶対に傷つけないようにしている」

「そこまでですか？」

「じゃなければ、お前がああのクラスの馬鹿騒ぎをあそこまで受け入れるか？」

「あー……」

なるほど、それは確かにそうだ。昨日までの私なら十中八九、あの騒ぎに無視を決め込んでいるだろう。

そう考えれば、エヴァンジェリンさんの例えにも納得がいく。誰も傷つけないように、か。

「無関係な方たちを、傷つけるわけにはいきませんか？」

「だとしても、たった一晩で随分な変わりようじゃないか？ 私が知りたいのは、何がお

前をそこまで変化させたかだよ」

「そう言われましても、私は何も答えるつもりはありませんよ。それに、私はつまらないんじゃないかったですか？」

つまらない私をそこまで気にする事は無いでしょう、そう聞くと、エヴァンジェリンさんはにやりと口端をつり上げて悪く笑った。

「ああ、そうさ。実につまらない。つまらんから、聞きだすついでに——」

エヴァンジェリンさんが、何かを投げた。

「お前を壊してやろうと思ってな！」

投げられたのが大量のフラスコだと分かった時、私は反射的に地面を蹴り後退していた。

フラスコが爆発する。一瞬だけ見えたフラスコの中身は液体で、おそらくは魔法薬の一種なのだろう。爆発の原因は、フラスコから大量の氷が精製された事によるものだった。

桜の木々や地面が凍りつく。これがエヴァンジェリンさんの魔法か？

「(おかしい)」

どうにも腑に落ちなかった。同じ氷の魔法でも、彼女の魔法の威力はもつと強力だったはずなのに。

「エヴァンジェリンさん」

「ふむ、今のを避けたか。まあ、少しは楽しませてくれるか？」

「力を、抑えられているんですか？」

「ッ」

エヴァンジェリンさんが驚いたように目を見開いた。

「なぜ知っている!!」

次いで叫んだ彼女に、やはりと思う。

おそらくは、登校地獄とは別の、学園結界が原因なのだろう。侵入してきた妖怪の力

を抑えるものだが、それはエヴァンジェリンさんにも効果が及んでいるらしい。

私の推測は正しかったようで、どうやら先ほどの液体が魔法の触媒であると考えてよさそうだ。なら、触媒を消費させてしまうのがもっとも確実な方法か。

彼女自身が魔法を満足に使えないということは、触媒を無くしてしまえばそれ以上の魔法の使用が難しくなるわけだし。

「まあ、そう簡単にいかないでしょうけど」

背後から急接近してくる気配を感じる。

突き出された右拳を体を捻って避け、逆にその腕を掴んで勢いをそのままに投げ飛ばす。

エヴァンジェリンさんの横に着地したのは、茶々丸さん。これで二対一、その事実にはエヴァンジェリンさんに問いかけた。

「卑怯、と言ったらどうしますか?」

「魔法使いの戦闘に従者はつきものだ。まさか、それすら忘れる腑抜けになったか?」
「いえ。言ってみただけです」

とはいえ、厄介なのもまた事実。やるしかないのは分かっているが、エヴァンジェリンさんが大概に本気であるというのが分かって、溜息がこみあげる。

右手首にぶら下がる勾玉を掴んで、気を籠める。現れた夕風を握り、左手を添えた。

「むっ、武器を持っていたか。何も持っていないから、妙だとは思っていたが……」

「ああした方が、持ち運びが楽でしたので。さすがに、呼び出しに丸腰で行けるほど、腑抜けたつもりは無いですよ」

「当然だ。にしてもお前、いつの間にそんな芸当を身につけた？」

「さあ……いつでしようね」

首を竦めて惚けた。いつでと言われれば、私には未来でと答える以外に答えが無い。

けれどこの答えはエヴァンジェリンさんの機嫌を損ねさせたようで、彼女の唇がピクリと引き攣ったのを見た。

「まったく、変わったのは性格もか。随分と憎たらしくなったものだ……それとも、それがお前の本性か？」

「いえ、まさか。私の根本は、何も変わっていませんよ」

「ならば、なんだと言う？」

「……答えません」

足に気を籠めて、斬りかかる。

茶々丸さんが前に出て来て、それに対して私は躊躇も迷いも無く刀を抜いた。寸でのところで躲かれはしたが、刀が制服を引き裂きボディを露わにする。けれど、それを確認する前に、後退した茶々丸さんとその背後からいなくなったエヴァンジェリンさん、

そして頭上にばらまかれたフラスコに舌打ちをした。

「神鳴流、斬空閃!!」

フラスコが爆発し襲いくる氷の嵐を、気を籠めた斬撃でもって相殺する。

私の意識が頭上へ向いた隙を狙ったように茶々丸さんが身を屈めて接近し、左腕を突き出してくるのを自分で後方に飛ぶことで威力を弱める。受け身を取って体勢を立て直し、

「斬岩剣!!」

コンクリートの地面に向けて、刀を振るう。細かな石の礫となったそれは放たれた技の衝撃のままに吹き飛ばされ、追って来た茶々丸さんに弾丸となって襲いかかる。

「捕縛結界、五角楼」

「ッ」

茶々丸さんが怯んだ瞬間、彼女の背後に回り込みお札を貼りつけ体を拘束する。

捕縛結界、五角楼は相手を拘束、捕縛するためのものだ。相手の体に貼ったお札で体を拘束し動けなくすると同時に、標的を囲むようにして五枚の見えない壁が形成され外から遮断される。

自力で拘束を解くか、外部から結界を破壊するか。どちらにしる、これで少しは時間が稼げるだろう。

「ほう、東洋の結界か。さすがにそれは、解除まで時間が必要かな？」

「はい、マスター。申し訳ありません」

背後から聞こえた声に、その場から飛び退いた。

可笑しそうに笑っていたエヴァンジェリンさんだが、何やら納得がいかないという表情をして私に問うてきた。

「しかし、何故だ？ 最初のお前の一撃は、茶々丸を壊すつもりだっただろう？」

「クラスメイトの体を斬るのも、どうかと思っただんです。それに、絡繰さんを壊したらエヴァンジェリンさん、怒るんじゃないですか？」

「なんだ、私を怒らせたくないのか？」

「ええ」

力を制御されて魔法を満足に使えないとはいえ、勝ち負け以前に彼女とは戦いたくない。もつとも、彼女がそれを許してくれるとは到底、思えなかったが。

「どうしたら見逃してもらえますか？」

「言っただろう？ 私はお前をそこまで変えたのが何か知りたいんだ。それが分かれば、まあとりあえずは、考えてやらんでもない」

「……分かったところで、なんだかんだ襲ってきそうな言い方ですね」

「ふっ、どうかな」

にしても、参ったな。答えたくないし、答えなければこのまま戦うのに変わりは無さそうだ。

考える私に、ああ、そうだ、とエヴァンジェリンさんは思いついたように笑う。

「お前のやる気を出させてやろう」

「なにをする気ですか？」

「そうだな、今ここで、私を倒せなければ——近衛木乃香の血を貰う」

「……………」

ドクンツ、と心臓が音を立てるのを聞きながら、そして脳の血管が何本か纏めてプチりと切れた感覚に気づきながら、けれど私は冷静だった。

エヴァンジェリンさんの言葉は、私が予想していたものと大差なかった。

このちゃんを引き合いに出された瞬間、過去の私なら激昂して斬りかかったことだろう。そういう私も、冷静に思考しながら怒りを抱いている事に変わりはない。

「どうした、お前のその鞘にしまった刀で斬れるなら、存分に来るがいい。そこまでして

近衛を守りたいならな」

「——ええ、そうさせてもらいます」

ただし、

「刀から布は取りますし、鞘からも抜きますけどね」

湧き上がる怒りに身を任せるのではなく、理性で、冷静に、布を払って刀を鞘から引き抜く。

静かに、怒りで湧き上がる力は理性で制御して、私はこの刀を振るおう。

「神鳴流——斬鉄閃」

放つと同時に走り出し、躲したエヴァンジェリンさんの懐に入り込んで右手に握った刀を振り抜く。

大きく横薙ぎに振るわれた刀を紙一重で躲した彼女の唇がニヤリと笑った。

「はっ、隙だらけだよ」

「そうでしようか?」

飛び退く瞬間にフラスコをばら撒かれる。振り抜き伸びきった腕をそのままに、体を回転させてフラスコを宙へと巻き上げた。

頭上で爆発が起きる。足に気を籠めて地面を蹴り飛ばし、一気に詰めた距離で左手を突き出した。

「ッ!」

彼女の脇腹を狙った左手は、けれど躲されるが確かにその肌を裂き血を流させる。

「なんだ……?」

躲したはずなのに負った傷に、エヴァンジェリンさんは訝しむようにこちらを睨んで

きたが、私の左手を見てすぐに納得がいったらしい。

「なるほど、気を使っているのか」

「あたりです」

斬魔掌、弐の太刀。手の先に気を集めて剣を成し、敵を斬る技だ。

本来ならば青山宗家ゆかりの者にしか伝承されない弐の太刀だが、幸いにも私はその技を教わる機会に恵まれた。

「っ……」

くらり、とほんの一瞬だが襲った眩暈に舌打ち。霞んだ視界に、浅く息を吐いた。

「（これだけで、か……厄介な体だ）」

斬魔掌、弐の太刀。過去の私は未だ習得していない技だが、使えはするもののその代償もなかなか大きいようだ。

無駄な気を使っているのか、体への負担が大きい。多用は出来ないな。

「考え事とは、随分と余裕じゃないか」

「くあっ!!」

至近距離で、無数の爆発が起きる。体の全面で腕を構えて守りはしたが、その爆発の中からヒュツとエヴァンジェリンさんが飛び込んできた。

いくら今のエヴァンジェリンさんの腕力が小学生並みだと言っても、爆発による追い

風と、的確に急所を狙って来た拳によるダメージは大きい。

「チイツ!!」

この距離なら刀を握る右手よりも、左手の方が早い。気を集め剣を作った左手を振るうと、エヴァンジェリンさんが急な動きでその場から飛び退いた。

「ははっ、その刀はなかなか面白いな」

「そうですか」

「そうだ、桜咲利那。訂正しよう、お前は昨日までのお前より——面白くなった!!」

カラリ、と地面に転がったフラスコ。飛び退く瞬間に置いて行った置き土産に気づいてその中心から後退しようとした矢先、エヴァンジェリンさんが更にフラスコをばら撒いた。

私の頭上から降ってくるフラスコの雨に、一秒の半分にも満たない思考の後、刀を振るった。

「斬空閃!!」

「氷瀑」

爆発の寸前に、私は頭上へと斬撃を放った。直後に魔法の発動、襲ってくる爆発から空へと跳躍する。

撃ち漏らしもあり、多少のダメージは覚悟の上。頭上へと回避した私の下で大きな爆

発が起きる。

「凍れ」

「っな!？」

私の動きは読まれていた。飛びあがった私の背後に現れたエヴァンジェリンさんを振り向くよりも早く、魔法が私を襲う。

「っあああああああ!!！」

至近距離で放たれたそれに、私は無様にも地面へと落とされた。

「っ、ぐう、う……」

どしやりと叩き付けられた地面に、倒れた体を起き上がらせようと腕に力を籠めて、失敗する。

時折ぶれる視界の中、映った右腕と左腕はとところどころが凍りついていた。足や頬も冷たいことから、おそらくはそこも凍っているのだろう。

体の芯から襲ってくる冷たさと受けた傷に、体と言う事を聞かない。視線だけを巡らせてエヴァンジェリンさんの姿を探すと、彼女は私の前に下り立った。

「この程度か。まあ、中々に楽しませてもらったよ」

「こっちは、楽しくない、ですけど……」

出来るならこれで終わりにしたいけれど、それは出来ない。私はまだ、彼女を倒せて

いない。

起き上がろうと、腕に力を籠めて体を僅かに浮かせては、地面へと落ちる。エヴァンジェリンさんが驚いたように目を睜った。

「まだ立ち上がれるのか？」

「ええ、まあ………貴女を、倒さないといけない、ですから」

「近衛の為か」

不意に、不機嫌そうに彼女の眉間に皺が寄って、見下ろされる。

冷え切る体に浅く短い呼吸を繰り返しながら、私はそんな彼女の変化に首を傾げた。

「あの女の為に、どうしてそこまで頑張れる」

「それは……」

「昨日までのお前しかり、今日のお前も表面上は変わったが、結局は同じだ。何を思っ
て、そうまでする」

「……エヴァンジェリンさんには、無いんですか？」

「なに？」

「護りたいもの」

体の内側に呼びかけて、背中に意識を集中させた。

大丈夫だ、私はやれる。まだ倒れない、まだ、まだまだ、戦える。

「護りたいもの、だと？」

「ええ」

「はっ、くだらん。悪の魔法使いである私が、護るだと？ありえんな」

「そうでしょうか。私には、貴女の護りたいものが、少なくとも一つは分かるつもりですけど」

「……なんだと？」

「茶々丸さんを傷つけたら、怒りますよね？」

大切だから、護りたいと思う。大切だから、傷つけられたら怒る。

それがたとえ物だろうと、人だろうと、家族だろうと、友人だろうと。大切ならば、何も変わりはない。

大切だから、好きだから。護りたいと思う気持ちに、違いなど無い。

「私は、このちゃんを護りたいんです」

このちゃんが大好きで、大切。

だから飛ぼう。護る為にこの翼を広げて、今度こそ。

「もう二度と、傷つけたくないから」

真つ白な翼が広がる。体の底から気が溢れて、パキパキと体を凍らせる氷を剥がす。

そうして私は、空高くまで飛んでいく。翼を広げて、空へと。

「護ると、決めたんです」

その為なら何処へでも飛んで行こう。誰よりも高く、飛んでみせる——今度こそ。

友達になった日

空へと飛びあがった私を追うようにして、エヴァンジェリンさんもまた高くその身を浮かせてくる。

相対した私は、右手に夕凧を握りしめた。左手は気を集めずに、夕凧に添える。

「近衛木乃香を護りたい、か」

エヴァンジェリンさんは、くだらない、そう馬鹿にしたように吐き捨てた。

「それが、お前がそうまでする理由か？」

「はい。このちゃんを護る為なら、私はどれだけ傷つき倒れようと、何度だつて立ち上がれます」

「本当に、それほどの価値があのか？」

「……………怒りますよ？」

「このちゃんを侮辱するのは、誰だろうと許さない。

「まあ、待て。たしかに近衛木乃香は桁違いの魔力を秘めている。だが、所詮は何も知らないただのガキだ」

「真祖の貴女からすれば、私も、他の人間も皆、等しくただのガキでしょうに」

「いいや？ 私なりに違いは持っているぞ」

彼女は静かに言った。

「覚悟を持つものと、持たないものだ。少なくともお前は、お前なりの覚悟を持っているよ」

覚悟——私の覚悟は、今度こそこのちゃんを護る事。

彼女の言う覚悟がどういうものかは分からないが、私の覚悟と言えばそれだ。

「どれだけ魔力を秘めていようと、それを知らなければただのガキ……いや、魔法使いどもからすれば、いい餌か」

「それには激しく同意しますね。ですが、私の役目はそんな、このちゃんを利用しようと企む輩から、このちゃんを護る事です」

「無駄な事だな。近衛木乃香が何も知らないうちは、そんな輩は腐るほど湧いてくる。お前がどれだけ頑張ろうとな」

「関係ありませんよ。全て、この刀で斬り捨てるのみ」

「それだけでこのちゃんを護れるなら、こんなにも簡単な事は無い。ただ強くなる、それだけで良いのだから。」

「……………やはり分からんな。そうまでして近衛木乃香を護って、いったいどうするとうのだ？」

「言ってる意味が、よく分かりませんが」

「どれだけ近衛木乃香を護っても、お前は受け入れてもらえないという事だよ」

何気ない動作で、エヴァンジェリンさんがフラスコを宙へと投げた。

放たれた氷の矢を、翼をはためかせて上昇することで回避し、彼女の頭上で刀を振り下ろす。

「斬鉄閃!!」

なんてことないように、ひらりと躲される。

それは元より承知の上で、急降下して彼女に接近し、至近距離から技を放った。

「斬岩剣!!」

「はっ、甘いわー!」

ギシリと軋む音がしたと思うと、私の体は細く強い糸でがんじがらめにされていた。

振り下ろそうとした刀を持つ腕に絡む糸が、肌に食い込む。プツリと肌が切れ、血が滴り落ちた。

「そういうえば、貴女は人形遣いでもありましたね……」

「魔法が使えなくなればと思っていたか? 私も随分と舐められたものだな」

幾重にも巻きついた糸が、私の動きを制限する。無理に動こうとすれば、おそらくはバラバラになることだろう。

一気に気を噴出させるか、あるいは斬魔掌、忒の太刀を使えば糸を斬る事は可能だ。だが、問題は――

「正直、そろそろ限界か）」

本当に難儀な体だ。翼を開放して、体内の気を更に引き出したは良いが、やはり慣れない事をしているからか。

増えすぎた気が暴走して、技一つに過剰に気が上乗せされ四散する。四散した分は、当然だが私の体に無駄な負担を強いてきた。先ほど忒の太刀を使った感覚からすれば、おそらく先ほど以上に気を消費するだろう。

これ以上、無駄に気を消費したくない。ならば、何とか別の方法でこの糸を抜け出す術を考えるか。

「さて、とはいえそろそろ私の方も、触媒が切れるのでな。別の方法で続きと行こうじゃないか」

「ッ……………!!」

覗き込んできたエヴァンジェリンさんの瞳に、吸い込まれる。

そうして気づいた時、私は随分とまた懐かしい場所にいた。

「……は……」

「幻想空間だ。ここには結界の力も及ばない、私の力も制御されないからな。さつきま

でのお遊びとは違うぞ」

にやりと笑ったエヴァンジェリンさんに、私は自分の体を見下ろす。

彼女の意向か、私の服は鳥族のそれに変わっていた。まあ、こちらの方が動きやすくて良い。

「(それに)」

右手に握った夕風を見て、笑みが浮かんだ。

この幻想空間は、体の状態よりも精神の状態に強く影響を受ける。だからだろうか、万全とは言えないが、十分だと思えるくらいには体の調子が良い。

「エヴァンジェリンさん」

「ん？なんだ、命乞いなら聞いてやらんことも無いぞ？」

「いえ、そんなことはしませんよ」

しようと思うはずも無い。

「……力を発揮できるのは、何も貴女だけじゃありません」

「なに……!?!」

足に気を集める。それを爆発させて、一気にエヴァンジェリンさんの懐に入り込み、刀を横薙ぎに振り抜いた。

すかさずそれを後退して躲した彼女を追いかけ、左手に気を集めて突き出す。彼女の

右手に集まっていた魔力と衝突、爆発して、その瞬間に私たちは同時に飛び退いた。

さすがエヴァンジェリンさん、すさまじい威力だ。一歩間違えれば、確実に左手が吹っ飛んでいたと思い、冷や汗が流れる。

「まったく、随分と無茶をする」

「これくらいなら、まだいけますよ。幻想空間での傷は、実体には影響しませんから………死なない限り」

「確かにそうだ。だが、もし腕が無くなれば……」

「動かなくなるかも、ですね」

それは困るので、もちろん十分に注意はするけれど。

「神鳴流——斬岩剣!!」

「氷楯!」

振り下ろした刀は、瞬時に形成された氷の盾に阻まれる。

その場から飛び退いた私を追いかけるように、頭上からは氷の矢が降り注いだ。何度か地面を蹴り、エヴァンジェリンさんから距離を取る。

「容赦、ないですね」

「当然だ」

ふふん、と上機嫌に笑ったエヴァンジェリンさんに、私はといえば刀を構えて溜息を

飲み込んだ。

「……どちらにしろ、そろそろ終わりにさせます」

明日は普通に学校だってあるし、悠長にお喋りをしている暇は無い。これ以上、わざわざ互いを傷つける必要だって本当はないわけで……というより、そもそも私はこの戦いを望んでいなかったわけ。

「——神鳴流、決戦奥義」

「リック・ラク・ラ・ラック・ライラック」

エヴァンジェリンさんが呪文の詠唱を始める。それを止めようと思う事も無く、私もまた気を高め、意識を集中させた。

カッと互いの目が見開かれ、私は一気に地面を蹴った。

「真・雷光剣!!」

「エクスキューションソード!!」

何の因果か、はたまた偶然か。互いにぶつけ合ったこの技の組み合わせは、懐かしき学園祭の戦いで、同じようにしてこの幻想空間でぶつけ合った技と同じだった。

激しい光と、力のぶつかり合い。その衝撃で建物がガラガラと音を立てて崩れるのを聞きながら、私は夕風を握った手に力を籠めることを止めない。少しでも気を抜けば、押し切られる。

「はははっ！ 予想以上だよ、刹那!!」

「そうですかっ……!!」

「こっちは結構、いっぱいはいですよ。」

「お前は、その力で近衛木乃香を護るのか?」

「ええっ」

「たとえお前が——受け入れられないとしてもか!」

「っう……」

押ししてくる力が強くなる。踏ん張っていた足が、僅かに後ろへと押しやられた。

これは、エヴァンジェリンさんの叫びなんだろうか。彼女が抱える、私とはまた別の何かの、重みなんだろうか。

「お前も私も、人とは違う。人では無い人外の生き物だ。そんな私たちが、受け入れられると本当に思っているのか」

「っええ!」

「友達だからとでも言うつもりか? 今日のお前は、何故あんなにも笑っていられた?」

「笑ったら、いけないんですか……?」

「さあ、どうだろうな。ただ、仮初の幸せに気づかずには溺れている姿は、見てられないんだよ」

エヴァンジェリンさんの目が、寂しそうに、けれどどこか羨ましそうに細められた。

「仮初が崩れた時の絶望を味わうのは、お前にはまだ早い。だから、私が壊してやろう」
……………この戦いは、彼女なりの優しきなんだろう。

彼女は、私なんかの数十倍もの年月を生きてきた。私には想像も出来ない程の辛い出来事もあつたんだろう。

そんな彼女から見れば、今日の私は束の間の幸福に酔っているように思えたかもしれない。

烏族と人間のハーフでありながら、化け物のくせに表面上は人間のふりをして、幸せを得て。その事実を受け入れられずに拒絶された時、私がどれほど絶望するのか、それは想像もしたく無い事だ。

この思いは、このちゃんには決して分からない。人は自分に無いものを、真の意味で理解することなど出来ないのだから。

でも、それでも私は――

「信じているんです!!」

「つなを……………!!」

「今日の幸せが、嘘じゃないと!私はこのちゃんを、信じているんです!!」

「……………信じたところで、裏切られるだけだとは思わないのか?」

「思いません。だって、このちゃんは——」

『せつちゃん！』

『わつ、お嬢様!?! 急に飛びついて来たら危ないですよ』

『あはは、ごめんなく、せつちゃん。でも！』

『?』

『またお嬢様って呼んだ。嫌や言うてるのに』

『あ、う……ごめんね、このちゃん』

『……えへへ、いいよ。許したる!』

『それで、急にどうしたの?』

『あ、せやった。なあ、せつちゃん』

『なに?』

『うちらざーつと、親友でいような!』

『もちろん』

「私の、親友ですから」

ずつとずつと、そう信じてる。

光が弾けて、音が遠のく。

ふらつき、霞みゆく視界の中——地に膝をついた彼女の姿を最後に、私は地面へと倒れ、意識を失った。

うつすらとした眩しさに、私は目を覚ます。

「……………いい匂い」

目覚めた意識が、ぼんやりと最初に思ったのはそれだった。

窓から差し込む太陽の光が眩しくて目を細めながら、私は起き上がる。二段ベッドではないふかふかのベッド。

「……は、どこだ？」

「おはようございませす、桜咲さん」

「あ、茶々丸さん……………」

「……………？」

ガチャリと扉が開かれて入ってきた茶々丸さんに、思わず慣れ親しんだ呼び名を呼んでしまつて、それに気づいた時には不思議そうに首を傾げられていた。

とりあえず笑つて誤魔化すと、ベッドから下りて部屋を見回した。

「……は、エヴァンジェリンさんのお家ですか？」

「はい。昨夜の戦闘後、桜咲さんは倒れたまま目覚めませんでしたので、マスターが連れて帰るようにと」

「そうだったんですか……ありがとうございます」

「いえ。リビングでマスターがお待ちです。どうぞ」

案内されるままに着いていくと、リビングのソファアームに大仰に座るエヴァンジェリンさんがいた。

「起きたか」

「おはようございます、エヴァンジェリンさん。とりあえず、ご迷惑をおかけしました」
「ふんっ。仕掛けられたのはお前の方だというのに、変な事を言う奴だ。まあいい。座れ」

促されて、私は彼女の向かいの席に座った。すぐに茶々丸さんがお茶を出してくれて、小さく会釈する。

茶々丸さんがエヴァンジェリンさんの後ろに控えて、それを待っていたように、さて、と口を開いた彼女に私は身を固くした。

「昨日の事は、覚えているな？」

「はい。結局、勝敗はどうなったんですか？」

「私の勝ちだ」

勝ち誇るでもなく、あつさりと言げられた答えに、けれど私は然したる動揺もしない。その結果は、私が思っていたものと同じだったからだ。

「幻想空間においては、私はたしかに膝をつきはしたが、お前は倒れている。その時点でお前の負けだし、現実に戻っても尚、お前は起きなかつた。対して私は意識もあつたし、茶々丸もいた。お前を殺すことは容易だったよ」

「そう、ですか」

「…………弱くなつたな。いくらエヴァンジェリンさんが相手だったとしても、仮にも力を制御されている相手に対して、意識も保てず気絶してしまうなんて。」

「情けない…………」

「ん、どうした?」

「いえ。なんでもありません」

まあ、修行のやり直しとかそういうのは後で考えるところとして、とりあえず今この場をどうしようか。

エヴァンジェリンさんの話でいけば、私は完膚なきまでに負けてしまっているわけだが、だからといってここで、はいそうですかと引き下がることは出来ない。

出来れば戦うことは避けたいが、残念ながら彼女に勝たなければこのちゃんを襲うと言われているから、戦闘は避けられない。このちゃんを護る為にも、なんとしても勝た

なければいけないわけだが。

卑怯かとは思いますが、今すぐに斬りかかって第二試合と付き合ってもらえるか。幸いにも、体力は回復している事だし。

「おい、何を考えている?」

「いえ」

「物騒な事は考えるなよ?別に、近衛木乃香を襲ったりはせん」

「あ、そうですか」

なんだ、それなら安心だ。

「……あからさまに殺気が収まったな。わざとか?」

「まあ、半分くらいは」

はあ、と深く深く、呆れたように溜息を吐かれる。

さすがに昨日の今日で、これ以上の戦闘をするつもりは彼女にも無かったようだ。

「まあいい。それよりも、負けたんだからな、お前の身に何があつたのかを話せ」

「……そんな約束はしてないじゃないですか」

「近衛木乃香を襲わないと言っているんだ。当然の代償だよ」

たしかにそうかもしれないけれど、相変わらず理不尽な……でも、話すだけでこのちゃんを護れるというなら、それで良いのかもしれない。

実際に話したところで、信じてもらえるかは分からないけれど。

「大まかな事でもいいですか？」

「それで理解できるなら、構わん」

「では……私は、今から数十年先までの未来の記憶を持っています」

そんな始まりで、私はエヴァンジェリンさんに私の身に起きた事を話した。

真名よりも詳しく、けれど真名と同じように大きな事件や出来事にはあまり触れず、ただ漠然と未来について知っているだけで。

説明を終えた私に、エヴァンジェリンさんは難しい顔をして、睨むように私を見て言った。

「本当にそれだけか？」

「それだけ、とは？」

「納得いかないんだよ。ただ未来の記憶を持つていただけというなら……お前が、昨日までのお前よりも、近衛木乃香に対する想いが強い理由がな」

「ずっと一緒にいたんです。それだけでは理由になりませんか？」

「なるな。だが、ただ一緒にいただけで、お前は今の近衛木乃香との再会に泣くのか？」

「……………」

そういうえば、教室に戻った私とこのちゃんの目は、はた目から見ても分かるくらいに

赤くなっていたんだっけ。

まあ、確かに彼女の言う通りではある。ただ唐突に、記憶が今日まで戻って来ただけなら、私だってあんなに取り乱すような事は無かった筈だ。

「言え。私は、お前が変わった理由が知りたいんだよ」

「……………分かりました」

誤魔化しは出来そうに無い。実際の話、見た目はともかく彼女の方が私よりも年上であることに変わりないんだから。

私は落ち着かせるように軽く息を吐いた。

「私の目の前で、このちゃんが死にました」

毒を盛られて、魔法を封じられて、殺された。死んだ。私は何も出来なかった。護れなかった。

だから私は、今度こそこのちゃんを護りたい。このちゃんが幸せに生きていける未来へと進みたい。

これ以上は何も言えない。昨日までの私と何が違うのかといえば、それは未来を知っているとか、そんなこと以上に——このちゃんが死んでしまったのか、否かという事だから。

「……………なるほどな。たしかに、それならお前の変わりようも納得がいく」

エヴァンジェリンさんは納得したように呟き、それ以上の説明を私に求める事は無かった。

「ついでに言えば、お前の戦い方が妙だった理由も分かったよ」

「え？」

「過剰に気を使っていただろう？ 随分と雑な使い方をすると思っていたが、あれはお前の意思では無いな？」

「……はい」

気づいていたのか。

「大方、中身の實力に外側が着いていけなかったか。未来のお前が習得した技術は、今のお前の体には難しかったんだろう」

「ええ、おそらくは……どうにも、勝手が違うようで」

精神と記憶に伴った経験が先走って、経験の無い体が着いていけない。刀を振るうにも気を使うにも、体だけが置いてきぼりを食らう。

「まあ、実際の経験が中身にある分、成長も速いだろう。精々、死ぬ気で励む事だな」
「そうします……」

なつてしまったものはないとはいえ、やはり記憶よりも弱くなつてしまった事に対するショックはある。

とりあえず、そうとなれば修行のやり直しをするしかない。暫くは、警備の仕事でも気をつけないな。気を使うのも満足に出来ない今、昨日のように二の太刀を使ったりすれば、すぐに気が底をついて倒れるのは目に見えている。

「で、だ。刹那、未来から戻ったお前は、これからどうするつもりでいたんだ？」

「どうするもなにも、このちゃんを護りますよ」

「それは聞いた。お前は近衛木乃香に、全てを話すのか？」

「……………魔法については、今、長の方でも話しているのです。そちらが終わるまでは、何も」
「お前の存在についてはどうする？信じているんだらう？」

試す様に、エヴァンジェリンさんが言ってくる。

私の存在、鳥族という異形とのハーフである事を、このちゃんはまだ知らない。

「翼については、このちゃんにはまだ話しません。魔法にも近い事ですから」

「言い訳だな。どれほど綺麗ごとを言ったところで、結局お前は拒絶されるのが恐いんだらう？」

「……………このちゃんは、大丈夫ですよ」

少し、嘘が混ざる。それを敏感に感じ取ったエヴァンジェリンさんの目が、剣呑に煌めいた。

似た境遇だけに、こういう事は誤魔化せそうに無いかなあ。

「……………認めてくれるって、信じてます。確かに、少し恐いですけど……………そう思うのも、仕方ないんじゃないですか？」

過去に一度でも迫害され、拒絶を受けたなら、それはいつまでも消えない。

根強く、根深く、心に突き刺さって、その事実を私に忘れさせてはくれない。

なら、私はそれに恐怖したままでいるしかないのか？

内心で怯えながら、それを隠して自分を偽って、仮初の幸福を喜ぶしかないのか？

昔の私なら、それも仕方ないと諦めただろう。卑屈になって、自分を卑下して、私は化け物なのだから仕方が無いと。

でも、そうすると、このちゃんが怒ったから。皆が、怒ってくれたから。

だから私は、違うと叫ぼう。

「それでも恐怖を飲み込んで、踏み出さないと……………先へは進めませんから。私は、このちゃんを信じると決めたんです。だって、友達ですから」

「はっ、また友達か。その仲良しこよし、いつまで続くかな」

「友達でいる限り、いつまでも続きますよ」

「ふうん……………」

認めようとしてくれないエヴァンジェリンさんに困りながら、けれど何だか笑ってしまっ
まいそうで。

だって、目の前の彼女はまるで拗ねている子どものように。私の数十倍は生きている筈なのに、そう見えてしまうのはやはり、見た目が原因なんだろうか。

「あの、エヴァンジェリンさん」

「なんだ？」

「そんなに疑うのでしたら……私と、友達になってもらえませんか？」

「はあっ!？」

心底から驚いているエヴァンジェリンさんに対して、私は顔が熱くなる。

正直、改めてこういう事を言うのは初めてで、これはなかなかに恥ずかしいし、緊張すると思った。このちゃんも明日菜さんも、気づいたら友達だったり、親友だったり、師弟だったり、私から何か行動を起こしたというわけでもないから。

うん、自分から言い出せるようになったあたり、成長はしているんだなあ。

「な、何故私が……」

「仲良くしてもらいたいですし、それに……エヴァンジェリンさんが悪い人じゃないって、知ってますから」

「私は、悪の魔法使いだぞ!？」

「知ってます。でも、私の事を心配してくれる、優しい人です」

「んなっ……!!」

あ、赤くなった。照れてるみたいだ。

エヴァンジェリンさんのこういう姿は、あまり見たことが無くてとても新鮮だ。新しい彼女を知れた気分になって、何だか嬉しい。

「それで、どうですか？」

「……………ふんつ、まあ、なんだ。お前の言う友達ごっこことやらが、どういうものか……………まあ、付き合つてやらんことも無い」

「ありがとうございます」

つまり、友達になってくれるという事で。なんと言われようと、私にとってそれはとても喜ばしい事だ。

「あの、ちゃちゃま……………絡繰さん」

「茶々丸で結構です、桜咲さん」

「あ、なら私も刹那と……………それで、ですね。よかつたら茶々丸さんも、友達になれると、嬉しいんですが……………」

きよとん、と茶々丸さんが驚いたように見えた。といつても、いう程に表情が変化したわけでは無く、無表情なのだけ……………私にはそう見えた。だから、それでいい。

「友達、ですか。構いませんが……………」

「よかつた。こういうのもあれですけど……………よろしくお願いします」

「ふんっ」

……にしても、エヴァンジェリンさんはあれだろうか。あの、たしかツンデレとかいう……。

「今、妙な事を考えなかったか？」

「いえ、別に」

彼女の前で下手な事は考えない方が良さそうだ。でなければ、氷漬けにされかねないだろうから。

常識人と会った日

エヴァンジェリさんと茶々丸さんと晴れて友達になった後、私は泊めてもらったことと怪我の手当てをしてももらったお礼に、朝食の準備をすることにした。

といつても、真名の時と同様、いたつて普通の朝食だ。けれどエヴァンジェリさんにはとても喜んでもらえたし、茶々丸さんもまた、栄養の摂取をする事は出来ないけれど味覚はあるそうで、美味しいと言ってくれた。

どこの料理人が、食べた人に美味しいと喜んでもらえるのが一番幸せだと言っていたが、なるほど。確かにこれは嬉しいものだ。

二人とも、特にエヴァンジェリさんは日本茶が好きなのだし、今度お茶菓子に和菓子を作ってみようかな……喜んでもらえると良いけど。

「おおお!!? こっつ、これはどういう事だあつ!?!」

「あ、せつちゃーん」

そのまま二人と一緒に学校に行くことになった。制服は茶々丸さんが持つてきてくれたんだけど……いつの間持って来たんだらう。私が寝てる間にだらうか?

教室に入ると、どういいうわけか昨日と同じように視線を集めた。理由は不明だ。

そこに、このちゃんが何だか安心したように駆け寄ってきて、どうしたのかと思いつつ笑いかける。

「おはよう、このちゃん」

「せつちゃん！ おはよーさん」

「……どうかしたの？　なんか、慌ててたみたいだったけど」

目の前で立ち止まったこのちゃんに続けて聞いた。

「んとなー、せつちゃんと一緒に学校に行こう思ったら、いないって真名ちゃんが言うてな。どうしたんやろう思ってたんや」

「ああ、そつか。ごめんね、このちゃん」

「ええんよ、うちも急やったし。あ、エヴァちゃん、おはようさん」

「……ああ」

ふいっと顔を背けて自分の席に座るエヴァンジェリンさんと、そんな彼女を追う茶々丸さん。二人とも、この分だとクラスに馴染むまでまだまだ時間がかかりそうだ。

「ね、ね、桜咲さん。これは一体どういうこと？　何があったの？」

「は……？」

マイクを持って突撃してきた朝倉さんに聞かれて、けれど何を言っているのか分からず首を傾げた。

周りを見るとクラスの方たちが興味津々といった眼差しをこちらに向けていて、それこそ、いつ、昨日のように雪崩になって襲ってくるか分からなくて恐怖する。

思わず後ずさったところに、ズイツとマイクを差し出されて思わず問い返した。

「なにがですか……?」

「マクダウエルさんの事だよ。クラスでも殆ど話さない彼女に茶々丸さんまで加えて、それで三人で登校つてどういう事? 何があつたのさ」

「えっと、そう言われましても……」

まさか、昨日一晩戦つた挙句、朝ご飯を一緒にしましたなどと、とてもじゃないが言えるはずも無い。

「うちも知りたいな。せつちゃん、教えて?」

「このちゃんまで……」

朝倉さんとはもかく、このちゃんにまで聞かれるとなると、答えないわけにもいかなくて。

でも、どうしよう。正直に話せるはずもないし……誤魔化すか?

「今日は、少し早めに出て散歩でもしながら行こうと思つて……そしたら偶然、ばつたり」

「そつかあ。なら、今度はうちもせつちゃんと散歩する」

「あ、うん。分かった」

「んー、それならただの偶然かあ……ねえ、本当はどうなの？　一晩かけてじっくりねつとり何かあつたりは」

「しません！」

何を期待してるんだ、この人は!?

放課後、手合わせを求めろクーフエイと長瀬から逃げるように教室を飛び出して、私は寮への帰り道を歩いていた。

このちゃんは占い研究部に出ると言っていたので、一緒にはいない。心配ではあるが、今となつては部活に出ると言うこのちゃんをつけ回すのも気が引けた。

だから、お願いしてお守りをも一つ持ってもらう事にした。普通のお守りではなく、お守り袋の中には私が作ったお札が入っている。

効果は、このちゃんに危険が迫った際にそれを私に知らせるものだ。同時に居場所も教えてくれるので、私はいつでもこのちゃんの元に駆けつける事が出来る。

一番望ましいのは、常に一緒にいて直接護る事なただけ……生活する分に、さすがにそれは無理という事だ。なら、その中でいかにしてこのちゃんを護るか考えないと。

「(この後は、どうしようかな……)」

このちゃんの事は一先ずこれで様子を見るとして、寮に帰った後はどうしようか。

修行も必要だが、せっかくだしエヴァンジェリンさんの所へお邪魔してみようか。もつと仲良くなれば嬉しいし……あれ？ でも、たしかエヴァンジェリンさんって学園側から監視されてたり、したような……まあ、問題があれば向こうから言ってくるか。そもそも、私は友達に会いに行くだけなんだし。ああ、でもよく考えると、エヴァンジェリンさんって魔法使いなんだよなあ。西としてもそれはあまりよくない……いやでも、今の私は対外的に西の裏切り者扱いなんだし、それなら……うん、もういい。友達に会いに行くってことで通そう。友達なのは事実なんだし、うん、そうしよう。深く考えすぎると動けなくなりそうで、これ以上の思考は止めておく。

考えすぎると、自分で抜け出せなくなるのは昔からの悪い癖だしなあ……。

「と、あれは……」

考え事から抜け出したところで、前方に見覚えのある後ろ姿を見つける。千雨さんだ。

本でも読んでいるのだろうか、足元への注意が少し不足してるように見える……あ、躓いた。

目の前で転ぶのを見捨てる事も出来ず、地面を蹴り一気に千雨さんとの距離を詰める。と、倒れかけた彼女の腕を掴んで後ろへと引いた。ぐんつ、と勢いよく引き戻された千

雨さんが、驚いた顔で振り返る。

「大丈夫ですか？」

「あ、ああ……ありがと」

「どういたしまして」

お礼を言いつつ、どこから現れたんだ？ とばかりに千雨さんが私を見る。まあ、私は彼女の後ろにいたし、それなりに距離もあつたから気づいていなくて当然か。

でも、だからといってそこまで不思議そうに、不審げに見なくても……ああ、そうか。

麻帆良全体に認識阻害の効果が及んでいるから誰も気にしないが、突然、こんな風の人がすぐ傍に現れるのは、普通の人からすれば可笑しなことなのか。

たしか千雨さんは、認識阻害が効きづらい体質だった筈……だから、こんなに不思議なものを見たという顔をするんだろう。

「寮へ帰るんですか？」

「ああ」

「よかつたら、ご一緒しても良いですか？」

「……別に、かまわねえよ」

本をしまった千雨さんが歩き出すのを追って、私も歩き出す。

隣に並んだはいいものの、どちらも何も話すことなく、ただ無言で歩いていた。

「……………なあ」

「はい？」

不意に、千雨さんが口を開いた。

「今朝、絡繰たちと一緒に学校に来てただろ？」

「ええ」

「どう思った」

「……………」

千雨さんの問いかけの意味。曖昧で、そこに籠められた意味とはなんなのか。

聞いた彼女はどこまでも無関心を装いながら、鞆を持つ手は強く力が入り震えていて。

私はといえば、彼女の問いかけに答えを返さず、首を傾げた。

「長谷川さんは、どう思うんですか？」

「……………」

問い返されるとは思わなかったのか、千雨さんはぴたりと足を止めてしまった。

つられて私も立ち止まり、一分だけ先に進んでしまった体を振り向かせた。頼りなく彷徨う瞳を見上げる。

「聞きたいのは、茶々丸さんの性格についてですか？ それとも、彼女がロボットである事についてですか？」

「ッ!!」

驚愕に目を見開いた千雨さんが、それから嘔みつくように叫んだ。

「分かるのか!?!」

彼女が知りたいのは、後者。

誰もが茶々丸さんをクラスメイトとしてしか認識していない中で、彼女をロボットだと認識し、考えるのか否か。

「……………ロボットがクラスメイトなのは、可笑しいですか?」

「普通に考えたら可笑しいだろ? ってか、絡繰だけじゃない。他の奴らだって変だろ、異様にガキみたいにな奴とか、有り得ないくらいに運動神経が良いとか……………極めつけは」

「子ども先生」

私の言葉に、力なく千雨さんは頷いた。

……………なるほど、千雨さんはこういった事に悩んでいたのか。

私たちの世界からすれば、子どもを力が持っているのは何ら不思議な事では無い。子どもが大人を倒すのが当たり前に起こりうる実力世界だからだ。

けれど、彼女はそうでは無い。千雨さんは普通の、この麻帆良には通用しない外の常

識を持った存在だ。彼女にとって、私たちの世界で起こりうることは、有り得ない事ではない。

「おかしいだろ、なんで誰も不思議に思わないんだよ。常識とか、法律とか、いろいろあるだろ……」

私を話しが通じる人間だと捉えたのか、千雨さんは弱弱しく言葉を紡ぎ出した。

「有り得ないことばかりなのに、誰も不思議に思っちゃいない。オリンピック選手なんか足元にも及ばないくらいの運動神経とか、異常に発達した科学技術とか、麻帆良の外と比べたらここは可笑しすぎる。あちこちで普通に乱闘があつて、なのに誰も危険だとか思わないし、観戦まで始めちゃう……意味がわかんねえよ。なあ、これが普通なのか？　ここが可笑しいんじゃないか？　私が可笑しいのか？　私だけが変なのか？」

「……可笑しくないし、変じゃないですよ」

千雨さんは、可笑しくしないで。継るような瞳を向けてきた千雨さんにそう言うと、途端に彼女は泣きそうに表情を歪めてしまった。

「……長谷川さん」

「……どうしよう、さすがにこの場で泣かれるのは困る。」

「……長谷川さん」

「……本当は、私がここまでする義理も義務も権利も無い。」

ただ、今にも泣き出しそうな彼女を見たら、このまま放っておく事が出来なくて。

「ちよつと失礼しますね」

「は？……おわつ!?!」

よいしょ、と千雨さんの後ろに回って横抱きにする。身長差はあるけれど、これくらいなら平気だ。

「で、長谷川さん。貴女にはきついかもしれないですけど」

「あ……?」

「貴女の言う『異常』を、体験してください」

言つて、私は気を集めた足で思い切り地面を蹴った。

飛ぶようにして跳び上がったその高さ、その速さはまさしく、彼女の言う異常だった。

寮へと帰ってきたところで、とりあえず千雨さんを私と真名の部屋に招待する。真名がいないのは好都合だ。

ぐつたりとしていた彼女を座らせて、私はお茶を淹れはじめ。日本茶に、お茶菓子は真名が昨日買つて来たまんじゅうだ。後で新しいのを買ってこよう。

「どうぞ。少しは落ち着きましたか?」

「あー……………あんまり」

「そうですか」

それも無理は無いと、苦笑いしてお茶を飲む。一息吐いて、問いかけた。

「それで、どうでしたか？ 自分で体験した異常は」

「普通にありえねえよ……………」

「だと思えます。でも、麻帆良はその異常が普通に出来る人がたくさんいて、しかもそれが容認されているんです。まあ、裏事情も色々ありますけど、それについては聞かない方が良いでしょう」

「危ない事なのか？」

「そうですね。生死を賭けるくらいには」

「……………」

そういう世界だから、むやみやたらに人を巻き込んではいけない。それは暗黙のルールといっても良い。

それなのに、私が千雨さんを放っておけなかったのは、第一にやはりあの時の彼女が泣きそうだったからで。そして、あのまま放っておいたら、彼女はまた長い時間を一人で悩み続けなければならぬから、そう思うと見捨てる事が出来なかった。

私に出来る事があるなら、彼女の力になってあげたいと思ってしまった。

「愚痴とか、話したい事があつたら、いつでも来てください。話し相手くらいには、なれますから」

「いいのかわ？」

「もしも長谷川さんが、私みたいな異常でも良いと言つてくれるなら」

「……………その、悪かつた、な」

「構いませんよ」

千雨さんが謝ることは無い。彼女から見れば私が異常なのは分かり切つてゐる事だ。

それに私は、文字通り化け物なんだから、普通じゃ無いなんてとつくの昔に自覚してゐる。

「普通じゃ無いのは分かつてるんです。でも、私はその異常であれる事を、誇りに思つてます」

「誇り？」

「人とは違うけど、そうだからこそ出来る事があるんです」

大切な人を護る事が出来る。

「……………ああ、そうだ。それから」

不意に思い立つて、机の引き出しからお札を二枚、取り出した。といつても、どちらも封をしている状態で、それを解除しないと使えない。

「長谷川さんは、危険を事前に知ることが出来るのと、危険に陥ってから助けが来るの、どちらが良いですか？」

「は？」

引き出しの奥から更にもう一つ、お守り袋を取り出してから元の席に戻る。

意味が分からないという顔をした千雨さんに、どう説明しようか考えながら口を開いた。

「たとえば今、歩いている道の先に危険があつたとします。それを自分に知らせてくれるものと、自分には分からないですけど、長谷川さんに危険が迫っていることを私に教えてくれるもの、と言えば良いでしょうか。持つとしたら、どちらを持ちたいですか？」

「……………えつとさ、その答えの前に、一つ聞いても良いか？」

「どうぞ」

「どういう仕組みなんだ？」

「それは聞かない方が良いでしょう。長谷川さんの思う異常と同じですから、ただそういうものなんだと思ってくれば」

それだけで、彼女には十分だ。

「……………自分で危険を避けるのと、危険から助けてもらうものって事だよな。なあ、どっちも持つってのは駄目なのか？」

深く考えるのは止めたようで、ただ私の説明から千雨さんそう聞いてくる。私は首を振って返した。

「この二つは相性が悪くて、どちらかしか持てないんです。どうしてもとおっしゃるなら、二つとも差し上げますが……」

「ああいや、いい。中途半端になったら元も子も無いんだろ？」

「ええ」

「なら、どっちか決めさせてもらおうわ」

「そうしてください。持っていて困る物でも無いと思いますから」

事実、この麻帆良において危険への対処が出来るものは持っていて損は無い。特に、私たちのような危険にすぐさま対処できるわけでは無い、千雨さんのような一般人は。

「……なあ、私に危険が迫ったら、桜咲に教えるってやつだけとき」

「はい」

「もし、本当に私に危険が迫ったとして、お前はいつたいどうするんだ？」

「やれるだけのことをします」

その時の私に、やれるだけの事をして護る。

このちゃん以外の人も護るつもりなのかと言われれば、護ると答えるしかない。

護れるのかと言われれば——護れると、答えるしかない。

「長谷川さんを、私に護らせてくれるというなら、私は出来るだけの事をします」

見てしまったら、触れてしまったら。私は護りたいと思ってしまうから。傷ついてほしくないと思ってしまうから。

手を伸ばして、掴むことが出来るんだと思ったら、護りたいなと思ってしまうのは、どうしてだろう。

「……桜咲つてさ、見かけによらずお人よしなんだな」

「あはは……そうでしょうか」

「そうだよ。じゃなきや、お前が私にここまでする必要なんて無いだろ」

「……………そうですね」

千雨さんからすれば、私はただのクラスメイトで。それどころかまともに話したこと無い筈だ。

だから、私が彼女の為にここまでする必要は、彼女の言うとおり最初から無かったんだ。

「(このちゃんだって)」

二年間も、冷たい態度ばかりだったのに、突然変わった。驚いただろう、混乱しただろう。

私は彼女たちを知ってるけど、彼女たちは知らない。歩いてきた道のりが違う――

「おい、桜咲？」

「あ……」

どうしたんだ？ 首を傾げて訝しむ千雨さんに、慌てて笑みを浮かべると首を振った。

駄目だな、考えすぎて抜け出せなくなるのは悪い癖だって、さつきも思ったはずなのに。

「えっと、すみません。もう一度お願いします」

「ああ、だからさ……危険に近づかないで済む方法、教えてほしいんだよ」

「近づかない方法、ですか」

強く頷いて、千雨さんが続ける。

「方法ってか、危険な場所とかさ。そういうのを教えてほしいんだよ」

「これには頼らず、自分で危険を回避するということですか？」

「ああ……それで、まあ、あれなんだけどさ」

視線を彷徨わせて、彼女にしてはなんともはつきりとしなない様子で、口を開いた。

「私自身が何もしないで、任せっぱなしって気がしてなんか、気が引けるっつうか……」

「……………」

そんなことは無いと思っただけれど、何も言わずに言葉を待つ。

千雨さんは、彷徨わせた視線を落ち着かせると、ジツと私を見て言った。

「危険な目に合うのは恐いから、逃げる。でも、もしなんかあった時……頼んでも、いいか？」

「もちろんですよ」

笑って、このちゃんに渡した物と同じお札を小さく折ってお守り袋に入れる。封を解くのは忘れずに。

それを差し出すと、千雨さんはどこか緊張した風にそれを手に取って、私はそれを見てまた話しだす。

「では、危険の避け方について話しましょうか」

「あ、ああ。頼む」

「まず、危険を避ける方法……危険に遭遇しない為に注意すべき事について話します」
「……………」

固唾を飲んで続きを待つ千雨さんに、私は続けた。

「危険な場所には近づかない、夜遅くに散歩かない、不審な物に手を出さない、近づかない、変な人には着いて行かない、人気のない場所は避ける、それから……」

「ちよ、ちよつと待て！　なんだそれ、まるつきり普通ってか、当たり前みたいなの……」

「ええ、そうですよ」

事も無げに頷いて見せると、千雨さんは呆気にとられた顔をした。

「危険は、どこにでもあるんです。ただ、その危険が外に比べれば多くて、下手をすれば死んでしまうものが多いから、危ないだけで」

外で言う夜に出没する不審者が、殺人鬼や妖怪に変わる。それが麻帆良だ。

ただの人間の不審者でも不安を煽るし十分に危険なのに、妖怪となればそれ以上に危険だし、ただの変質者で済まない殺人鬼が現れたのでは、生死に関わるその危険度は計り知れない。

「特別な対処法というのはありません。あるとすれば、それは異常になる事でしょうか」
麻帆良にいる異常は、私たちだけじゃない。例えばその辺を歩いてる人たちだって、異常といえれば異常だ。

危険が蔓延る麻帆良を普通だと思っている、それだけで十分だ。

「だから、基本的には今言ったことを守ってください。それだけでも、危険に遭遇する確率は減りますから」

「……分かった。なら、お前が言った危険な場所ってどんなところなんだ？ 見分け方

とか分かれば有難いんだけど」

「そう、ですね……長谷川さんは、この麻帆良で異常な場所って何処だと思いますか？」「全部」

「……………」

早い回答だった。

「えっと、一際おかしいところってありませんか？ なんでもいいんです」

「んー…………まあ、いろいろありすぎっけど、世界樹は異常だろ。あんなでかい樹がギネスにも登録されてないし、普通ならテレビの取材があつてもいいくらいだつて」

「たしかにそうですね」

頷いて、私は言う。

「世界樹も、常にはありませんが危険な場所の一つです」

「は……………？ただでかいだけの樹じゃないのか？」

「色々とありまして、言った通り普段から危険という事はありません。ただ、時期によっては近づかない方が良い場所になります」

「……………」

「危険な場所の見分け方、ということでしたが……………言つてしまえば、明らかに異常だと思う場所は危険なんです。他にもどこかありませんか？」

「……………図書館島」

「地上は大丈夫ですが、地下には絶対に行かないでください。地上でも、出来ればあまり奥まで行ったり、遅くまで残る事はしない方がいいですね」

広すぎるあの図書館は、このちゃんも所属する図書館探検部の活動場所ではあるけれど、正直近づいてほしくない。あそこに集まる魔力もまた強いから。

「そういつた場所に近づかないのが、一番の対処法です」

「……どんだけ危ないんだよ」

「それは、長谷川さんがよく分かっていると思えますよ」

「ああ、そうだな。たしかにまあ、そう思うよ」

疲れたように息を吐いた千雨さんが、自信なさ気に言った。

「そこら中にあると思うと、避けきる自信無くすわ」

「だから、それを常に持つていてください」

彼女の手に握られたお守りを指差して、私は笑いかけた。

「危険を避けようと考えるだけ凄い事ですよ。だから、どうにもならなくなったときは、

私がどうかしますから」

安請け合いをするつもりは無い。やると言ったからには、やる。

このちゃんを護る。でも、護れるなら千雨さんだって、私は護りたい。

「……………本当、お人よしだな」

「あはは」

そんなんじゃないと、私は言葉も無く否定した。

図書館島初探検の日

「そういえば刹那、テスト勉強はしてるのか？」

「テスト？」

夜、仕事も無く自由に時間を過ごしていたところで、銃の整備をしていた真名が唐突に聞いてきた。

読んでいた本から顔をあげ、そういえばそんなものがあつたなと思ひ出す。

「拙いな、すっかり忘れてた……」

「大丈夫なのか？ バカレンジャーとまではいかないが、お前も結構悪かつただろう」

「……」

本を閉じて、机に置いていた鞆から教科書を引つ張り出した。最近の授業については真面目に受けていたが、実際のところどれほどのものか。

国語、数学、英語……一通りの教科書に目を通してテスト範囲を確認。パタリと閉じて、ほつと息を吐いた。

「大丈夫だ。上位とまではいかないが、ある程度は分かる」

「……それもそうか。少なくとも、私たちよりは勉強をしている筈だしな」

「昔の話さ」

このちゃんと共に、大学まで進んだ身だ。さすがに中学生レベルの問題なら、最後に勉強したのが随分と昔でも、授業で再度教えられれば思い出せるし、理解も出来る。

「……まあ、一応は勉強しとくか」

間違つてもバカレンジャーの一員にはなりたくない、強く思った。

テストが近づこうと変わらず騒がしいクラスだが、ネギ先生は何やら色々大変らしい。誰かが言い出した英単語野球拳は、明日菜さんたちが悲惨な目に合う結果で終わった。

そして、その日の夜。

「図書館島？」

『そうや〜』

エヴァンジェリンさんの自宅にお邪魔していた私に、このちゃんから電話がかかってきた。

なんでも、図書館島にある魔法の本を探しに行くとか………そういえば、テストが近づいた時期に、このちゃんが行方不明になった筈だ。それで授業をサボって随分と探し回ったような………まさか、これが原因か？

「このちゃんも参加するの?」

『うん。のどかとパルが地上で連絡係やるから、うちと夕映は地下からの連絡係や。せつちゃんこの前、探検に行くときは一緒に行く言うてたやろ? どうかなく思ったんやけど』

「そっか。うん、私も行きたい。待ち合わせは?」

『七時に図書館島の入口や。必要な物はうちが持つてくから、せつちゃんは手ぶらでええよ』

「うん。絶対、先に入らないでね?」

『了解や』

さて、図書館島か……あそこ、地上はともかく地下には色々と仕掛けがあった筈だが、魔法関係とは違うのだったか?

どちらにしろ、このちゃんだけで行かせるには不安が多い場所であることに間違い無さそうだ。

「近衛木乃香か?」

「ええ。図書館島の奥にある、魔法の本を探しに行くそうですよ」

「魔法の本ねえ……」

くつくつと、喉を鳴らしてエヴァンジェリンさんが笑う。

「本当にあるんでしょうか？」

「さあな。だが、そんな物があつたとしたら、間違いなくあの爺の仕業だろうな」

「学園長ですか……」

「知らず知らずに、魔法に関わらせるつもりなんだろうよ。じやなきや、あんな偏つたクラス編成は有り得ん」

「それは、そうですね」

昔の私は、とくに不思議に思う事も無かつたが……こうしてみると、たしかに可笑しな編成だ。

英雄と呼ばれた魔法使いの息子が担任になつたクラスは、学園きつての強者、曲者揃い。エヴァンジェリンさんが改めて調べてみた結果を聞いたが、うちのクラスの人間の潜在魔力や身体能力は、どうやら他の人間よりも桁違いらしい。

優秀な従者になれる、そう言ったのは彼女だ。

「（このちゃんも、その一人か）」

疑いたくはないが、こうして見ると学園長は私にとつていささか危険な存在だな。あちらにも考えがあるのだろうが、このちゃんのことを無視して密かに巻き込もうなどと……。

「なんだ、随分といい顔をするな」

「……………」

「鏡でも見たらどうだ？ なかなかに悪の顔だ」

「……………嫌ですね、そんな顔は」

そんなにひどい顔をしていたかな。そう思つて苦笑いしたところで、エヴァンジェリンさんが立ち上がった。

「さて、お前が行くなら、私は久々に桜通りに顔を出すとするか」

「止めるつもりはありませんが、テスト前ですから程々にしてあげてくださいよ？ 勉強

強もしないといけないでしょうし」

「分かっているさ。まったく、お前のせいで溜めていた魔力も消費してしまつたし、暫くはまたばれないように溜めなおしだ」

「……………私のせいじゃないですよ」

最初に喧嘩を売ってきたのは、そっちなんだから。

待ち合わせの七時まであまり時間は無かつたので、エヴァンジェリンさんの家を出てそのまま真っ直ぐ図書館島に向かった。ジャージで来ていたのは幸いだな、さすがに探検となると、制服では動きづらかつただろう。

「せつちゃん」

「このちゃん」

図書館島の入口で、このちゃんが手を振っていた。

「他の人たちは？」

「皆、先に侵入入口に行ってるえ〜」

「(侵入入口……?)」

どういふことか、案内されるままに着いて行けば言葉の意味はすぐに理解できた。

図書館島探検部しか知らない秘密の入口……つまり、普通なら入ってはいけない場所に入る為の入口、ということだ。まあ、仮にも魔法の本などと言われているんだ。さすがに普通の場所には無いか。

「あ、桜咲さんだー！」

「なになに？ 桜咲さんも一緒に行くの？」

「え、ええ、まあ……」

侵入入口まで行くと、明日菜さんと佐々木さんが声をかけてきた。

そういえば、魔法の本を探するのはバカレンジャーの為とか、このちゃんが言ってた気がするけど……嫌な予感がした。

「おおつ、刹那！ こんなところで会えるとはラッキーアル、勝負するアルヨ!!」

「今日は逃がさないでござるよ」

やっぱり、とがっくりと肩を落とす。嫌な予感はやたつた。

バカレンジャーも参加するという事は、当然のようにクーフエイと長瀬もいるわけで、顔を会わせればそのたびに勝負を求めると二人だ。こうなるのは目に見えていた。

今は相手をしてる場合じゃないって言うのに……。

「これから侵入するんだろ？ 騒いだら見つかるぞ」

「そう言つて、また逃げるアル！」

「でもな………分かった。テストが終わつたら手合わせするから、今は大人しくしてくれ」

「約束でござるよ？」

「ああ」

仕方なしに約束を取り交わして、この場は二人を治める。

いつまでも逃げ切れない、か。まあ、体の動きを慣らすには修行しかないし、どちらにしろいつかは手合わせをしなければならなかつただろう。それなら、全力でやるだけだ。

………それから、

「(なんで、ネギ先生がいるんだろう)」

さつきから気になっていたが、どうしてネギ先生まで？

たしかこの時期、行方不明になったのはこのちゃんを含めて数人……ネギ先生も、いなくなつた筈だ。まさか、それもこれが原因だつたとはな。

「このちゃん、どうしてネギ先生が……？」

「んー？ あんな、明日菜が連れて来たんよ」

「そう……」

明日菜さんが……もしかして、ネギ先生と明日菜さんは、既に仮契約を？

「(分からない)」

今はまだ、様子を見るしかないか。それとも、二人を切り離すか？ 私が手を出してもいい問題なのか――、

「それじゃみなさん、行くですよ」

『おー』

……今はまず、こちらに集中するか。

地上から地下へフロアを移動して、つくづく思う。

「(千雨さんに注意しておいて良かった)」

まともなのは地上の図書館だけで、地下は本当に罠だらけだ。それも、階を下りるごとにその危険度を増していくのだから、もしも千雨さんが足を踏み入れたらひとたまり

も無い。

後方から放たれた矢を払い、左右から振り子のように向かって来た斧を、他の人が自分の事で殆ど精いっぱいで見えていないのをいいことに、左手に気を集めて両断する。

予想以上の罫の数と危険さに、溜息を吐いた。

「このちゃん、足元にトラップがあるよ」

「ふえ、わ！ 本当や。ありがとな、せつちゃん」

「物騒だし、気をつけないとね」

「せやね〜」

ここまでの道中で分かったのは、どうやらネギ先生が魔法を使えないらしい事と、明日菜さんが仮契約はしていないが、魔法について知っている事。

図書館島には危険な場所があるという事は、わりと知られている事だ。おそらくはその対策にネギ先生を連れて来たんだろうが………生憎と、魔法の使えないネギ先生はただの子どもと同じ。足手纏いになかならない。

幸い、クーフエイや長瀬もいることだし、他は任せて私は、このちゃんを護ることを優先しながら着いて行くとしよう。

「では、ここで一度休むです」

「わーい！」

「お弁当食べよー」

「ポテチもあるよー！」

一際大きな本棚の上で、休憩となった。大きな本棚の上に更に小さな本棚があるとは、異様な光景だ。

「……………」

食事を始める人たちからこつそりと離れて、細かく周辺を見て回る。途中で何個か罨を見つけて、それを破壊しながらぐると本棚を一周した。

休憩できる広さはあるが、確実に安全とは言えない。この分だと、この先もまた物騒な罨が続くんだろう。

「大丈夫かな……………」

今後、探索には一緒に行かせてもらおう。このちゃんだけを行かせるには、ここは危険が多すぎる。

小さな本棚に寄りかかって思考していると、このちゃんがサンドイッチを片手に駆け寄ってきた。

「せつちゃん、食べへんの？」

「あ……………」

「はい。これな、うちが作ったんよ」

「……ありがとう」

差し出されたサンドイッチを受け取って、口に運んだ。そういえば、このちゃんの料理は久々に食べたような気がする……!?

一口、口に入った瞬間に感じた舌を刺激する何かに、口元を押えて吐き出すのを耐えた。

「こ、このちゃん……?」

「なんや〜?」

「これ、これ何、入れたの……」

「えへへ」

どうにか見上げたこのちゃんは、にこにこそれは楽しそうに笑っていて——その後ろに、さっきまでは騒がしく食事をしていた筈の明日菜さんたちが、一様に口を押えて悶え転がっているのを見た。

「辛い辛い辛い——!!!」

「これは何アルかー!?!」

「むう……さすがにこれは……」

「ちよつと木乃香! いったい何を入れたのよ!?!」

「……………」

ギャンギャンと悲鳴にも似た叫びを聞きながら、私は手に持ったままのサンドイッチを見てみた。

パンとパンに挟まれたレタスと、トマト……………の中に、黄色と黄緑色の何かを見つけ、この刺激の正体を知る。

「わさび&からしたつぶりの特製サンドや。ほら、夜やし皆眠くなるかな〜思ったから、眠気覚ましにしよう思って」

「それでも限度つてもんがあるでしょーが!!」

明日菜さんに肩を掴まれて揺さぶられるこのちゃんを、長瀬から受け取った水を飲みながら眺めていた。

眠くは無かったけれど、今の刺激で暫くは眠くならなそうだ。それは他の人たちも同じだろう。

「(このちゃん…………)」

思いもよらないところで仕掛けられた悪戯とこの騒がしさに、変わらないなあと、笑みが浮かんだ。

「着いたー!!」

「わっ、なにこれすごい!!」

それから、このちゃんが普通に作ってきたサンドイッチを食べて探検は再開された。ジャージで来てよかった。奥へ入れば入るほど、通る道の殆どが道なき道となったのだから。本棚を登るは水の中を進むはで、随分と汚れてしまった。

「(にしても……)」

魔法の本は、メルキセデクの書というらしい。でもネギ先生、珍しいのは分かりましたから少し黙ってください。このちゃんに魔法の存在がばれます。

封印しているのかどうかは分からないけど、せっかく魔法は使えなくなってるのに、口を滑らせていてはばれないものもばれてしまう。

「一番ノリあるー!」

「待って、私も!!」

考えている間に、本に向かって次々の走り出していく人たちを追おうとして、瞬間に感じた嫌な予感。

私は咄嗟に、橋を渡ろうとしているこのちゃんの腕を掴んだ。

「待って、このちゃん!」

「ふえ? せつちゃん、どうし——」

「きやああああ!!」

悲鳴が上がった。ガコン、と橋が二つに割れて落ちて行く明日菜さんたちを見る。

このちゃんを引つ張つたおかげで、その落下に私たちは巻き込まれずに済んだ。

「あ、ありがと、せつちゃん」

「ううん……それより、これって」

「ツイスター、ゲーム……？」

橋の下に石版があつて、その上に落ちた明日菜さんたち。見下ろした石版にはツイスターゲームと書かれていて、首を傾げた私たちに答える声。

『その通りじゃ!!』

ハンマーを持った石像が、そうやってゆっくりと動き出した……え、どうしようこの状況。

敵意は感じないが、あまりの事態に呆然となった。

『この本が欲しくば、儂の質問に答えてもらおう——ただし!』

悲鳴を上げてパニックに陥つた佐々木さんを筆頭とした落ちた人たちを無視して、石像が私とこのちゃんを指差す。

『そちらの二人にもゲームの舞台に下りてもらうのじゃ。じゃないと、ゲームへの挑戦も認めんぞ』

「えっ!? ど、どないしよ、せつちゃん……」

「巽だと分かっている場所に、わざわざ下りるつもりなどない」

『ふおふおっ！ ならば永久にこの地下を彷徨うんじゃない。勝負に勝ったなら、本と地上への近道を教えてやるぞい』

……どうやら、この石像はなんとしても私たちを、いや、このちゃんを石版の上にしたらいらないな。

このままこのちゃんを連れて脱出するのは簡単だが、そうすると他の人たちを見捨てる事になる……。

「下りよ、せつちゃん」

「このちゃん……」

「大丈夫やって。ゲームに勝てばええんやから」

「……うん」

大丈夫だ、というわけか石像自体から敵意は感じない。すぐに命が危うくなることは無い筈だ……そう、自分を納得させて、このちゃんを抱き上げて石版へと下り立った。

『ふおふお。それでは、ゲームを始めるぞい』

満足げに笑う石像に、腹が立った。

『第一問』

ゲームは、英語を日本語に訳したものを、ツイスターゲームの要領で踏むだけ。

回答者がバカレンジャーのみということ、多少の苦戦はありながらネギ先生のヒントもあつて順調に答えて行つたのだが――、

「お、さ――る!？」

『ハズレじゃな』

間違えた瞬間、石像の持っていたハンマーが振り下ろされる。

石版が割れ、暗闇がぼつかりと口をあけた。落ち始めた体に、私はこのちゃんを庇うように抱きしめる。

「せつちや――」

「大丈夫」

後から落ちてくる瓦礫に当たらぬように気をつけながら、私たちは暗闇へと落ちて行つた。

「ふうむ、どうしたもんかのお……」

まさか、剎那君が一緒におるとはお。まあ、彼女の成績も著しくないし、一緒に勉強してもらうのはありじゃが……。

「もう少し影から守っていると、思っておったんじやがな」

今回の目的は、ネギ君と生徒たちを地下に落とすことで、そこで集中して勉強してもらい2—Aを最下位から脱出させること。

それと同時に、パートナー候補でもある彼女たちとネギ君に交流を深めてもらうつもりだったんじやが……いやはや、まさか刹那君までいるとは。これは困ったぞい。

「ん……？ でも刹那君もパートナー候補の一人じゃし、むしろ良かったかのお」

彼女がネギ君の味方、パートナーになったとなればとても心強い仲間になることじゃろう。

そう考えると、予想以上の成果だったと言えるかもしれない。

「ふおっふお」

まあともかく、テストまでの残り三日間、みっちり勉強してもらおうとしようかの。

地底図書館の日

さて、どうしたものか。

石像によつて地下の更に地下へと落とされた私たちだが、幸いにも下は柔らかな砂浜で怪我をせずに済んだ。といつても、結構な高さから落ちたんだし、下手をすれば骨折、最悪死んでいた可能性だつてあるだろう。

「無茶をするな……」

とにかく、誰も大きな怪我をしていなくて良かった。

気絶しているこのちゃんを横たえて、私は立ち上がる。全員とも気絶してるし、暫くは起きないだろう。

「(特に危ない様子は無いし)」

滝や光る木、水に浸かった本棚と光景としては異様だが、危険というものでは無い。

少し周りを見てみよう、その場を離れて歩き出す。地上に戻ろうにも、登れるような場所はないか。あつたとしても、この高さを普通に上るのは難しいだろうな。

「ん、う……」

ぐるりと落ちた浜辺を見たところで、呻き声が聞こえてこのちゃんたちに駆け寄る。

ゆつくりと目を開けたこのちゃんの傍らに膝をついて、安堵の息を吐いた。

「このちゃん、大丈夫？」

「せつちゃん……」

「痛いところは無い？ 気分は？」

「あはは……大丈夫やって、せつちゃん。心配性やな」

目覚めたばかりで意識はまだはつきりしてないのか、力なく笑ってこのちゃんが言う。怪我は無いようだし、この分ならもう少しすれば起き上がれるか。

それからすぐに他の人たちも起き出して、一様にこの空間に驚きを露わにした。

綾瀬さんの話だと、ここは幻と言われた地底図書室なんだとか。ここに入って生きて帰れた人はいないらしいが……なら、どうして綾瀬さんがその話を知っているんだろう。

まあ、その話自体は佐々木さんに恐怖を与えるには十分だったみたいだが。

「大丈夫ですよ、皆さん！ 絶対に脱出できますから！」

力強く励ますネギ先生。とりあえず、落ち込んでいても仕方が無いからと勉強することになった。

都合よく用意されていた全教科のテキストに、食料。キッチンやトイレといったものまであるのを見ると、学園側が一枚噛んでいると考えた方が良さいな。

「幸せや〜」

「このちゃん……」

バカレンジャーが勉強をする傍ら、このちゃんは綾瀬さんと共にのんびりと読書に勤しんでいる。二人とも、頭が良いからなあ。

私は私で、勉強しながらこの地底図書室を探索していた。

水に浸かった本棚から、本を一冊抜き取る。本来なら水浸しの筈の本は、どういうわけかどこも濡れていない。開いてみたが、どうやら外国の本らしく全く読めなかった。

おそらくは何かしらの魔法によるものなんだろうが、今はとりあえず、あからさまに魔法を示唆する本が無い事に安心する。

……今回の事も、長には報告すべきだろうな。この空間全体もそうだが、先ほどの石像についても、残念ながら東に魔法を秘匿する意思が無いのは明らかだ。

それに、今回の事を抜きにしても報告すべきことはたくさんあるし、この後にある修学旅行で送られた親書も、強硬派を随分と刺激するものだった。

春休みまでに、報告事項を纏めておいた方が良いな。なるべく荒れないように……でも、荒れそうだなあ。

「せつちゃん、何してるん?」

「っ、なんでもないよ」

気づけば、のちゃんが後ろから私を覗き込んでいた。いけない、考え事に集中し過ぎてたかな……。

「ご飯の準備が出来たんや。食べよ〜」

「うん」

食事はこれで四回目。ここに落ちてから、外では更に一日が経っている筈だ。

テストは明日だし、そろそろ脱出の手段を考えた方が良いかな……。

「あれ、他の人たちは？」

「みんな水浴び行ってくつて言ってたえ。呼んで来るから、先に食べててな」

「うん」

今度の食事はサンドイッチ。手近な一つを手にとって食べながら、他の人たちを呼びに行ったこのちゃんが戻るのを待つ。

すると、何やら遠くで悲鳴のような声が聞こえて顔を顰めた。耳を澄ませると、悲鳴や水の跳ねる大きな音がする。どうやら、何か問題が起こったようだ。

最後の一口を口に放り込み、立ち上がる。このちゃんに危険が迫った様子は無いけど、いい状況でも無さそうだ。

「せつちゃん、大変や！」

そう思ったところで、このちゃんが戻ってきた。慌てたように走ってくるこのちゃん

に駆け寄って問いかける。

「このちゃん、何かあったの？」

「そ、それがな……」

このちゃんの話によると、地下で私たちを落とすとした石像が現れたのだという。

それで、このちゃんは逃げるために皆の荷物を取りに来たところ。確かに、ここには服とかもあるから置いて行くわけにもいかない。

「急いだ方が良さそうだね。このちゃん、背中に乗って」

「え？」

「私の方が足速いから。急ぐんだよね？」

「う、うん！」

ただ逃げるだけなら、このちゃんを背負って行った方が楽だし速い。これが戦いながらとなると、また違うけど。

荷物を持ったこのちゃんを背負って、水辺へと走る。他の人たちと合流して、あとは逃げるだけだ。

『ま、待つんじゃない!!』

「やだよー！」

「ありました、非常口です！」

「……………え？」

逃げた先、滝の裏側に非常口。まさか、そんな危険から逃れるためのものが用意されているとは思わなくて、本気で驚いてしまった。

扉には鍵となる問題が書かれていてそれを解かないと開かない仕組みだったが、石版と一緒に落ちてきた魔法の本を持ったクローフェイが答える。扉の先の部屋では、長い螺旋階段が上へと続いていた。

「せつちゃん、うち一人で行けるえ」

「大丈夫？」

「問題なしやー！」

任せて、と笑顔を見せたこのちゃんを下す。追いつかれた場合の事を考えると、このちゃんを先に行かせて私は後ろを行った方が良い。

壁を壊しながら追いかけてくる石像を眼下に捉えながら、途中途中の壁に書かれた問題を解いて上を目指した。

「あつた！ 地上への直通エレベーターです!!」

「これで地上へ帰れるの？」

ネギ先生の言葉通り、前方にはエレベーター。これに乗ることが出来れば、逃げ切れるか。

そう思ったが、雪崩れ込むように大急ぎで全員がエレベーターに乗り込んだ瞬間、ブーツとブザーの音が鳴った。

『——重量オーバーです』

『うつそおおおおお!!?』

悲痛な叫びをあげて、皆が服を脱いで外に放り出したりして重さを軽くしようとする中、もしかしてと思う。

もしも、過去にこのちゃんたちがこのエレベーターを使って、脱出したのなら——その時と違って、一人多い。

それはつまり、どれだけ頑張ろうと誰か一人が降りなければ、助からないという事だ。

「ぼ、僕が降ります!!」

私の思考の答えを出すかのように、ネギ先生がエレベーターを降りる。

魔法を使えないにも関わらず、生徒を守る為に飛び出す姿は称賛にも尊敬にも値しませんが——それは、明日菜さんが許さない。

「あなたを置いていけるわけないでしょ!——こーすんのよっ!!」

ネギ先生をエレベーターに引き戻し、魔法の本を力いっぱい投げつける。かなりの速度でぶつかったそれに、石像がぐらついた。

さすがに落とすことは出来なかったが、今エレベーターが動いたなら助かっただろ

う。

『——重量オーバーです』

「なんでええええええ!？」

『ふおつふお、逃がさんぞー』

無情な機械音が告げ、石像の手が伸びてくる。

「や、やっぱり僕が——」

立ち上がり、再度、盾となる為に飛び出そうとしたネギ先生の襟首を掴んで、明日菜さんに押し付けた。

「えっ」

「せつちゃん?！」

呆然とするこのちゃんやネギ先生たちを置いて、エレベーターを降りた。降りる直前に、扉を閉めるボタンを押す。

扉が閉まり始めるその向こうで、このちゃんが我に帰ったようでハツとなって慌てて手を伸ばしてきた。

「せつちゃ——!!」

チンツ、と何とも軽い音を立てて、扉が閉まる。

ガコンと後ろでエレベーターが動き出す音を聞いて、笑みが浮かんだ。

「よかった」

『自分を犠牲にして他を逃がすか。じゃが、儂に勝てると思っておるのかのお?』

石像が話しかけてくる。伸ばされた手をひらりと躲して、勾玉を夕風に戻した。

「貴方の思い通りにはさせませんよ——学園長」

『ふおっ!?!』

気づいていないと思ったんだろうか。なんにせよ、真正面から相手をする必要はない。

夕風を一閃して、斬ったのは階段だった。崩れた足場ごと落ちて行く石像に背を向けて、閉じたエレベーターの扉を切り刻む。

上へと続く長い暗闇を見上げた。これを上って行けば、地上に出られるのか。

「行くか」

夕風は勾玉へと戻して、意識を集中させる。背中の翼を広げて、私は地上へと飛びあがった。

「せつちゃん、せつちゃん！　せつちゃん!!」

「木乃香、落ち着いてっつてば!!」

「いやああああああ!! せつちゃん、せつちゃん!!」

開かないエレベーターの扉を叩いて、木乃香が泣き叫ぶ。

私はそれを抱きしめるようにして押しえつげながら、どうにか扉から木乃香を引き剥がそうとしていた。

「離して明日菜!! せつちゃん、せつちゃんがああああ!!」

「お、落ち着いてください、木乃香さん」

「やあああああ! いややつ、いやああああ!! せつちゃあああん!!!」

力の限り暴れる木乃香を押しえながら、私はエレベーターの扉を見る。

私たちを助ける為に、エレベーターを降りた桜咲さん。あまりに突然な事と、何の躊躇も無い姿に、私たちは声をかける事すら出来なかった。

どういうわけか、無事に地上へと戻ってきたエレベーターはうんともすんとも言わず、扉は閉じたまま一向に開こうとしない。

「(これじゃあ、助けに行くことも出来ないじゃない)」

不意にくたりと木乃香の抵抗が治まったのに気付いて、抱きしめたままの木乃香を見た。

「せつぢや、せつぢやああん……」

「木乃香……」

泣きながら、桜咲さん呼び続ける木乃香。幼馴染なんだと、教えてくれた。

事情があつて、中学で再会してからも話せずにいたけど、つい先日……桜咲さんと木乃香が一時間まるまるいなくなったあの日に、ようやく以前と同じ友達に戻れたんだと話していた。

本当に嬉しそうに話していて、話を聞いたこつちまで嬉しくなった。

……その桜咲さんが、あんなわけの分かんない相手を前に、一人で行ってしまった。その衝撃は、私たちよりも木乃香の方が強いだろう。泣き叫ぶのも無理は無いと思う。「と、とにかく助けを呼ばなきゃ」

まきがそう言つて、それに頷こうとした瞬間。

ガシャンツ、とエレベーターの扉の奥で音がして、みんな揃つてビクツと体を跳ねさせる。一斉に扉を見た。

「まさか……」

さつきの石像が、ここまで追つて来た？　じゃあ、桜咲さんは——そう青ざめる私の目の前で、ガンガンと何度も扉を叩きつけるような音がした後、金属の擦れる鈍い音を立てながら、ゆっくりとエレベーターの扉が開かれた。

「……………つはあ」

扉をこじ開けて現れたのは、桜咲さんだった。

「せつちゃん——っ!!」

「このちゃん! よかった、無事でうわああああ!」

力の抜けた私の腕から抜け出して、木乃香が桜咲さんに飛びつく。

一瞬、安心したように顔を綻ばせた桜咲さんは、受け止め損ねた木乃香と共に地面へと転がった。

「せつちゃん、せつちゃん!」

転がったまま桜咲さんに縋り泣く木乃香を、桜咲さんがそつと抱きしめる。

「……ごめんね、このちゃん。心配させて」

「ひぐつ、ほんまや、せつちゃ、せつちゃんの、あほ……」

「うん、ごめんね」

謝りながら、桜咲さんは木乃香の頭を優しく撫でていた。

とても大切そうに目を細めて木乃香を見つめる桜咲さんを、私たちはただ無言で見ている事しか出来なかった。

その翌日、テストは無事に終わった。結果は2—Aがトップという快挙で、遅刻した時は慌てたけど、ネギも無事に先生になれたし最高の結果だと思う。

ただ、テストとは別に気になるのが桜咲さんで。あの後、木乃香が落ち着いてからエレベーターの中を覗いたら、中は凄い事になってた。

エレベーターの床に大きく穴が開いていて、扉の内側の至る所が凹んでいた。絶句する私たちをよそに、感心したのやら興奮したのやら、目を輝かせていたのは、クーフエイと長瀬さんだった。

どうやったのか聞いても、桜咲さんは困ったように笑うだけで、結局何も教えてもらえなかった。っていうか、そもそもどうやって地上まで上って来たんだろう。エレベーターに乗ってるの、結構長かったから距離も高さもあつた筈なのに。

まさか、桜咲さんまで魔法使いとか、そんなわけないし——ああ、もう！ 分からないなあ。

そして桜咲さん、言っちゃ悪いけど意外にも頭が良かったらしい。普通に上位に食込んでいて、でも図書室では私たちと勉強しないで木乃香と一緒にいたし。

いつの間に勉強したのか、それもちよつと気になった。

帰省した日

春休みに入る数日前に、長から手紙が来た。

以前に長に電話で報告した際に言われた、春休みに一度、京都に戻る事についてだった。誰の目があるとも分からないので、詳細はあまり書かれず日程や僅かな連絡だけが書かれていた。それにしても、覗き見防止の術をかけてある。

戻る間、寮にこのちゃんを一人残していくことに不安はあったが、その間は別の護衛を寄越すとの事だし、安心していいだろう。

そうして、私は今――、

「お久しぶりですね、刹那君」

「はい、長。お久しぶりです」

長と、数名の重役たち。

それぞれが穏健派と強硬派の代表格だろうが、もとより聞いていたとはいえまさか、私がこのような場で話すことになるとはな。

「君からの報告を聞く限り、木乃香の現状は思わしくありませんね」

「はい。東側には、木乃香お嬢様に魔法を知られぬようにと伝えてありますが、あちらに

その意思があるとは考えにくいです。あちらは、子どもとはいえ魔法使いを同じ部屋に住まわせています。また、その子どもも日常的に魔法の恩恵を得て生活してる様子です。その魔法使い自身には多少なりとも秘匿の意思はあるようですが……東全体としては、少々お嬢様への配慮が欠けているとしか言えないでしょう」

「それは、なんと……」

「だから奴らに任せるのは反対したんじゃない!!」

穩健派が頭を抱え、強硬派が憤った。長もまた、苦い顔をしている。

報告したのが私自身とはいえ、これは……。

「(荒れるか)」

「長、どうするつもりです?」

「即刻、お嬢様を連れ戻してこちらで教育をすべきです! 東になど任せておけません!!」

強硬派が長に詰め寄り、怒鳴る様に言った。それに対して、穩健派が慌てだす。

「い、いや! ここは早急に、東との和解の場を設けるべきだ」

「お嬢様への配慮を、しっかりとしてもらわんと」

「なぜこちらが下らなければならぬ! 和解など、認められるか!」

意見のぶつかり合い。

穩健派は、東と争うのを恐れて、早急な和解を主張する。

一方で強硬派は、和解などせずに、このちゃんを連れ戻しこちらで教育すべきと主張する、か。

正直なところ、どちらにも賛成しがたいな。穩健派の言うとおり和解はすべきだと思うが、強硬派の言うとおりこちらが下る必要は無い。だが、だからといって強硬派の言う、このちゃんを連れ戻して教育するというのはいただけない。それでは、このちゃんの意味を無視して振り回すことになってしまう。

こちらの都合で振り回すような事はしたくない。そう静かに思考した。

「長、どうするのですか!？」

「……………」

双方が長に決断を迫った。

長は穩健派だ。となると、賛成するとなれば穩健派の意見、早急な和解ということになるだろうか……………けれど、今そちらに賛成されては困る。もし本当に和解が成立したとなれば、不満を抱えたままの強硬派が爆発して、西が崩壊してしまう。

それだけは、絶対に避けなければならない。

「……………刹那君」

「はい」

下げていた頭を僅かにあげて、長を見る。長は無表情を装いながら、けれどその瞳を曇らせて、私に聞いてきた。

「君の見解は、どうですか？」

「長……」

「かような護衛如きの意見が必要か!？」

「そもそも、そやつは西の裏切り者であろう！　このような場にいること自体が可笑しいのじゃ!!」

風当たりはひどい、か。まあ、当然だろう。

所詮、どんなに長が信頼してくれようと私は一介の護衛に過ぎず、また彼らから見れば西を捨てて東へ赴いた裏切り者。

だからどんな言葉も仕方ない。ただ、それくらいの事で私が、何もせずにとだ黙って見ているわけにはいかなかった。

「皆様方、どうか私の発言をお許しただけませんか」

「許します。君の意見を聞かせてください」

穏健派と強硬派が口を開くより早く、長が許しの言葉を告げる。

どれだけ憤ろうと、この場に置いて最上格にある長の意思を無視することなど出来ない。

「では、失礼して——長の考えでは、木乃香お嬢様に対する東の対応を見るために、お嬢様をあちらへ預けたのでしたよね？」

「っ……」

無言ながら長が戸惑った。けれど、私の言葉に驚いた穏健派と強硬派の面々にはその反応に気づく者はおらず、私に視線が集中する。

意識が私に向いているうちに、私は言葉が続けた。

「あくまでも、お嬢様には魔法を知らせず一般人として。そのお嬢様に対する東の対応を、そして、お嬢様が生活していくうえで、東にどのような印象を持つのか。長はそれを、確かめたかったのではしたよね？」

「なんと……では、全て考えがあつての事だったと？」

「はい。敵を騙すにはまず味方から、という言葉もありますし……長も、ご自分の愛娘を危険かどうか判断しかねる場所にするのは、さぞお心を痛めたことでしょう。せめてもの想いで、長は私をお嬢様の護衛と、その様子を報告させる要員としてお選び下さいました」

「むう、そういうことであつたか……」

各々が勝手に納得して、一先ずは場の空気が治まりを見せる。

この様子なら、少なくとも今すぐに結論を出す必要は無くなるだろう。多少なりと

も、議論をする余裕は互いにあるはずだ。

「刹那君……」

「申し訳ありません、長。話した方が良かったと思ひまして……勝手な真似を致しました」
「……………いえ、君の判断に間違いは無かったですでしょう。ありがとうございます」

困惑する長に頭を下げる。まあ、私が話したのは全て——嘘だけけれど。

そのまま会合は一度お開きとなり、部屋を出たその足で私は、長の私室へと向かつている。

先ほどの事について、話さなければならぬ。

「長、刹那です」

「どうぞ、入ってください」

「失礼します」

襖を開ければ、当然ながら部屋には長一人。

部屋に入り襖を閉めると同時に、盗み聞き防止に防音のお札を貼った。

「……………先ほどは、申し訳ありませんでした」

「いえ、むしろ助かりました。刹那君の言葉が無ければ、あの場を治める為に私は何かしらの決断を必要としたでしょう」

全てが考えあつての事となれば、その報告を聞いてから議論して決断することが出来る。

もちろん、双方が議論の余地ありと判断した場合に限るが……思惑がどうあれ、今回については上手くいって良かったと思うべきだろう。

「しかし、参りましたね。刹那君の報告を聞いてから、こちらでも木乃香に魔法を教えるか否かについては触れてきましたが……未だ平行線のままです」

「そうですか……」

「木乃香の様子にしても、お義父さんからは何も問題は無いと聞いていたのですが……」
「あちらの考えの全てが、こちらに伝わるわけではありませんから……ですが、勝手な推測から言わせてもらいますと、おそらくは木乃香お嬢様を、ネギ・スプリングフィールドの従者にと、考えているのではないのでしょうか」

「……ナギの息子、ですか」

長の呟きは、聞こえなかった事にしよう。そうしよう。

私にとつて、ネギ先生が誰の息子かというのは問題にはならない。問題なのは、ネギ先生が魔法使いか否かで、このちゃんに害があるかどうかだ。

「麻帆良の認識障害もあつて、現状はお嬢様も魔法の存在に気づいていません。ですが、お嬢様の周りに危険が蔓延しているのも事実です。結界を越えて侵入してくる妖怪の

他に、強硬派の中には既にお嬢様を狙って学園へ侵入を試みる者もいます」

「……護衛は、難しいですか？」

「いえ。現状では私で対処できます。ですが……今後の事を考えれば、長にも早急にご決断いただきたいところです」

「そう、ですか……」

襲ってくる輩なら、いくらでも斬り捨てられる。それだけで護れるなら安いものだ。

「木乃香お嬢様に、魔法を教える事はなりませんか？」

「……………」

言つて、すぐには無理なんだろうなと思う。

報告してから少なくとも半月近くは経過した。けれど未だ穩健派と強硬派で意見はぶつかり合うままで、結論は見えない。

それに何より、長が未だ結論を出せていない。

長の願いは、このちゃんに平和な世界で生きてもらうことで。その為に、このちゃんを麻帆良に逃がしたのだから。

このちゃんの魔力が、利用されない為に——誤算は、敵がこちらだけでなく、向こうにもいた事だったけど。

「魔法の存在を知っているのと知らないのでは、対処の仕方が変わります。逃げやすく

も避けやすくもなりますし、何より、知らずうちに巻き込まれる事は防げます」

「巻き込まれる可能性が、あるのですか？」

「はい。現に、木乃香お嬢様の同室である少女は、ネギ・スプリングフィールドが魔法使いであることを知っている様子でした」

どんな流れで、明日菜さんが魔法の存在を知ったのか私は知らないが、そのまま魔法に関わっているのは事実。おそらくは、その本当の危険性も知らないままなんだろう。

それは一歩間違えれば、このちゃんだったかもしれない。

「これは、私の考えになるのですが」

「……ええ、聞かせてください」

「はい。お嬢様には、魔法の存在を知ったうえで、選択してもらうべきなのではないでしょうか？ 関わるのも、関わらないのも——私は、お嬢様の望みを叶えるために、全力を尽くすつもりです」

このちゃんの為なら、茨の道を切り開く剣となり、どんな外敵からも護る盾となろう。

どんな手段になろうとも、私は——このちゃんの生きる未来を、掴んでみせる。

「刹那君……」

長は静かに息を吐いて、やがてゆっくりと言葉を紡いだ。

「私も、このままではいけないのでしょうかね」

……私には、長が何を思ったのかは分からない。でも、その心に何かしらの変化があったのだけは分かる。

そして長は一度、情けないと呟いて力の抜けた笑みを浮かべた。

「決断しなければならぬと分かっただけで、木乃香のことをすぐに決める事が出来ない。けれど、結論は必ず出しましょう……僕の方にも、改めて考える時間をください」

「……はい」

私はその言葉にしつかりと頷いた。

目の前に今いるこの人は、長ではなく——詠春様。このちゃんの父親に見えた。

「今しばらく、木乃香をお願いします。まだあの子には、普通の生活をしてもらいたいです」

「承知しました」

過去は、私の知らない未来へと進んでいる。これもきつとその一つで、でも私にはこれが、良い事なのかは分からない。

『せつちやああん!!』

……あんなにも泣いたこのちゃんを見たのは、いつ以来の事だっただろう。

彼女にとっての日常の日

春休みも半分を切ったある日のこと、寮の廊下で千雨さんに会った。

「お出かけですか？」

「ああ」

彼女はとても面倒くさそうな表情をして頷くと、早足で私の横を通り過ぎて行つた。いつてらつしやいと去つていく彼女の背中に言葉を投げると、小さく手を振り返された。

千雨さんを見送つてから、気づけば二時間が経っていた。

夕風の整備、お札の作成と行っていたが、随分と集中していたらしい。

「んーっ」

椅子の背もたれに寄りかかつて、ぐいつと腕を頭上に伸ばした。机には筆や未だ真っ白な紙が、出来上がったお札と共に並んでいる。

それぞれ纏めてから引き出しにしまつて、もう一度時計を確認。もうすぐ一時になるところだった。

「お昼、どうするかな……」

今日は真名もないし、作るにしても一人分だけだ。真名がいる時は二人分作ることが多い。

少し考えて、せっかくだしたまには外で食べようかと結論を出したところで、ピリツと脳に一瞬、電気のような刺激が走る。

「ッ！」

刺激の正体はすぐに思い立った。急いで部屋を飛び出し——直前に財布を掴んだ。昼食をどうの考える前に、今日は外に出る事が決まっていたらしい。

「千雨さん……！」

寮を飛び出し、千雨さんの場所を探す。あまり遠くは無かった。

地面を蹴る。春休みで、しかも昼時ということもあつてか、この辺りに人影は無かった。それ幸いと、半ば飛ぶようにして私は走った。

千雨さんとこのちゃんに渡したお札には、大きく分けて二つの効果がある。

一つは、持ち主の身に迫る危険を察知すること。もう一つは、危険が迫っている事を私に知らせること。

危険というのは、持ち主に害であるか否か。害と判断されれば、場合によっては怪我

をさせるものでは無くても私に知らされる。

持ち主の危機を私に知らせる時、同時に二つのことが分かる。持ち主の場所と、危険の度合いだ。

持ち主の場所というのは言葉の通りで、度合いも同様。

どの程度の危険が持ち主に迫っているか——大概、私に知らされる危険というのは、持ち主に大きな怪我をさせるか、死を齎すかのどちらかだ。軽い怪我程度だと、突発的な事故の場合もあり反応が間に合わない。

だから、今回の場合のように信号があるというのは、歓迎される事では無い。

「……………これは……………」

街へと続く道に入った途端、妙な、けれど慣れた感覚に足を止めた。

「結界か」

人払いの結界のようだ。街が近いにも関わらず、人がいないのはそのせいだったらしい。

ただ、問題なのはこの結界内に千雨さんの気配を感じることに。認識阻害の魔法による効果が薄いと聞いてはいたが、どうやら人払いもあまり効果を成さないらしい。

走りながら、千雨さんに迫る危険の正体を探した。少し離れたところで魔力が高まるのを感じて、おそらくはそこに原因があるのだろうと考えた。

前方に、荷物片手にこちらに向かつて歩いてくる千雨さんを見つける。無事な様子に安堵の息を吐いた。

「ん？ 刹那じゃねえか」

私に気づいた彼女が不思議そうな顔をした。

走っていた足を次第に緩めて、彼女の前で立ち止まる。笑みを浮かべた。

「どっか出かけんのか？」

「ええ。たまには外でお昼をと思つて……千雨さんは、これから帰りですか？」

「んー、まあ一応な」

「よかつたら、一緒にどこかで食べませんか？ もう食べたんでしたら、いいですけど

……」

「ああ、いや……」

考える千雨さんを見上げながら、後方で微かに響く音に注意を払う。

まだ音は小さいから、千雨さんは気づいていない。ただ、このまま彼女を帰らせるわけにはいかなかった。

「ね、行きましよう？」

問いかけながら、彼女の手を取った。強引とは思いつつ歩き出す。

「ちよ、行くから引つ張んなくて」

驚いた千雨さんの声を聞きながら、街への道に戻りだした。

結界はもう少し先まで続いている。後方から聞こえる音と感じる魔力に、千雨さんの手を掴んだまま歩き続けた。

使ってたパソコンのケーブルが駄目になって、仕方なしに買いに出た。

つたく、休みだつてのに面倒くせえ。本当なら今日一日使つてサイトにバンバン新作あげてランキング一位の座を更に不動のものにするはずだったのに。

けどまあ、壊れちゃったものは仕方ない。ついでだから部品とかソフトとか新作を見て行くのもいいかと思った。

麻帆良つて、街の外と比べるとそういうのが随分と安いんだよな。たぶん、外の最新よりも進んだ技術があるからだろうけど……癪だけど、その辺りは得した気分になる。

とはいえ、出て来てみると平日でも多いのに休日ということでも更に大量の人、人、人。結局、無駄にぶらぶらする気にもなれなくてケーブルだけ買って帰ることにした。

その帰り道に刹那と会って……なんでか昼を一緒に食べてる。

「あ、これ美味しいです」

「よかったな」

目の前でくるくる、フオークでパスタを巻いてる刹那。引つ張られるままに一度は退散した街中にまた戻ってきて、目についた店がパスタの専門店。私はナポリタン、刹那は和風きのこでなかなか美味い。

「……お前、何しに来たんだけ？」

「何って、お昼を食べにですが……」

「本当にか？」

自分で言うのもなんだが、私はそれほど鈍いわけじゃない。空気だつて読める、

だから刹那が私を誘った時の態度が、いつものお前らしくなくて何だか焦っているようだったのだつて分かつてる。少なくともただお昼を食べる為だけに出てきたわけじゃないことくらい。

「……普通はさ、あんなに人がいないわけ無いと思うんだよ」

街の中心から離れても、刹那と会ったあそこは決して人通りの少ない道じゃない。ましてや寮や他の建物に通じるあの道は、休日なら誰かしら人がいていい筈なんだ。

それなのに誰一人と人がいないというのは、偶然にしては結構な確率だと思う。呟いた私に、刹那はくるくるパスタを巻く手を止めて微笑んだ。

「そんな日もありますよ」

たまたま人がいなかっただけで、何も無い。何も無かった。いつもと変わらない、騒がしくて面倒くさい日常だ。

「……」

貰った日から片時も手放すことなく持っているそれが、ポケットに入っていた。半信半疑、本当に効果があるかなんて分からないそのお守り。

まあせっかくもらったんだし、気休めぐらいにはなるかと思つて持っていた。目の前のこいつが言う異常を体験した後でも、そこら辺の神社に行けば買えるだろうこんなお守り一つで何が出来るのだろうかと思つた。私に迫る危険をこいつに知らせるだなんて……そんなこと、出来るわけが無いと思つてた。

「(でも……)」

いつも何食わぬ顔をして現れるこいつは、私の手を掴んでは私が進もうとした道から別の道へと引つ張っていく。理由は買い物だったり食事だったりいろいろだったけど、決まって絶対に、私の進もうとしていた先へは行かせなかった。

あとで調べたら、その先で乱闘があつただとかロボットの暴走があつただとか色々聞いて、体が凍つた。まさかと思つて、偶然だろうと思つた。思ひたかつた。

「千雨さん？」

刹那が、どうしました？ と首を傾げている。私は首を振り返した。

「なんでもねえよ」

私がどんなに疑おうと、こいつは「何も無かった」と笑う。何も無い変わらない日常だと、刹那は言うんだ。なら、それでいいじゃねえか。

「(私らしくもない)」

たとえば本当に刹那が私に迫る危険を察して駆けつけているのだとして。私に何が出来ると言うんだ。

あの時、どちらにするか聞かれて私は、助けてもらおうことを選んだ。刹那が護るといったから、私はそれに頼ることにした。一方的に私のことを任せることになるのは、正直いつて情けないし呆れ果てる以外に無かったけど。

それでもそうと決めたのは私で、そして今のところ私の日常が崩壊するような異常とこののは起こっていない。刹那から教えられたことに気をつけているから異常に近づかずにはいられるのか、それとも刹那が私に迫る異常から私を護ってくれているのか。どちらかは分からない。

「……次は、気をつける」

分からないけど、こいつが私のことを心配してくれているのは分かるから。あまり余計な心配はかけないようしよう、そう思った。

「千雨さんはこのあとどうしますか？」

「あー……そうだなあ」

綺麗に空になった皿を目の前に、新しく注ぎ足された水を一口。

ケープルはもう買えたから、最低限の買い物は終わってる。人混みを歩くのが面倒で他に何かを見てまわるって事をしなかったけど、結局ここまで戻ってきちまったし。どうすっかなあ。

「刹那はどうすんだ？」

「私は……そうですね。少し歩いて、それから寮に戻ろうかと」

「ふくん……」

何気なく刹那を見て、ふと首を傾げた。

「あんた、なんで制服着てるんだ？」

「え？」

……ああ、違うな。制服かと思ったけど、ブラウスの形が少し違うか。スカートの柄もちよつと違うし……にしても、随分とそっくりだな。

「制服とは違うんですけど……」

「ああ、悪い。あんまりにも似てるもんだからよ。でも、休みくらいもう少しおしやれしてもいいんじゃないの？ 他にも服はあるだろう？」

「他、ですか……」

せつかくの春休みまで、制服まがいの服を着て過ごすことは無いだろう。言うと、刹
那は難しそうに眉根を寄せた。

「他だと、ジャージとかそういうのしか……」

「……は？」

聞こえた言葉に、私は思わず首を傾げた。

「おいおい、いくらなんでもそりやないだろ」

「そう、でしょうか？」

「でしょうか、ってお前……」

これは、マジか？ マジなのか？ こいつの持つてる服って、まさかジャージと制服
系統ばっかりなのか？

呆氣にとられて、ポカンと口を開けたまま目を見開く。どんだけ勿体ないんだよこい
つ。

「あまり気にしたことが無くて。動きやすいのが一番ですし」
「……」

あまりの勿体なさに言葉を失くした。この様子だと、こいつは自分の魅力に気づいて
いないんだろう。

少し吊り目がかった目も、サラサラの黒髪も、スレンダーな体型も、ちよつと手を加

えれば簡単に世の男どもが振り向くようになる。大人びた格好も可愛らしい格好も、どちらもこいつの魅力を十分に引き出せるだろうな。

「……ありえねえ」

「え？」

首を傾げた刹那。私は立ち上がりその手を取った。

「行くぞ、付き合え」

「え、ちよつ、千雨さん!?!」

「まずは服だな。この辺りはいい服屋が多いから、まずはそこで揃えるぞ」

「はい？」

ちやつちやと支払いを済ませて店を出る。服を揃えたらアクセサリーも見て、ああ靴も見ないとだな。

私に手を引かれている刹那は、何も分かっていない様子で頻りに首を傾げている。それに対して、私の唇は自然と笑みを浮かべていた。

「今日一日で、私がお前を変えてやるよ」

「へ？」

伊達にネットアイドルやってねえんだ。全力で、男どもが足を止めて振り向かずにはいられない美少女に、こいつをプロデュースしてやる。街中の人混みもなんのその、燃

える今の私にはこんな障害にもならねえ。

「……千雨さん？」

さて、どの服屋から周ったもんか。時間はまだたつぷりある、私は刹那の手を掴んだまま計画を立て始めた。

——今日は、何とも楽しい休日になりそうだ。

「……ただいま」

「ああ刹那、おかえり………なんだい？ その荷物は」

「あはは………」

疲れた体で帰ってきた部屋には、既に真名の姿があった。真名は私が両手に抱える荷物を見ると、軽く目を瞠って驚いた。

私はそれに苦笑いを浮かべながら、荷物を床に置いてふうつと息を吐いた。

「服さ。街で千雨さんに会ったんだが………なんでか妙に張り切られてな」

「ほう………なかなか可愛いじゃないか」

「あ、こら。勝手に出すな」

言いつつ、けれど袋から服を取り出す真名を止める気にもならず、椅子に座って力を抜いた。

修行での疲労が身体的なものだとすれば、今日の疲労は精神的なものだ。殆ど千雨さんの着せ替え人形も同然だったからだろうが、慣れない事はするものじゃない。

「なんだか、変に疲れた……」

「だがそう言うわりに、満更でも無かったという顔をしてるぞ？」

思わず呟いた言葉に、真名が薄らと笑って言ってきた。

「実際のところ、どうだったんだ？」

「……まあ、楽しかったさ」

服を選ぶ千雨さんは、何だかとても楽しそうだったし。特にこだわりの無い私に文句を呟きながら、けれどその顔は笑っていた。

着せ替え人形にされたのは疲れたが、普段と違うことは新鮮で楽しかったのも確かだし。

「たまには、こんな日も悪くないな」

今度は、このちゃんも一緒に三人で出かけよう。服の話は、きつと千雨さんも私よりこのちゃんと話した方が良いだろうし。

ああでも、また振り回されるのはちよつとな。今日みたいなのはもう勘弁してほしい

い。

「明日も休みなんだし、今日はもうゆっくりすればいい」
「ああ、そうするさ」

どこか優しく真名が笑って、私もそれに笑い返した。

賭けをした日

もうボロボロだった。

服はところどころが破け、傷だらけの体は血で汚れている。唯一煌めいているのは、その両手に持つ刀だけだ。

彼女は目の前の男目がけて、刀を振り上げる。男もボロボロではあるが、彼女に比べればまだ余裕はあった。

振り下ろした刀が男を斬る直前、男のカウンターが彼女に炸裂する。

彼女の傷がまた増え、そしてカウンターの衝撃で彼女の体は後ろに大きく仰け反った。それに男が、身の丈以上の大剣を構えて気を溜めはじめる。

——くる

避けられるか。いや、未だ彼女は仰け反ったまま動けない。それはつまり、男が放つ技を避ける事が出来ないのを意味した。

せつかくここまで来たのに、あともう少しだったのに。私は動けない彼女を見て悔しくなる。

何度繰り返しても、結局私は彼女に勝てないのか。何度も戦って、けれど私は。

男が足を踏み込んだ。一気に距離が詰まり、そして振り上げられた大剣が——彼女を斬り裂いた。

——Winner RED!!

機械音と人間の声が混ざったような、そんな微妙な声が勝者を告げる。

私は画面に表示された結果に、手に持っていたコントローラーを置いて溜息を吐いた。

「強すぎますよ、チャチャゼロさん……」

「ケケツ、俺二勝トウナンザ百年ハエエゼ」

一勝負三試合、それをかれこれ十回やって、未だに勝てないとは……。

テレビゲームなんて、片手で数えられるくらいしかやったことが無かった。それも、こんな格闘ゲームじゃなくて、パズルゲームとかそういう種類のもの。

だから操作にもまだ慣れて無くて、しかもこのゲーム、やたらとコマンドが多い。それも随分と複雑な。

「ヤツパBプラス右ノカウンターダヨナ。次ハ右上左上上下プラスAB同時押シデ地獄ニオトシテヤルゼ」

「なんですかそのコマンドは……なら、次はこのキャラを使ってみます」

「オツ、ソイツヲ使ウノカ。ソイツハ飛ベルカラナ、上手ク使イコナセヨ」

左上にいた女の子にカーソルを持っていく。

コマンドも多ければ使えるキャラクターも多くて、気を飛び道具のように使えるキャラだったり、トラップを仕掛けられるキャラだったりと、選ぶキャラでまた戦い方も変わってくる。

最初のうちは使いやすいキャラで固定していたんだけど、色々と使える技が違うのが面白くなって、今じゃ試合ごとにキャラを変えていた。操作に慣れないのはそのせいでもある。

——Fight!!

画面に英語が現れて、そうしてまた、ゲームという仮想空間での戦いが始まった。

私がチャチャゼロさんとうこうしてゲームをしているそもその発端は、私がエヴァンジェリンさんに修行相手となってもらって、修行をしている最中にされたある提案だった。

「ふむ……刹那、今日の修行は止めだ」

「え？」

修行には、エヴァンジェリンさんの別荘を借りていた。

理由としては大きく二つ。場所の確保と、時間の確保のためだ。

修行を行う為には出来るだけ広い土地が欲しかったし、一般人や魔法関係者に見つからない為に結界を張る必要があった。

その時点で、エヴァンジェリンさんが別荘を使うことを提案してきた。別荘内は彼女の意思で設定し直すことが可能で、結界の効果も及ばない。人目につかないのも確かだ、それは修行にもってこいな好条件だった。

それと同時に、春休みの残り少ない休みでも十分に修行が出来るだけの時間も確保される。何せ、外での一時間が別荘内での一日だ。半日いるだけで、十二日分の修行が可能になる。

最初は、修行の相手をしてもらうだけでも感謝しきれなかったのに、そこまでしてもらうのはとも思ったが、彼女自身もそれを望んだし、やはり外以上の好条件での修行というのは私としても拒む理由が無かった。

そんなわけで別荘内での修行を行っていたのだが、修行を開始してから別荘内で三日が経過した時にエヴァンジェリンさんが言ったのが、先の一言だった。

「どうしてですか？」

「なに、根を詰めて修行をしても身にならないから、今日は一日休めというだけだ。別に切羽詰まって強くなりたいわけではなからう？」

集められた物の中には本もあつて、私は書庫と化した部屋を念入りに探索した。

「……………これは……………」

書庫には、西洋に限らず東洋の本まであつた。それも、随分と古くて、もしかすれば協会で保存されている物よりも古いかもしれない物まで。

エヴァンジェリンさんに聞けば、これもまたためしに集めてみたが、読まずに放つておいてしまったらしい。どうりで、部屋の隅で埃を被つていたわけだ。

ただ、私としてはとても興味深く、修行の合間の休日はもっぱら書庫に籠つて読書に決まつた。

ひたすら本を読むことに没頭して、一日目の休みが終わる。そして翌日には修行が再開され、三日間続けて修行をした後に、また一日休みとなつた。

その休みもまた、私は最初こそ書庫に籠つて読書に勤しんでいたのだが——唐突に、私のいた書庫の扉が開かれた。

「ヨオ、刹那！ ゲームシヨウゼ」

「チャチャゼロさん……………」

扉を開けたのは、エヴァンジェリンさんの従者であり家族であるチャチャゼロさんだつた。

彼女は何かを持って部屋の中に入ってくると、私の前にそれをガシャリと落とす。壊

れないのだろうか、首を傾げた私を気にせず彼女は言った。

「御主人が今日ハオ前ヲ斬ルナツテ言ウカラヨ。シヨウガネエカラ、暇潰シニ相手シヤガレ」

「……まあ、今日は修行も休みですし。でも、これって……」

「見リヤ分カンダロ。ゲームダヨ」

言い放った彼女は、行くぞと私を促すと背を向けたので、私はつい反射的に返事をし
てから、本を置いてゲームを抱えると彼女の後を着いて部屋を出た。

話を聞くと、エヴァンジェリンさんたち、というよりチャチャゼロさんにとって、ゲ
ムは良い暇つぶしの道具なんだそう。だから修行も無く暇だったので、ゲームを引
張って私の前に出てきたわけである。

私としては、修行に付き合ってもらっている身だ。エヴァンジェリンさんの指示で休
んでいるとはいえ、相手をしてもらっているチャチャゼロさんがそれで不満を持って
いるなら何とかしたい。

ゲームの相手をするくらいで満足してもらえらるなら、そう思つて私はコントローラ
を取った。それが、二回目の休みの日。

……チャチャゼロさんは、強かった。それはもう圧倒的で、彼女がどれだけゲー
ムをやりこんでいたのか、分からされた気がした。

「なんだ貴様ら、まだやっていたのか」

「あ、おかえりなさい。エヴァンジェリオンさん、茶々丸さん」

「ただいま戻りました、刹那さん」

三回目の休みとなる今日が始まってから出かけていた、エヴァンジェリオンさんと茶々丸さんが帰ってきた。早々に、未だゲームをしている私とチャチャゼロさんを見て、エヴァンジェリオンさんが呆れたような顔をした。

そういつた経緯から、休日にはチャチャゼロさん相手にゲームをする。彼女は私が体を動かし終えるのを見計らって誘いをかけてくるので、ほぼ一日中と言っている。ちなみに、新しいキャラで挑んだがまた負けた。

「また血を吸って来たんですか?」

「ああ。なに、ほんの二人だ、問題はあるまい」

「ありますよ」

悪びれた様子の無いエヴァンジェリオンさんに呆れたように返した。別に止めるつもりは無いが、それでもやはり不安はある。

春休みの今はまだ噂にもなっていないが、それが終わればそうもいかない。

エヴァンジェリオンさんが、別荘内での今日一日を留守にしていたのは、別荘の外に出

ていたからだ。

まだそれほど頻繁というわけでは無いが、彼女が桜通りに赴いて魔力を溜める為に吸血を行っているのは変わらない。それも、私と戦った際に随分と溜めていた魔力を消費してしまつたらしく、今は溜めなおすのに苦勞してゐるんだとか……。

別荘で経過した日数と外の時間を考えると、おそらくは十時から十一時といったところか。今日は最初から泊まるつもりだったし、真名にも連絡はしてあるから、時間が遅いのは気にしなくて良い。

一つ気になるとすれば、このちゃんの様子だが……危険が迫つていゝという様子も無いし、大丈夫だろう。その辺りは真名に依頼もしてある。

「学園側に見つかつたらどうするつもりですか？」

「今はまだ見つかるわけにはいかんからな……まあ、見つかったところで奴らがすぐに手を出してくるとは思えんよ」

「なぜですか？」

「私が坊やの生徒だからさ」

そう言つて、エヴァンジェリンさんはくつりと喉を鳴らした。

「私まで坊やのクラスに入れたんだ。私が起こした問題を、坊やに秘密にしたまま解決するかな？」

「それは、まあ……そうですね。それなら、その問題を通してネギ先生に貴女と関わってもらった方が……」

「そういう事だ。まあ、どちらにしろ私もまだ見つかるつもりは無いがな」

……まあ、エヴァンジェリンさんが見つかるつもりは無いと言うなら、それを信じるしかない。魔力の溜まっていない彼女にとつても、邪魔をされるのは不本意な事の筈だし。

にしても、ネギ先生か……彼はいつも一生懸命だったからなあ。たぶん、エヴァンジェリンさんの事を知ったら、学園が何も言わなくても自分から行動するだろう。そういう人だった。

といつても、戻ってからはあまり、交流らしい交流はしていない。このちゃんと会うときも別行動だし、図書館島の時も結局、殆ど話さずに終わった。

明日菜さんもそうだが……今度、あの二人とも話がしたい。何を話すとか、そういうのじゃないけど、ただ話したいと思う。

「ところで、刹那。随分と懐かしいゲームをしてるな」

「え？」

「コイツハ、御主人ガ大分前ニ持ッテキタゲームナンダヨ」

「そうなんですか？ 私は、あまりゲームは分からなくて……」

そんなに古いゲームなのかな、そう思いながら床に置いたコントローラーを見下ろしたが、ゲーム自体をあまり見ない私にとってそれは何の意味も無い行動。

強いて言うなら、麻帆良の技術にしては随分と声が機械音声過ぎる気はしたなと思つたところで、エヴァンジェリンさんがチャチャゼロさんを追いやつて隣に座つた。

「せつかくだ、私が相手をしてやろう」

「エヴァンジェリンさん？」

彼女は意気揚々とコントローラーを手に取ると、慣れた様子でキャラの選択を行う。

その様子に、おそらくはチャチャゼロさん相手に彼女もこのゲームをやりこんでいるのだろうかと考えて、自然と乾いた笑みが浮かんだ。

「お手柔らかにお願いします」

「なにを言う、本気に決まってるだろう」

「(容赦ない……)」

「……ああ、そうだな。せつかくだ、一つ賭けをするか」

「え？」

何度か使つた、一番使い慣れたキャラを私が選んだところで、彼女は言つた。

「負けた方が相手の言うことを一つきく。いいな？」

「は!?! いや、ちよつと」

「ほら、始まるぞ」

私が抗議しようとして口を開いたところで、画面は勝負画面へと変わった。

慌てて画面に視線を向けた私の隣で、心底楽しそうな声が聞こえる。

「地獄を見せてやるぞ」

「……………」

ゲームでこれほどの恐怖を味わうことになるとは、思いもしなかった。

結果から言えば、惨敗だった。それはもう、一方的というか圧倒的というか、とにかく負けた。

思った通り、チャチャゼロさん同様にエヴァンジェリさんも相当このゲームをやりこんでいたようで、私が立ち向かう術は無かった。

負けたことに溜息が零れる。こうも圧倒されると、悔しさよりも何だか清々しさを感じてしまいそうで……いや、別段そういうことも無かった。ただ、彼女たちの強さに呆気にとられた感じだ。

コントローラーを置いた私に、エヴァンジェリンさんは満足げに笑っている。見ると、とても悪い顔をしていた。

「約束は覚えてるな？ 刹那」

「約束って、あれはエヴァンジェリンさんが勝手に……」

「嫌なら勝てば良かったのさ。まあ、負けたのだから敗者が勝者に逆らうなど無理な事だ」

「……」

横暴、暴君、傍若無人。いろいろ浮かんで、エヴァンジェリンさんは相変わらずかと、変わらぬ彼女に苦笑い。

でも、まあ……何を言われるのかは分からないが、彼女が引き下がるとも思えないし。聞くしかない、かな。

「それで、私はどうすればいいんですか？」

「むっ……やけにあっさり引いたな」

「文句を言っても意味が無いと思ひまして」

「……まあいい。ふむ、そうだな……」

エヴァンジェリンさんは少し考えるように視線を逸らした。けれど、その視線はすぐに私へと戻される。

「今はいらん」

「えっ？」

「今はいらんと言ったのだ。思いついた時の為にとっておくでしょう」

「……はあ」

とりあえずは、保留という事か。でも、彼女の事だからそのうち、何か言ってくるんだろう。

もしかして、今この場でされた方が良かったんじや、そう思ったけれど。

「オイ、刹那。モウ一度俺トヤルゾ」

「む、何を言っている。もう十一時ではないか。子どもは早く寝ろ」

「(……子ども……)」

「ゲームで夜更かしをするのは許さん。刹那、貴様も早く寝ろ」

「あ、はい」

「チツ、ツマンネーナ」

文句を言いながら片付け始めたチャチャゼロさんを手伝って、ゲームを片付けた。

エヴァンジェリンさんに修行をしてもらおうようになって、気づいた事。彼女は、なんというか……とても優しい。

「明日も死ぬなよ、刹那」

「は、はは……」

……たぶん、優しい。

大浴場の日

春休みで、寮にいない生徒もいる。だから今の寮内は、普段よりも静かで落ち着いている。

いつもは騒がしいそこも、生徒がいなければ静かでいい。普段人が集まる時間よりも少し早い時間なら尚更だった。

「あ、ああつ、えつと、これは!!」

「あう、明日菜さくん……」

今なら人も少なくてゆっくり出来る、そう思つてやつて来たら、明日菜さんとネギ先生に会つた——大浴場で。

「えつと……」

大浴場は、私と明日菜さんとネギ先生の三人だけ。後から来たのは私だから、それまでは明日菜さんたち二人つきりだったということだ。

……たしか、ネギ先生がお風呂嫌いだと聞いた気がする。なら、明日菜さんがネギ先生をお風呂に入れようと連れてきた、といったところか。その理由が無くても、まあ変に誤解するような事は無いんだけど。

何を言おうか考える私に、明日菜さんとネギ先生は慌てて誤解を解こうと支離滅裂に言葉を紡ぐ。それを見て、苦笑いした。

「別に、誤解なんてしてませんから、大丈夫ですよ」

「ほ、本当……?」

「ええ。それより、入るならちゃんと入らないと、風邪をひきますよ」

「あ! そ、そうよね。ほら、早く入りなさい!」

「わっぷ!」

バシヤンと音を立てて、ネギ先生がお湯へと沈む。あれ、大丈夫かな。

「さ、桜咲さん、いっつもこの時間なの?」

「ああ、いえ。今日はたまたま……」

「ふ、ふくん、そうなんだ……」

髪を洗って、体を洗って。泡を流し終えたところで、何故かジツと明日菜さんが私を見てることに気づいた。

「あの、何か……?」

「えっ!」

シャワーを止めて振り返ると、彼女はまた慌てだした。

普段の彼女ならもっと落ちついていると思っただけ……どうしたんだろう。

「いや、えつと……桜咲さん、肌綺麗だなくって……思つて……」

「そうですか？　ありがとうございます」

このちゃんも、綺麗だつて言つてくれたなあ。まあその時の私の体は、今みたいに傷一つ無いこんな綺麗な体じゃ無かつたけど。

大切な人を護る為に負う傷を、私は後悔したりしなかつたけど。悲しそうな顔をするこのちゃんは見たくなかつた。

「刹那さん？」

「え？　あつ、わあ!？」

「きゃあ!!」

湯船に浸かつてぼんやりと思ひ出に浸かつてたら、突然のように目の前に現れたネギ先生に驚いてしまつて、バランスを崩してお湯に沈んだ。

明日菜さんが悲鳴をあげたのを聞いて、すぐに沈んだ体を起こして体勢を立て直す。

大丈夫？　尋ねてくる明日菜さんに、飲んでしまったお湯に少し咳き込んで頷いた。

ネギ先生が慌てて話しかけてくる。

「す、すみません、驚かせてしまつて」

「ああ、いえ。私も気づかなかつたのが悪いので……」

みつともない姿を見せてしまったと心中で悔みながら、改めて二人を見た。

特に何か話していたわけでもない。一つ気になるとすれば、明日菜さんのどこか不自然な態度だろうか。

「えっと、どうかしましたか？　神楽坂さん」

「え、なにが？」

「その、私に何か聞きたいことがあるのかと思ひまして……」

それが気になるから、態度が不自然になるのでは。そう考えた私の言葉に、明日菜さんは気まずそうに視線を彷徨させた。

「ああ、えーっと……」

「私に答えられる事でしたら、お答えしますよ？」

「本当？」

頷くと、明日菜さんは私では無くネギ先生を見た。二人して顔を見合わせる。

どうやら、ネギ先生も私に聞きたいことがあったらしい。二人揃って何を聞きたいのか、待っていると明日菜さんが聞いてくる。

「図書館でさ、何があったの？」

それは何度となくされた質問だった。といつても、されたのはあの直後だけだったが。

図書館島、このちゃんを護りたくて飛び出して、このちゃんを泣かせてしまったあの

日。地上に戻った私は、明日菜さんたちに何があったのかと聞かれたが、何も答えなかった。

クーフェイも楓も私の実力は知っているから、おそらく心配はしていなかっただろう。戻る前の私でも、まあ少なくとも死ぬような事は無いと思っていた筈だ。

だから、主に聞いて来たのは明日菜さんや綾瀬さんたちだ。あの場では何も答えず、その後も多くをこのちゃんと行動していた私に、このちゃんの事を考えたのか聞いてくることは無かった。あれだけ取り乱していたこのちゃんの前で、その時を思い出させるような事を質問するのは気が引けたんだろう。

だから、この質問は随分と久しぶりにされた気がする。

「秘密ですよ」

そして私はこの質問に、答える事はしない。

私の答えに明日菜さんとネギ先生は何か言いたそうな顔をしたけど、私が何も答えないうと思ったんだろう、明日菜さんは笑って誤魔化す様に水を掌でバシヤンと叩いた。

「そういえば私、桜咲さんと全然話したことないよね」

「そうですね。このちゃんから、神楽坂さんの話はよく聞きますけど」

「ええっ!!? ちょよ、何聞いたの?」

「さあ」

慌てた明日菜さんが面白くて、くすくすと笑った。明日菜さんは、何聞いたのよ？と頻りに聞いてくる。

「いつも元気で楽しいと、言っていましたよ」

「え、本当？」

「はい」

「そうですよ、明日菜さんは毎日元気ですし、とっても楽しいです！」

「あんたまで何言ってるのよ！」

「わあああ!!」

ネギ先生に同意されて、明日菜さんは照れたのかぐりぐりと彼の頭を苛めはじめ。逃げようともがくネギ先生が、明日菜さんの拳を擦り抜けてこちらへ来た。

「あ、こちらバカネギ！ 逃げんじやないわよ！」

「あぶぶぶぶぶぶぶ」

「か、神楽坂さん、落ち着いて……」

バシャバシャと近くで水が跳ねる。

止めに入ったら、明日菜さんは少し騒いだ後でようやく落ち着いてくれた。けれど、危険と判断したのか、ネギ先生は少しこちらに寄ってお湯に浸かっている。

「ところで、ネギ先生はもうここでの暮らしには慣れましたか？」

「あ、はい。皆さんとても親切で、毎日が凄く楽しいです！」

「それはよかったですね」

「刹那さんは、木乃香さんとお友達なんですよね？ 木乃香さんも、ちよつと前から何だか凄く楽しそうでしたよ」

「……そうですか」

ちよつと前、というのは私がこのちゃんと友達に戻った時の事かな。

そつか、二人の前でのこのちゃんの様子までは流石に分からないから、どうかとは思ったけど……楽しそう、なんだ。よかつた。

「でも、木乃香とは幼馴染だったんでしょ？ クラスも一緒だったのに、なんで話してなかったの？」

「色々とありまして……まあ、殆どが私の事情だったので、このちゃんには悪い事をしました」

「ふくん。まつ、仲良しに戻ったんなら良いけどさ。また木乃香泣かせたりしないでよ？」

「ええ、分かっていますよ」

もうこのちゃんを悲しませたりするつもりは無い。強く領けば、明日菜さんはニツと勝気に笑った。

不意に視界の端のネギ先生を見ると、彼は呆けたようにこちらを見ていて、それに首を傾げて問いかけた。

「どうしましたか？」

「……あ！ いえ、その……」

我に返ったようにハツとしたネギ先生が、何だか困ったように笑って言う。

「刹那さんって、その……もつと恐い人なのかと思つて……」

「は、はあ……」

「ちよつとネギ！ あんた何言つてんのよ？」

「す、すみませんっ」

正直で素直な答えに呆気にとられると、明日菜さんが慌ててネギ先生を叱りにかけたので、私はふるふると首を振る。

別に気にしてないと伝えて、どういう意味かネギ先生に尋ねた。

「えつと……刹那さん、最初の頃は僕の事、その、睨んでたと言いますか……」

「私か？」

「あ、でも僕の勘違いだったみたいです！」

「……」

たぶん、ネギ先生の言つてゐることは本当だ。

ネギ先生が魔法使いであることは、すぐに分かったから……戻る前の私は、彼の事を警戒していた筈だ。このちゃんに近づく敵かもしれないと。

「まあ、先生にそのつもりが無いのは分かってるけど」

ネギ先生は、ただクラスの人と仲良くしたいと思っただけに過ぎないと思う。

随所に穴が見えるとはいえ、魔法を秘匿する意識は一応あるようだし……正直なところ、穴だらけで不安だが。お願いだからこのちゃんの前で魔法の暴発は止めてほしい。

「んー、でもたしかに、桜咲さんって前はなんか、大人しかったよね」

「そうですか？」

「うん。あんま誰かと一緒にいたりもしないし、朝倉も言っただけどどういいう心境の變化？」

「別に、言う程の事は無いですよ」

というよりも、言えることが無い。

明日菜さんは頻りに、そう？ と首を傾げたけど、私が頷き返すと、とりあえずは納得してくれたみたいだった。

「ね、せっかくだしき、今度一緒に遊びに行こうよ」

「遊びに、ですか？」

「うん。だって、木乃香とは遊びに行くんでしょ？ 私も桜咲さんと遊びたいな」

「いいですけど……」

「それじゃ、さっそく明日ね！」

「ええっ!？」

思わぬ日程に驚いたら、明日菜さんは途端に不安そうな顔をした。

「駄目だったかな？」

「あつ、いえ。大丈夫ですよ、ただ少し、驚いただけで」

「そっか、良かった。あ、でも本当に無理だったらいんだからね？」

「平気ですよ」

念を押してくる彼女に笑い返すと、ほっと安心したように胸を撫で下ろされる。

用事も無いし、暇だったのは本当だ。暇なら暇でエヴァンジンさんに別荘を借り

ようかとも考えていたけど、別段それは明日で無くても問題はない。

楽しみです、そう思わず呟いたら、とても嬉しそうに明日菜さんが笑った。

「いいなあ、明日菜さん……」

ふと、羨ましそうな声が聞こえてネギ先生を見ると、彼は明日菜さんを見上げていた。

明日菜さんもそれに気づいて、首を傾げてそれから、私を見た。

「ね、こいつも一緒に良い？」

「え？」

「いいですね。ネギ先生も一緒に行きませんか？」

「……………いいんですか？」

戸惑いがちなネギ先生に、もちろんですと頷く。彼は子どもらしい無邪気な笑みで言った。

「ありがとうございます！ 僕、すつごく楽しみです！」

……………いくら先生をしていても、子どもは子どもに変わらない。目の前で遊ぶ算段をされて、自分だけが留守番というのはやはりつまらないし面白くないのだろう。

この辺りはまだまだ子どもなんだなと思つて、思わず吹き出す前に誤魔化す様に笑つた。二人も笑つていて、色々な問題を忘れてしまいそうになる。

「……………いいん、だよな」

友達になつても、仲良くしても。そう思うのは、きつと自分がそう思いたいから。

全てを遠ざける事は出来ない。問題から目を逸らすことは出来ないし、逃げる事も出来ない。

ネギ先生が魔法使いである事を忘れたわけでは無いし、明日菜さんがその従者になる可能性を忘れたわけでもない。それを言うなら、エヴァンジェリンさんだつて魔法使いだ。

「……………楽しみですね」

ただ、前のように話せたらと思った。友達でいられたらと、そう思った。

そうして、私の春休みは終わる。忙しくも、充実していたと思えた。

既に私の知る過去からは随分と遠のいていて、けれど私はそれに気づきながらそれが意味することに気づいていない。

ただ変わりゆく日々を前に、これで良いのかと自問自答を繰り返しながらやがて、新学期が幕を開けた。

吸血鬼事件の日

少し静かだった寮内も騒がしさを取り戻した頃。

春休みが終わって、今日から新学期が始まり私たちは三年生となった。

「せつちゃん、おはよーさん」

「おはよ、桜咲さん」

「おはようございます」

「おはよう、このちゃん。神楽坂さんに、ネギ先生も」

今日もこのちゃんたちと一緒に学校に行く。このちゃんと一緒に行くことが増える
と、自然と明日菜さんとネギ先生とも一緒に行くようになった。

春休みに三人で遊びに行ったりして、前よりも仲良くなったと思う。あくまで、普通の友人としてだけ。

ただ困るのが、ふとしたときに私を見る視線だ。たぶん、図書館島の一件にまだ納得
できていないんだろう。私が魔法を使えるのか疑っているのかもしれないが、どうし
う。このちゃんの前で迂闊な行動はとらないでくれるよう祈るしかない。

「そーいや聞いた？ あの時」

「噂?」

時間は過ぎて、今はクラスの人全員が教室で着替え中。新学期早々にまずは身体測定が行われるのでその為だった。

「あ、知ってる。桜通りの吸血鬼ってやつでしょ」

「えーっ、何それ何それ?」

興味津々で話に食いつく人たちに、えつと……柿崎さんが説明する。

「なんかねー、夜になると出るんだって。寮の桜並木に……真つ黒なボロ布に包まれた、血まみれの吸血鬼が……!!」

「キ、キヤーツ!!」

「ひいひいひい!!」

恐がりの人は、この話を聞いた時点で涙目だ。でも、このちゃんは怖いというよりどこか面白がっているように見える。

「せつちゃん、知ってた?」

「う、うん。一応」

吸血鬼……知ってるも何も既に友達ですとは、言えないよなあ。

でも、そんなに噂になっていたんだ。春休みが終われば早々に噂になるだろうとは思ってたけど、さすがに初日からとは思わなかった。学園側がどの程度までこの噂を把

握しているかは、今はまだ分からないが。

「こんなかな!？」

「いや、このちゃん……違うと思うよ……」

チュパカブラって、なに？

「先生、大変やーっ！ まき絵が、まき絵が!!」

「何?! まき絵がどーしたの!？」

外で待っていたネギ先生に向けられた声に反応して、全員がそろって騒ぎ出す。

ちらりとエヴァンジェリンさんを見ると、にやりと笑い返されて……ああ、やつぱり貴女が原因ですか。

その夜、私たちは少し買い物に行き、宮崎さんだけが先に寮に帰ると分かれた矢先、桜通りの噂に心配になった明日菜さんが送って来ると、宮崎さんを追いかけて行つた。

「んー、うちも心配やし……ちよつと行つて来る」

「あ、待つてこのちゃん。私も一緒に行くよ」

「ほな、行つて来るわ」

綾瀬さんたちと別れて道を戻る。

騒ぎになつて早々に、エヴァンジェリンさんが動くかどうかは分からないけど……で

も、そういうばここ最近は、頻繁に外に出てるようだった。

なら、もしかして遭遇しちゃったり、

「(しますよねえ……)」

明日菜さんに追いついたところで、服がボロボロになった宮崎さんを抱えてるネギ先生を見つけた。宮崎さんに怪我は無さそうだ。

というより宮崎さん、ほぼ裸……このちゃんは訳が分からない状態みたいだし、どうにか誤魔化しておかないと。

「すみません、宮崎さんをお願いしますー！」

「あ、ネギくん!？」

慌てた様子のネギ先生から宮崎さんを任され、当の本人は止める間もなく走り始めてしまう。

参ったな、そう思いながらもネギ先生から任された宮崎さんに、急いでベストを脱いだ。

「とりあえずこのちゃん、宮崎さんにこれ着せてあげて。何も無いよりはマシだと思うから」

「う、うん」

上はまあこれでいいとして、下はどうしよう。着せるより、上にかけた方が良かった

かな。

ものすごい速さで走っていくネギ先生は、とりあえず足が速いだけってことにして、今は明日菜さんも連れて寮へ――、

「ま、待ちなさいよ!!」

「神楽坂さん!?!」

え、あ、追いかけてしまった……どうしよう。もしかして明日菜さん、もう十分に関わってしまったてるんだろうか。

自分から向かってしまうんじゃない、私にはどうしようもない、よな……。

「あ、明日菜―!?!」

「このちゃん、今は宮崎さんを寮に連れて行こう。服、着せてあげないと」

「う、うん……でも……」

「ネギ先生は、神楽坂さんが連れてくるよ。たぶん」

宮崎さんを背負い、見えなくなった二人を心配するこのちゃんの手を握って歩き出した。

「ほい」

「ありがとうございます―」

宮崎さんの同室者がまだ帰っていないなかったので、仕方なしにこのちゃんたちの部屋に

連れてきた。

ベストは既に回収してある。今は応急処置に、バスタオルを巻いてもらっていた。

「なにがあつたんや？」

「それが、私もよく覚えてなくて……凄く恐かったのは、覚えてるんですけど……」

「……怪我が無くて、良かったですね」

「はいー。ありがとうございますー」

おそらく、エヴァンジェリンさんが血を吸う前にネギ先生が駆けつけたんだろう。

宮崎さんにすれば運が良かったと言うしかないし、エヴァンジェリンさんにとっては運が悪かったと言うしかない。

「でも、こんなに早く……」

エヴァンジェリンさんとしては、まだ暫くは魔力を溜めたかっただろうに……たぶん、昨日の佐々木さんが原因だろう。生徒が被害にあつて、それが魔法の仕業となればネギ先生が黙っている可能性は低い。

「にしても、明日菜たち遅いなー。大丈夫やろか」

「どうだろう。もう少し待つて戻らなかつたら、私が探しに行つて来るよ」

「駄目や。それやと、せつちゃんも危ない目に会うかもしれんやろ」

「でも、このちゃん……」

「駄目や」

……図書館島の一件以来、このちやんが頑固だ。

「何も言わずに飛び出したのは、拙かったかな……」

結局、泣いているネギ先生を明日菜さんが連れ帰ったのは、それから一時間が経った頃だった。

翌日、ネギ先生は授業中も常にぼんやりとした様子だった。

おそらく昨夜のエヴァンジェリンさんとの戦闘が相当に堪えているのだろう。そのエヴァンジェリンさんは、悠々と今日の授業をサボることにしたらしい。

完全に舐められてるなあ、ネギ先生。でも、いくら弱体化してるとはいえ相手はエヴァンジェリさん、勝てないのも無理はないと思う。

「あの……つかぬ事をお尋ねしますが、和泉さんは十歳の年下の男の子がパートナーなんて、嫌ですよね……?」

「えっ……」

そのネギ先生が、唐突に何を言い出すのかと思えば……少しばかり顔を顰めてしまった。

直接的に魔法に関する情報は言っていないが、今の彼の言うパートナーとは即ち、魔

法使いの従者を意味するのだろうか……大丈夫なんだろうか、一般人に対しての今の発言は。

ネギ先生自身は色々と頑張っているのだろうし、魔法使いというのを抜きにしたならばその心根は敬意を表するに値するが……魔法使いとしては、あまりにもお粗末な部分が目立つ。

これは、このちゃんに魔法の存在が知られぬように更に警戒した方が良いかな。

そのうちにチャイムが鳴ってネギ先生が出て行くと、何故かパートナーに立候補する人が多数現れ出した。

「刹那さん」

「はっ？」

騒ぎの中で飛び交う、ネギ先生が王子様という噂にどうということだろうと思いながら騒ぎを遠巻きに眺めていたら、声をかけられた。

振り向いた先には茶々丸さんがいて、いつも一緒のエヴァンジェリンさんはサボりなのでいなかった。

「放課後、マスターが来るようにと」

「そうですか。エヴァンジェリンさんの家に行けば？」

「いえ、私が直接ご案内しますので、放課後は教室でお待ちください」

「分かりました」

呼び出し、か。いったい何の用だろう。

でも、昨日の事を聞くにはちようどいいか。いったい、ネギ先生と何があったのかは気になるところだし……。

「なあなあ、せつちゃん」

「ん？ なに、このちゃん」

静かに茶々丸さんが席に戻ったところで、騒ぎに混じってたこのちゃんが私に聞いてくる。

「せつちゃんは、ネギ君のパートナーってどう思う？」

「……そうだね」

パートナー、東の従者、仮契約。

「遠慮しておくよ」

私は笑みを浮かべて、このちゃんの質問に答えた。

約束の放課後、私は茶々丸さんと共に教室を出た。

このちゃんはどうかやら用事があるらしく、聞けば、クラスの方たちと何やら企んでいるそうで、それを手伝うんだとか。

「ん……来たか、刹那」

「こんにちは、エヴァンジェリンさん。ずっとここでサボってたんですか？」

「いいや？ 屋上で日向ぼっこもしていたぞ」

「……つくづく、物語の吸血鬼からは想像できませんね」

「不老不死が日光如きでやられて堪るか」

案内された先で、エヴァンジェリンさんは退屈そうにしていた。彼女にとって、授業も同様に退屈なものでしかないのかもしれないが。

「それで、どうしたんですか？」

「あの坊やに、私の正体が知られたんでな。少々騒がしくなると、教えてやろうと思っただけだ」

「もう十分に騒がしいですよ。とりあえず、このちゃんだけは巻き込まないでください」

「なら、お前を巻き込むのは良いのか？」

「……私、ですか？」

どうしてそこで私が出てくるんだらう。

「巻き込むも何も、私はこのちゃんを護るのに忙しいですよ」

「その割に、長谷川千雨の相手をしてやっているようじゃないか。余裕はありそうだが？」

「……なんで知ってるんですか?」

「さあな」

エヴァンジェリンさんの言うとおり、たしかに千雨さんと話したり出かけたたりと、お守りの効果とも関係の無い交流を持つてたりする。

今までは話せる相手もいなかったようだし、時間があれば話し相手をしているが……基本は寮の部屋だ。出かけるのだってほんの数回、買い物に行っただけなのに——どうやってそれを知ったんだろう。

「……巻き込むって、具体的にどうするつもりですか?」

「そうだな、私と仮契約でもしてみるか」

「怒りますよ?」

「くくつ、冗談だよ」

このちゃんに仮契約をさせないようには思っている私に、仮契約をしてどうするんですか。

エヴァンジェリンさんの場合、彼女が本気になればそれも出来そうだから困る。冗談が本当になりそうで冷や汗どころじゃない。

そう思つて、悪戯が成功したように笑う彼女に溜息を飲み込んだら、その彼女から何かを投げられる。

反射的にそれを受け止めると、それはチェーンの先に赤い石のついたネックレスだった。

「念話用の魔法具だ。私が呼んだらすぐに来い」

「魔法具？ ……なんで、私に？」

「私がお前を気に入ってるからだ。常にそれを身に着けておけ、いいな？」

「は、あ……分かりました」

気に入っている、か。いくら特殊な経験をしているとはいえ、私にそこまでの価値は無いと思うんだけどなあ。

受け取ったネックレスを首にかけ、制服の下に隠したところで、何やら聞き覚えのある声が聞こえた。

「ネギー!!」

「ん？」

「あ」

叫びながら、明日菜さんが現れた。

彼女はこちらが気づくと同時に私たちの存在に気付いたようで、バツと身構えてきた。

「ほう、神楽坂明日菜か」

「あんた達！ ……つて、え？ 桜咲さん？」

「どうも、神楽坂さん」

一緒にいた私に気づいて神楽坂さんは戸惑ったようだったけど、すぐに首を振ってエヴァンジェリンさんを睨んだ。

「ネギをどこへやったのよ！」

「ん？ 知らんぞ」

「えっ」

明日菜さんはネギ先生を探しているらしい。最初に考えていたエヴァンジェリンさんが犯人という予想は外れたみたいだが。

昨日の一件から、明日菜さんはエヴァンジェリンさんを警戒しているんだろう。それに対して、エヴァンジェリンさんが自分に力が無い事を説明してる。

……いいのかな、私の前で魔力とか満月とかそんなに説明して……明日菜さん、疑うんじゃないかなあ。

「そ、そういうえば桜咲さん！ なんでここにいるの？」

ネギ先生の事を言われた明日菜さんが、顔を赤くしてその矛先を私に向けた。

「ああ、それは……」

呼び出されたからです、と言えるはずも無く。どうしようかと考えを巡らせる。

チラリとエヴァンジェリンさんを見ると、彼女の楽しそうな瞳と目が合った。何も言わず、私がどう返すか見ているつもりなんだろう。

そういえば、彼女も茶々丸さんも茶道部だったよな。それなら、話を合わせてくれるだろうか。

「茶道部で使う、お茶菓子の相談をしてたんです。この前、一緒に学校に来たときに話をして……少しくらいなら和菓子も作れるので、試作品をいつ食べてもらおうか話してたんですよ」

「お茶菓子？」

「ええ。まあ、簡単なものですけど……」

一番いいのは、この辺でエヴァンジェリンさんが肯定してくれることなんだが……彼女は興味深そうに笑っていた。

「出来たら持って来い。楽しみにしてるぞ」

「……はい」

ほつと密かに胸を撫で下ろす。これで明日菜さんは誤魔化せた、かな。

ただ、ありもしない約束をする羽目になったけど。でも、そのうち作ってみようと思っていたのは本当だし、別にいいか。

「そ、そっか！ ごめんね、邪魔しちゃって」

「いえ、お気になさらず……ん？」

ピクツと眉が跳ね上がる。ほんの僅かにだが、反応があつた。

私の変化に気づいたエヴァンジェリンさんが訝しげに見上げてくる。それに笑つて、それじゃ、と声をかけた。

「私はもう行きますね、ちよつと用事もありますので」

「ああ」

「お気をつけて」

「神楽坂さんも、それじゃ」

「えつ、あ、桜咲さん？」

タツと走り出す。この反応は、命に危険があるようなものじゃない。

「(というより、この反応つて早々無い筈なんだけど……)」

このちゃんに渡したお札。それが知らせてくれるこのちゃんに迫る危険だが、こんな反応は珍しい。

「(場所は……お風呂？ ……だからか。でも、なんでそんな場所に……)」

伝わってきた場所に少しの納得と、それ以上の疑問を抱えつつ、飛び込むようにして中に入った。

中の騒ぎ声は外まで聞こえていたが、それ以上の音量が耳を貫いて顔を響める。

「このちゃん！」

「あ、せつちゃん！ 大変や、ネズミやネズミ!!」

「……ネズミ?」

危険の正体はそれか? このちゃんを背中に庇いつつ、視線を巡らせる。

素早く動き回る細長い生き物が、どういうわけかクラスの方たちの水着を脱がして回っていた。

「(なんで水着、というよりこの生き物、絶対にカモさんだよな)」

エロオコジョ、と呼ばれていたあのカモさんが、まさかこんな騒動を起こしていたとは——正直、カモさんの株がガタ落ちだ。元からそんなに高くなかったけど。

そう思ってたなら、そのカモさんがこっちに向かって来た。キランと目を輝かせたように見えたけど、飛びかかってきたそれを片手で弾き飛ばす。

「ギャン!!」

壁にベシヤツと叩き付けられたカモさんが、素早い動きでお風呂場から出て行く。

私が来た時点で反応は無くなっていたが、やはり危険の正体はカモさんだったらしい。

「(面倒な……)」

お札が知らせてくれる危険は、命にかかわるものだけじゃなく、こういったものも含

まれる。

「つまりは……持ち主に破廉恥な行い等をしようとする輩が迫った場合。持ち主の意思と関係なくそれを行う輩が出た場合、私にとってそれは等しく害である。」

「なにやっつてんのよー!!」

後ろから明日菜さんが怒鳴り込んできた。

さて、参ったな。これからは、カモさんがこのちゃんを巻き込まないように、さらなる警戒をしないとイケないらしい。

友達を助けた日

昨日のオコジヨ、カモさんはネギ先生のペットとして、このちゃんたちの部屋で飼うことになったようだ。

そういえば、寮はペット可なのを思い出した。うちのクラスには他に飼っている人っていないのかな？

「でも、下着で寝るって……いいの？このちゃん」

「気持ちいいんやろ、きつと」

学校に向かって走りながら、そんな会話。

このちゃんはあまり気にして無いみたいだけど、良くないと思うよこのちゃん。長がそれを知ったらどうなるか……長は、結構な親馬鹿なのだ。

「それより、ネギ先生たちを置いて来ても良かったの？」

「んー、たぶん大丈夫やろ。でも、なんやネギ君、エヴァちゃんのこと恐がつてるみたいなんよ」

「そうなんだ」

「どうしたんやろねー」

「さあ、とそれだけを返した。

エヴァンジェリンさんは、今日もまたサボりだろう。そう思いつつ、騒がしい教室の扉を開けた。

やっぱり、エヴァンジェリンさんはいなかった。

放課後、私はこのちゃんと千雨さんと共に街に遊びに来ていた。

私を間に挟んで、このちゃんと千雨さんも仲良くなった。千雨さんは時折、このちゃんの天然つぷりに眩暈を覚えているようだが、それでも楽しんでくれていたみたいだ。

「かわええ〜！ なあちーちゃん、この服着てみる？ 絶対ちーちゃんに似合うえ〜」

「あ、ああ……」

今、私たちがいるのは麻帆良の街にある服屋だ。

所狭しと並んだ服は、やけにフリルやレースで飾ったものが多い。たしか、ロリータとか言ったかな？

このちゃんが千雨さんに渡したのは、そんな服の中の一つ。ピンク色のワンピースで、やっぱりフリルやレースがたくさんだ。

麻帆良にこんな店があったことにも驚いたけど、何よりもこのちゃんがこの店を知っていることに驚いた。

「せつちゃんも、これ着てみよ〜」

千雨さんに服を渡したこのちゃんの矛先が、私に向けられる。その手に持つて差し出された服を見た瞬間、口元が引き攣った。

「わ、私は止めとくよ……」

「え〜！　なんでなんで？」

「おい刹那、テメエだけずりいぞ〜」

試着室に入る寸前、千雨さんが不満げにこちらを睨んで言つて来る。

いやだって私にそんな服、似合わないし。

「このちゃんは着ないの？」

「うちか？　んー、どないしよ〜」

さりげなく服を取り上げて棚に戻す。このちゃんの目が別の場所に行ったことに、ほっと息を吐いたら、

「せつちゃん、これこれ〜！」

「私はいいつてばー!!」

別の服を持つて突進してくるこのちゃんを避けた。

いや、本当に無理だつて。そんなひらひらふりふりしたの着たら、私の中の何かが壊れる、絶対に壊れるから、勘弁してこのちゃん。

「つお、おい、木乃香。やつぱこれは……」

「あ、着替え終わったん？」

戸惑いがちな声と共に、千雨さんが試着室から顔を覗かせた。

カーテンで首から下を隠している彼女に、このちゃんは容赦なくそのカーテンを開けた。

「ふわああ、ちーちゃんかわええな〜」

「ええ。とてもよくお似合いです、千雨さん」

「っ……」

顔を真っ赤にした千雨さんに、思わず見惚れた。

髪も眼鏡もいつも通りだけど、服一つでこうも変わるのか。このままでも可愛いけどきつと、眼鏡を外したらもっと可愛い……いや、綺麗になるんだろうなあ。

「なあ、ちーちゃん。眼鏡外さへん？ あと、髪もおろそ」

「なっ……無茶言うなよ!？」

「でも、勿体ないえ。一回だけでいいから、な？」

「無理だつて!!」

眼鏡は伊達なのだとこの前教えてもらったが、外してくれるにはまだ時間が必要そう
だ。

「(ゆっくりと、慣れてもらおうしかないか)」

でもそのうち外してもらおう、と密かに決意して、私はこのちゃんと千雨さんのやり取りを眺めていた。

その時、ふと私を襲った妙な感覚。首を傾げるよりも早く、頭の中に声が響いてくる。

『おい、刹那』

『……エヴァンジェリンさん?』

『ああ』

……なるほど、これがエヴァンジェリンさんから受け取ったネックレスの効果か。実際に話すのは初めてだな。

念話、という事で口に出さずとも思うだけで相手に伝わるようだ。なんとなく、仮契約カードを使って話すときに近い感覚を覚える。

『どうかしましたか?』

『悪いが、茶々丸についてやってくれ。今あいつを一人にするのは、少々心許ない』
『……何か拙い事でも?』

『坊やにアドバイザーがついたみたいだな。まあ、心許ないと言ってもそう心配するこ
とは無いだろうが……念のためだ』

『分かりました。茶々丸さんは、今どこに?』

『少し待て、辿ってみる』

『お願いします』

ぶつりと、何かが切れる感覚。エヴァンジェリンさんの声が聞こえなくなった。

おそらくは、彼女の繋いだ回線が切れたんだろうけど……これって、私の方からも繋げるのだろうか？ 今度、試してみようかな。

「このちゃん、千雨さん」

「ん？ どうしたん、せつちゃん」

試着室から、制服に着替えた千雨さんが出てくる。首を傾げたこのちゃんに申し訳なくなりながら言った。

「ごめんなさい、実はこの後、用事があったのを思い出して……悪いんだけど、先に帰っててもらえるかな？」

「そうなん？ うう、残念やね……」

「本当にごめんね」

しょんぼりするこのちゃん。嘘では無いとはいえ、罪悪感に胸が締め付けられる。

「今度、駅前のクレープ奢るから、それで許して？」

「……約束な？」

「うん。千雨さんも、埋め合わせは必ずしますから」

「ん？ ああ。でも、あんま気にすんな」

「いえ。それじゃ、すみませんが私はこれで」

「……んじやな」

千雨さんは、詳しくは知らないけどあるということを知っている。たぶん、私に急用事が出来たのも、何かあったのだと気づいているだろう。

だから、何も言わずただ見送ってくれた。千雨さんの事だから、この後はあまり長居せずにこのちゃんと共に寮に帰るだろうけど、念のために式を放っておく。もしもすぐに動けないような事態に陥ったら困るからな。

『刹那』

『場所は分かりましたか？』

『ああ。今は——』

『——分かりました。では、そちらに行ってみます』

『頼む』

店を出たところで、エヴァンジェリンから念話が繋がって茶々丸さんの場所を把握する。

教えられた場所に向かって走り、街の中心から離れて行く。向かう方向には、エヴァンジェリンさんの家がある。

「(この辺だと思っただが……)」

人気の殆ど無い道で辺りを見回したが、茶々丸さんの姿は無い。早く見つけようと足を踏み出したら、猫の鳴き声が聞こえた。

……そういえば茶々丸さんが、たまに家で猫缶の用意をしていたのを見たことがある。ここはエヴァンジェリンさんの家からそれほど遠くないし、もしかして野良猫の世話をしていたりするんだらうか。

なんにしても他に手がかりが無くて、とりあえずはと思い鳴き声の方に足を向けると、幸運にも茶々丸さんの姿があった。

そして同時に、彼女と対峙するネギ先生と明日菜さんの姿も。

「まさか……」

遠目から見ても、彼らが戦っているらしいことはすぐに分かった。

茶々丸さんはエヴァンジェリンさんの従者。ネギ先生たちがエヴァンジェリさんと戦うにあたって、その従者を先に狙うというのは戦法としては可笑しくない。

可笑しくないどころか、むしろ正しいとも言えて、だけど。

「魔法の射手 連弾・光のー矢!!」

「……!!」

明日菜さんの攻撃を躲した茶々丸さんに、ネギ先生の魔法が迫る。

「追尾型魔法接近弾多数、よげきれません——すみませんマスター……もし、私が動かなくなったら猫の餌を——」

「——ッ」

気づいたら、私は茶々丸さんの前に飛び出していった。

「(気での相殺は無傷では無理。回避も遅い。夕風はネギ先生たちに気づかれる)」

向かいくる魔法を見据えて思考する。一瞬の後、私は懐からお札を取り出し、二本の指に挟んで突き出した。

「防御結界——透壁」

見えない壁の結界が、私と茶々丸さんを囲む。直後に魔法が壁にぶち当たって、強い光が視界を覆った。

じりじりと、指に挟んだお札が端から焼け焦げはじめ。さすがはネギ先生、なかなかの威力だ。この結界は発動までの時間が短い分、強度は劣る。耐えきれるかどうか。

「……………」

結界が限界を迎えると同時に、魔法も消滅した。どうにか守り切れたと、息を吐く。

それと同時にお札が炎に包まれ灰と化し、風に運ばれて飛んで行った。

「刹那さん……」

「茶々丸さん、エヴァンジェリンさんが心配していましたよ。早く帰ってあげてください」

いい……いいですか?」

「はい……ありがとうございます」

「いえ、それじゃ」

ペこりと頭を下げた茶々丸さんが、ジェット噴射で飛んでいく。土埃が目染みて痛い。

「さ、桜咲さん……」

恐々と声をかけられて振り向いた。さて、問題はこちらだろうな。驚愕しているネギ先生と明日菜さんに、とりあえず会釈を返す。

「こんにちは、ネギ先生、神楽坂さん」

二人は依然、驚いて何も言えないようだった。そんな二人の後ろからカモさんの走ってくる姿を見つけて、ややこしくなる前に更に口を開く。

「今の、凄かったですね。晴れてますけど、雷でも落ちたんでしょっか?」

「へっ!? あ、えつと、う、うん! そうかもね!」

明日菜さんが頻りに頷いて話を合わせてきた。ネギ先生は未だ驚愕から動けないでいる。

まあ、この分ならネギ先生の事は明日菜さんに任せても良いだろうと思つて、私はそのままどうやってこの場を離れようかと考えた。

「エヴァンジェリンさんから、用事があるので茶々丸さんに早く帰るように伝えてほしいって頼まれて、探してたんですよ。茶々丸さん、よく寄り道するらしくて」

「ふ、ふくん。そうなんだ……」

「ええ。では、私もこれで——」

「やいやいやテメエ！」

立ち去ろうとした私に、タタタツと走って来たカモさんがネギ先生の肩によじ登って叫んだ。

「テメエもエヴァンジェリンの仲間か!？」

「うえっ! カモくん!？」

どうやら私はすんなりとは帰してもらえないらしい。

カモさんの叫びに我に返ったネギ先生が慌てだして、明日菜さんもどうしようといった焦った顔をしている。

「アニキ、こいつもエヴァンジェリンの従者に違いないですぜ!」

「ええっ!？」

「ちよつと、何言い出してんのよエロオコジヨ!!」

騒ぎ出した三人に、私は困ったように笑うしかない。

どうやらカモさんは妙な勘違いをしているようで、私を敵だと思っているみたいだ。

そういえば、修学旅行の時も最初は敵だと勘違いされてたような……参ったな。

今はまだ、私の事をネギ先生たちに知らせるつもりは無い。それによる利点は私に無いし、知られてこのちゃんにまで情報が洩れては困る。

だから事無きを得て終わりたい私は、多少の強引さを感じつつも誤魔化す事にした。

「凄いですね、そのオコジョ。腹話術ですか？」

「へっ!？」

「結構難しいと思つてたんですよ。そんなに上手にしゃべれるなんて、驚きました」

「……………あ、あああつ、そうなの! そうなのよ!」

「ぶぎや!!」

何も知らぬふりをして笑つて言うと、明日菜さんもまた笑つてカモさんの首を絞めた。絞められたところから上が真っ青に染まつてるが、それに気づいているのかいないのか。

「それじゃあ、私はこれで。お二人とも、お気をつけて」

「う、うん! じゃあねー」

「さようなら、刹那さん」

戸惑いと焦りと困惑とを抱えた二人に背を向けて、私は来た時とは反対にゆつくりとした足取りでその場を立ち去った。

ネギ先生が茶々丸さんを襲撃したにあたって、懸念していたことがある。

茶々丸さんが襲われたと聞いた時のエヴァンジェリンさんの反応だ。それが気になって、私は急いで彼女の家を訪ねたのだが……対峙して、息を呑んだ。

「坊やの分際で、頭の回る事だ……くくくつ」

ソファーにふんぞり返った彼女は、明らかに怒っていた。

茶々丸さんにこうなった経緯を聞くと、最初は明日菜さんがネギ先生の従者となっていた事を面倒くさそうな、面白そうな様子で聞いていたそうだが、どうやら私が間に入ったことまで聞いてしまったらしい。

「刹那さんがいなければ、機能停止していたかもしれない」

そう茶々丸さんが説明した。私がエヴァンジェリンさんの家に着いたのは、その直後だった。

「ただ血を貰うだけで済ませてやろうと思ったんだがな……それだけでは足りん」

「つ恐いです、エヴァンジェリンさん………茶々丸さん、どうにかなりませんか？」

「無理です。今のマスターは、過去に類を見ない程にお怒りです」

「どう甚振ってくれようか。腕を引きちぎるのも面白そうだ」

「お、落ち着いてください、エヴァンジェリンさん」

あまりに物騒な発言が飛び出したので、慌てて声をかけた。

「茶々丸さんを傷つけられたお怒りはよく分かりますが、とにかく今は落ち着いて……」
といつても、あまり強く言うことは出来なかった。

今のエヴァンジェリンさんは、私にとつてはこのちゃんを殺されかけたも同然だ。このちゃんがそうなつたら、私も同様に怒りを示すだろう。

でも、だからといつてこのまま放つておけば、ネギ先生が本当に殺されてしまうかもしれない……そう思うと、困り果てはしても無視するわけにいかない。

「刹那さん」

彼女をどうすれば宥められるかと考えていた私に、茶々丸さんが聞いてくる。

「マスターは、何故あれほどのお怒りなのでしょうか」

「……それは、茶々丸さんが傷つけられたからですよ」

「私が？」

分かり切つた事を聞いてきた茶々丸さんに一瞬言葉を無くしたがすぐに、ああ、と納得した。

今の茶々丸さんは、ネギ先生と交流する前の茶々丸さんだ……まだ、感情とかそういうのを、理解していないんだ。

だから、エヴァンジェリンさんがどうして、何に對して怒っているのか理解できない

んだらう。

「茶々丸さんが大切だから、傷つけたネギ先生を許せないんです」

「私が、大切……ですか？」

「はい」

まだ理解できていないようで、茶々丸さんは首を傾げた。心底分らない、そんな風に見えて、私はそれが微笑ましく思える。

よく考えれば、ロボットとはいえ茶々丸さんって、生まれたばかりなんだよなあ。こんな動作を見ていると、何だかとても子どもらしいというか……本当に子どもを見ている気分になってくる。まあ、私も見た目は子どもだが。

「——刹那」

「……落ち着きましたか？ エヴァンジェリンさん」

「ああ。刹那、礼を言うぞ。茶々丸を助けてくれて、ありがとう」

「気にしないでください。私が、勝手にやったことです」

「だとしても、私の家族を守ってくれた事に変わりは無いさ」

言葉の端々から、茶々丸さんが大切だという気持ち伝わってくる。

そもそも、そうでなければ彼女が私に茶々丸さんの事をお願いするはずが無いし、こうして私に礼を言うはずが無い。

「どうですか、茶々丸さん。私の言った通りでしょう？」

「……はい。そのようです」

そう呟くように言った茶々丸さんは、どこか嬉しそうな顔をしていた。

お呼びだしの日

茶々丸さんがネギ先生に襲撃された翌日の土曜日。

「さて、剎那君には少々聞きたいことがあるんじゃないかな」

「私に答えられる事でしたら」

私は、学園長室に呼び出された。

連絡があつた時は驚いた。仕事の依頼で呼び出される事は結構頻繁にあるが、それ以外の理由で呼び出されることは少ない。というより、殆ど無いと言つていい。

机に腕を組んで話す学園長の隣には、高畑先生もいた。今日は出張では無いらしい。

「なぜ、あんなことをしたんじゃない?」

「と、言われましても」

抽象的すぎて、どのことを言っているのか全く分からない。

首を傾げた私に、学園長は一つ頷いて見せた。

「……そうじゃな、では、先日の事から聞かせてもらいたいのお。どうして茶々丸君を助けたんじゃない?」

「目の前で友人が殺されかけるのを、むざむざと見過ごすことも出来ませんでしたので」

「しかし、あの場で飛び出すのはいささか早急だったんじゃないかの？ ネギ君に、刹那君が魔法の関係者だと知られる恐れもあったじやろう？」

「たしかにその可能性はありましたが、ネギ先生には私が関係者であるという明確な証拠も根拠もありませんでした。魔法の秘匿する関係上、その状態で話を振ってくる事は無いでしょうし、こちらが何も知らぬと言えば追及してくる事も出来ません」

「気づかれる事は無かった、と？」

「はい」

現に明日菜さんは私に話を合わせてきた。ネギ先生は驚いて固まったままだったが、少なくとも日常の様子を見れば秘匿の意識が皆無というわけでもない……できているかはともかくとして。

だから、昨日の件で私の正体を知られる可能性は限りなく低かった。疑いはしても、踏み込んで聞くことは出来ないのだから。

「……ここ最近、やけにエヴァンジェリンと親しくしておるようじゃが、彼女も茶々丸君も友人かの？」

「ええ」

「彼女も魔法使いじゃが、いいのかの？」

「問題ありません。エヴァンジェリンさんは、あくまで普通の友人ですから」

「ふむ、そうか……」

事実無根の嘘を吐いた。なれ初めからして、彼女と普通の友人であるとは言い難い……友達であることに違いは無いが。

ただ、微かに納得している様子を見せる事から、おそらくは私とエヴァンジェリンさんの戦闘については知らないんだろう。この態度が嘘という可能性もあるが……どちらにしろ、私と彼女の関係を疑っているようだし、警戒はしておくべきだな。

「木乃香とも随分と一緒にいるようじゃな。お前さんはあまり、木乃香に近づかないようにしていると聞いていたが……どういふ心境の変化かのお？」

「……私が、木乃香お嬢様の友人であるのは、いけませんか？」

「そういう意味じゃないよ、刹那君」

学園長の言葉にムツとなつて聞くと、今まで黙っていた高畑先生が苦笑いを浮かべて言う。

「木乃香君には、魔法の存在を知られてはいけなйдらう？ 君もそれを警戒して離れているんだと思つていたから、どうして急に行動を変えたのかと思つてね」

「木乃香お嬢様の周りには、ここ最近になつて危険が多くなりましたので。離れて護衛するよりも、お傍にいた方が良いと判断したままです。それに、これ以上お嬢様に寂しい思いをさせるわけにもいきませんでしたから」

「しかし、危険とな……」

「身に覚えがあるのではありませんか？」

たとえば同室者の魔法先生とか、図書館島とか。

「はて、無いのお……じゃが、そういう事なら、こちらでも気をつけるようにしようかの」
「いえ、必要ありません」

「ふお？」

学園長の言葉を両断する。

ここで、お願いしますなんて言ったらどうなるか。おそらくは、魔法先生や魔法生徒に辺りをうろつかせるだろう……適任を考えればネギ先生か。

妙な情報を流して、ネギ先生にこのちゃんの周りをうろつかせる。そうしたらなし崩し的に魔法の存在を知られる可能性もあるし、他にもそうなるよう密かに手を打つてくることだって考えられた。

——そんなの、許してたまるものか。

意外とばかりに目を見開いた学園長に、私は言った。

「私がお嬢様と以前の関係に戻り、お傍にいるのは、様々な危険からお嬢様をお守りするためです。この件について、そちらは必要以上の干渉をしないでいただきたい」

「しかしのお、木乃香は儂の孫娘でもあるわけだし、可愛い孫娘の為にこれくらいは

……」

「学園長は、それと同時に関東魔法協会の会長でもあるのです。必要以上の手出しは、ご自分のお立場を悪くする恐れもあります。どうかおやめください」

「……仕方ないのお」

不承不承といった様子で頷いた学園長に、警戒は怠れないと心中で溜息。

もしも手出ししてきたなら、長への報告内容が増える事になるし、関係の悪化だつて免れないだろう。学園長は知らぬことであるが、西の長の娘であるこのちゃんへの対応などから、現時点で既に西の東に対する印象は悪くなっている。和平を望むなら、何もこれ以上悪くなるような事はしないでいいのに。

「して、図書館島での事はどういう事じゃ?」

「図書館島?」

「あの言葉の意味を知りたくてのお」

「……学園長」

「ふお?」

どうにも先ほどから気になっていた事があって、私はそれについて聞いてみる事にした。

「先ほどの茶々丸さんの一件から、お聞きしたいと思つていたのですが——ご自分の

学園の生徒の危機を、ただ見ていらしたのですか？」

「ふおふおっ!？」

「剎那君？」

思わぬ切り返しに驚いた様子の学園長と高畑先生をよそに、私は言葉を続ける。

「図書館島ではクラスの数名とネギ先生が石像に襲われ、茶々丸さんはネギ先生と神楽坂さん二人に襲われ命の危険に晒されています。図書館島も茶々丸さんの件も、私の行動は一個人のものとしてですので、報告の義務はありません。なのに、それらに私が関わっている事を知っていたということは、学園長はそれを見ていらしたんですよね？」

「そ、それは、そのお……」

報告の義務が無いから、学園長は私にそれらに関わっている事を本来なら知っているはずが無い。

一緒にいた人たちの中に、学園長にそれを報告するような人がいたとは思えないし……そうなると、やはり学園長自身がその様子を見ていたと考えるしかない。

「そちらがどういいうつもりで、不干渉に徹したかは知りませんが……友人の危機を捨て置けるほど、私は冷酷にもなれませんので。残念ながら、あの石像の正体や茶々丸さんがネギ先生たちに襲われていた理由などは、私の知るところではありませんのでお答えできませんが」

「そ、そうか……刹那君は、何も知らないんじゃないやな?」

「詳しいことは。ただ、学園長、一つお聞きしたいことが」

「なんじゃ?」

「先ほどの質問の、図書館島でのあの言葉の意味、というの……私には、石像に対して言った言葉くらいしか、思い当たるものが無いのですが」

「う、うむ……それがどうしたんじゃない?」

「あの場には私と石像しかいませんでしたし、私はそれほど大きな声で話したつもりはありません。なのになぜ、石像に対する言葉を学園長が知っているんですか?」

「ふおふおふおっ!?!」

あからさまにギクリとした学園長。この反応から察するに、やはり石像の正体は学園長で間違いなかったみたいだ。

そう思ったから、釘を刺す意味でもああして言ったんだが……少しでも動きを抑えられればと思ったが、どうやら私の意思は伝わらなかったらしい。いや、もしかすれば伝わっていないふりをしている可能性もあるが、まあどちらでもいい………よくないか。

「まさかとは思いますが、学園長自らが生徒を危険に晒したんですか? さすがにそれはお嬢様の護衛としての立場からしても、何かしら対処を取らせてもらわなければなら

ないのですが」

「対処、とな?」

「当然ながら、長へは報告させていただきます。東は西の長の娘に危害を加えようとしたと——」

「せ、刹那君!!」

「はい?」

強く呼ばれて言葉を止めると、学園長はひどく狼狽した様子で言った。

「儂は、あれかの? 何か質問をしたかの?」

「……………いいえ」

「どうやら、今の話は無かった事にされるようだ。変わり身の早さに少々驚いたが、まあ私としても釘を刺せたと考えれば十分か。」

「でも、あれだろうか。今の私の行動は、脅しになるんじゃないか……早まったかもしれない。い。」

「まあ、あちらから取り消してきたんだし、取り立てて問題にはならないようにで一安心。」

「お話は以上でしょうか?」

「い、いや。もう一つあるんじゃない?」

「なんででしょう?」

「今回の……ネギ君とエヴァンジェリンの一件には、関わらんでほしい」

「それは、先日の茶々丸さんのような事態を目撃しても、手を出してはならないということですか？」

「うむ」

「……分かりました。お話が以上なら、私はこれで失礼します」

了承して、学園長室を出た。

別に、好きで今回の事件に介入しようとは思っていない。昨日の事も、エヴァンジェリンさんから茶々丸さんを頼まれた結果の行動だし……そりゃ、助けられたのは良かったと思っっているが。

あくまでエヴァンジェリンさんとネギ先生の問題のようだし、私が間に入ってどうこうする問題では無い。ならば、大人しくこのちゃんちゃんが巻き込まれないように注意を払うのが、私の仕事だろう。

「(エヴァンジェリンさん、待つてるかな……)」

それとは別に、今日は彼女の家でお茶会に呼ばれていた。

廊下の時計を見上げれば、もうすぐお昼になる。あまり待たせても怒られてしまうし、急いで行かなければと思っ、足を速めた。

エヴァンジェリンさんの家へ向かう途中で、茶々丸さんを見つけた。

「こんにちは茶々丸さん。何をしてるんですか？」

「刹那さん」

道端でしゃがみ込んだ彼女の横には、ビニール袋が一つ置かれている。

よくよく考えると、ここは昨日彼女がネギ先生たちに襲われた場所だった。ここを通つてもエヴァンジェリンさんの家に行けるが、私が気になったのは彼女が一人でここにいる事だ。

「一人でいて、大丈夫なんですか？」

「マスターには、一時間ほどで帰る様にと言われていますので。それと、何かあればすぐに連絡するとも」

「はあ……それで、いったい何を？」

エヴァンジェリンさんの許可を取っているなら、まあ大丈夫なんだろう。

昨日の今日で、ネギ先生たちがまた襲つてくる可能性もあるが、昨日邪魔が入ったから様子を見る可能性もある。それは考えたところで分からない事だ。

茶々丸さんは、しゃがみ込んだ足元に目を向けた。私は後ろからそれを覗き込む。

「この猫たちに餌を、と思ひまして」

「ああ、昨日の……」

数匹の猫たちが、彼女の足に擦り寄って鳴いていた。どうやら昨日、私が聞いた鳴き声はこの子たちのものらしい。

ビニール袋の中にはふたの空いた猫缶があった。それは彼女がエヴァンジェリンさんの家で準備している物と同じだった。

「いつも、*ニャー*で餌を？」

「はい」

おそらくは毎日のように来ているんだろう、猫たちの懐きようも納得がいく。

餌を食べ終えて満足したらしい猫たちの一匹が、茶々丸さんの体によじ登ろうとしていた。それを抱き上げた彼女を、私は微笑ましく思って見つめる。

「……先にマスターの元へ向かってくださっても構いませんが」

「あ、お邪魔でしたか？ すみません、それなら」

「いえ、そういうわけではありませんが……一緒にいても、お暇なだけかと思ひまして」

「ああ、いえ。大丈夫です……だから、よかつたら一緒にいさせてもらつてもいいですか？」

「……それなら、どうぞ」

茶々丸さんの許可も貰つて、私はまた彼女と猫たちを眺めた。

猫たちは遊んでとばかりに彼女に擦り寄っていて、そんな猫たちを眺める彼女は優し

く笑っていた。

「茶々丸さん、楽しそうだなあ」

無表情なようでその実、彼女はよく笑う。といっても、頻繁でも無ければ微かにしか笑みを浮かべないのだけど。

だから、そんな彼女の笑みを見れたのはちよつと得した気分になる。

「どうかしましたか？ 刹那さん」

「え？」

「なにやら楽しそうでしたので」

「そうですか？」

そんなに顔に出てたかな、そう思って顔に手を当てた。もしかしたら、笑ってたのかも。

「……しかし、いいのですか？ 私と一緒にいても」

「いいって、えつと……何か不都合でもありましたか？」

「学園長に呼び出されたとお聞きしました」

やはり迷惑だったろうか、心配になった私に彼女はそう言った。

エヴァンジェリンさんに聞いたんだらう、少し遅くなることを伝える際に、学園長の所へ行くと言ったから。

茶々丸さんの腕の中で猫が鳴く。私は見上げてくる彼女を見つめ返した。

「推測ですが、昨日の件についてだったのではないですか？」

「それもありましたけど、他にも色々でしたよ。茶々丸さんが気にすることは無いですが、おそらくは今回の件に関わらないと言われたのでは無いですか？　ならば、マスターと私にもあまり近づかない方が良いかと思えます」

「……………」

茶々丸さんの言ってることは、正しい。正しすぎて言葉も無い。

学園長たちは当然ながら、私がエヴァンジェリンさんたちに近づくのを楽ししとしないだろう。まあ、それはこの件とは関係なくてもそうかもしれないが。

それになにより、私の立場から考えるに私が彼女たちと親しくするのはあまり良いとは言えない。それは前にも考えた事だ……考え過ぎて動けなくなるからと、考えるのをやめたが。

それでも私が彼女たちと共にいるのは、単に私の神経が凶太くなつたのか、事を正しく把握していないだけか、それとも他に理由があるのか。

「今更、ですよ」

ただ一つ言えるのは、私にとって彼女たちは友達だと言う事。

そもそも、関わるつもりが無かつたなら最初から、エヴァンジェリンさんからの呼び

出しがあったあの時から、関わらないでいるべきだった。あれを無視すればよかった話だ……無視したら、どうなっていたんだらう。

『最近、幸せそうじゃないか。え？ 刹那』

『選べ。剣か、幸福か』

『剣を捨て、人間として生きるのも悪くはないぞ』

……一つじゃない、か。

彼女は知らない、私は幸せなのだど気づかせてくれたことを。

剣と幸福、どちらも諦めないと選ばせてくれたことを。

私にまた、このちゃんを護る力を与えてくれたことを。

『仮初が崩れた時の絶望を味わうのは、お前にはまだ早い。だから、私が壊してやろう』
『お前の言う友達……ことやらが、どういふものか……まあ、付き合ってやらんことも無い』

それでも関わったのは、友達になりたいと言ったのは私だ。

彼女が優しいことを知っている。きっと私は、エヴァンジェリンさんが好きだった。

このちゃんも明日菜さんもネギ先生も真名も千雨さんも、私は好きだった。

だから、きっと本当は理由なんていらんだらう。

「エヴァンジェリンさんも茶々丸さんも、友達ですから……一緒にいちゃいけないなん

て、無いんです」

友達だから。それだけで済ませられないのが現実だけど、きつと大丈夫だ。

だから私は、明日もまたエヴァンジェリンさんたちと共にお茶を飲むだろう。このちゃんや千雨さんと街へ出かけるんだろう。

「(それで、良いんだよな……)」

大丈夫。言い聞かせて私は、笑みを浮かべた。

看病の日

いつもと変わらない月曜日朝。学校へ行く準備をしていた私の頭に、声が響いた。

『おい、刹那』

『……エヴァンジェリンさん？ どうしたんですか、こんな朝早く……』

私に念話を送ってくる相手は、ネットレスを渡した張本人である彼女しかない。

それでも突然の連絡に驚くと、どこか不機嫌そうな声が続いた。

『……今すぐ、うちに来い』

『何か用事でも？』

『茶々丸が煩いんだよ。私はいらんと言っているのに』

『……あの、意味がよく分からない』

『とにかく来い！ いいな!?!』

ぶつりと、一方的に念話が切られて、私は取り残された気分になりながら首を傾げた。机に置かれた鞆を持つ、準備はもう終えていた。

どうやらエヴァンジェリンさんでは無く茶々丸さんが私を呼んでいるみたいだが、いったい何の用だろう。考えてみても、特に思い当たる事は無かった。

「なんだ刹那、もう行くのかい？」

「あ、ああ」

「今日は、近衛たちとは一緒じゃないんだな」

「そういうわけじゃ無いんだが……ちよつとな。悪いんだが、このちゃんに会ったら、先に行つたことを伝えてくれるか？」

「それは構わないが……」

「頼んだ」

普段から、真名よりも私の方が出る時間は早い。今日は少し早すぎるが……たぶん、待ち合わせの時間になつても来なければ、このちゃんたちは部屋に呼びに来るだろう。

そうなれば真名とは会えるはずだし、先に行つたことも伝わる。問題は無い筈だ。

「さて、行くか」

何の用かは分からないが、行かないわけにもいかない。遅刻しないと良いけど。

エヴァンジェリンさんの家には、電車を使わず走つて向かう事にした。

今の時間ならまだ人は少ないから、人目にはつかずに移動できる。それならこちらの方が速かった。

春休み中もエヴァンジェリンさんに別荘で特訓の相手をしてもらったおかげで、大分

体と精神のバランスが取れていた。未だに忒の太刀を使うのは厳しいものの、前よりは技の精度が上がっている。

成長している、というよりこの場合は、取り戻していると言った方が良いのかもしれない。エヴァンジェリンさんも言っていたが、精神では一度経験している分、身につくまでが早いと思えた。

さほど時間もかけることなくエヴァンジェリンさんの家に到着し、扉を叩く。出迎えてくれたのは茶々丸さんで、どうぞと促されるままに中に入った。

「それで、用事というのは？」

「はい、実は——」

「いらんと言っているのに、茶々丸が聞かないんだよ」

上の方から声が聞こえて、見上げると二階への階段の手すりに腰かけたエヴァンジェリンさんが、未だ寝間着姿のままに笑っていた。

パツと見ても分かるくらいに顔が赤い。それに、いつも通りのつもりなんだろうがその声はどこか弱弱しく、明らかに具合が悪いのだと見て取れた。

「エヴァンジェリンさん、風邪をひいたんですか？」

顔を擧げて聞くと、彼女ははつと鼻で笑う。

「風邪？ 何を言っている。私は元気だぞ」

「いえ、マスターはご病氣です」

「おいこらっ、茶々丸！」

けれど彼女の主張に反して、茶々丸さんがキツパリと言い放った。

エヴァンジェリンさんは心外だとばかりに叫んでいるが、どちらを信じるかは火を見るよりも明らかだ。私は持って来た鞆を下して、茶々丸さんに聞いた。

「エヴァンジェリンさん、熱はどれくらいですか？ インフルエンザの可能性は？」

「十五分前に計った時は、三十九度でした。一般的な風邪と思われませんが、それと同時にマスターは花粉症も患っています」

「茶々丸、余計な事を言うな！」

「……茶々丸さんが私を呼んだのは、エヴァンジェリンさんの看病の為ですか？」

「はい。私はこれから、ツテのある大学でよく効く薬を貰ってこようと思います。その間、刹那さんにはマスターの看病をお願いしたいのです」

たしかに、この状態のエヴァンジェリンさんを一人にするのは不安だな。本人は平気だと言っているが、話を聞いても実際に様子を見ても、平気そうには見えない。

私は頷き、気になる事をいくつか尋ねた。

「エヴァンジェリンさん、朝食の方は？」

「食欲が無いと、食べようとしません」

「なら、私の方で何か作って食べさせます。冷蔵庫の物、使いますね」

「お願いします」

「それから、えっと、その薬は……食べさせてから飲ませて、大丈夫ですか？」

「はい。リンゴや桃といった果物は、下の方に入っています。使うなら使ってください」
「分かりました」

「つお前たち二人揃って、何を勝手に進めている！ 私は元気だと——」

階段を下りてきたエヴァンジェリンさんが、茶々丸さんに掴みかかろうと手を伸ばす。

けれど上げた腕はすぐにだらりと垂れて、足が纏れたのかぐらつとその体が傾ぎ倒れそうになったのを、慌てて手を伸ばして受け止める。

小さくて軽い体。私も小さい方だが、それよりももっと小さい。

「だいぶ具合が悪いみたいですね……」

「魔力の減少したマスターの体は、元の肉体である十歳の少女のものと変わりありませんので」

抱き上げた体の軽さに驚きながら、二階への階段を見上げる。

ベッドは二階だし、一度寝かせてから朝食の用意をした方が良さそうだ。

「後は私の方でやりますから、茶々丸さんは安心して薬を貰いに行ってください」

「分かりました。それでは、よろしくお願いします」

ペこりと頭を下げて、茶々丸さんが出て行くのを見送った。

私は急いで二階へと上がり、エヴァンジェリンさんをベッドに寝かせる。呼吸が荒い。

「水を飲ませた方が良さそうだな」

水分補給は大切だ。急ぎ足で階段を下りて、キッチンで水を調達する。

残念ながらスपोर्टドリンクは無かったので仕方ない。水を注いだグラスと、それから桶に水と氷を入れてタオルも一緒に持った。

「エヴァンジェリンさん、起きれますか？」

「ああ」

掠れた声で頷いた彼女の体を起こさせて、水を飲ませる。またすぐに寝かせて、濡らしたタオルを額に乗せた。

「朝食の準備をします。水はここに置いておきますから、喉が乾いたら飲んでください。あと、勝手に起きないで寝てくださいね」

「……………」

今度は返事が無かった。目を閉じた彼女に、このまま大人しく寝ていてくれればと思う。

やっぱり病人には定番のお粥が良いかなと、考えながら一階に下りてキッチンに立った。作り始めて暫く、もうそろそろ出来上がる頃に、からんころんと呼び鈴が鳴った。

「茶々丸さん……?」

もう帰つて来たのだろうか、首を傾げたら思いもしない声が扉越しに聞こえた。

「あの、こんにちはー。担任のネギですけど、家庭訪問に来ましたー」

「……………え?」

ネギ先生?

ポカンと間抜けにも口を開けて、時計を見上げる。八時を過ぎているが、まだ朝だ。こんな時間に家庭訪問というのはどうなんだろう。

「(このちゃん、もう学校に着いたかな……)」

出来れば早めに済ませて学校に行きたかったけど、事が事だけにそうもいかなかったししょうがないと諦めよう。

真名に伝言を頼んだし、余計な心配はしていないと思うけど……。

「すみませ〜ん」

「あつ、はい!」

再度呼び鈴が鳴つて、慌てて扉に駆け寄る。扉を開けて顔を覗かせると、ネギ先生が驚いたように目を見開いた。

「せ、刹那さん!？」

「おはようございます、ネギ先生。あの、エヴァンジェリンさんに何かご用ですか？」
さすがに人様の家に招き入れる事も出来ないのです、その場で対応する。

問いかけると、ネギ先生はハツと我に返った顔をして、あのと聞いてきた。

「エヴァンジェリンさんは、いないんですか？ あと、どうして刹那さんがここに……」
「その、エヴァンジェリンさんは風邪をひきまして……私は、看病するために邪魔して
るんです。それで、今日は——」

「そ、そんなまさか。彼女が風邪だなんて……」

「いえ、本当にひいてるんですよ。だから今日はお休み——」

「いらん、刹那」

「……エヴァンジェリンさん、どうして起きてるんですか？ 寝ていてくださいと——
」

「エ、エヴァンジェリンさん!!」

……どうしてだろう、最後まで話させてもらえない。

振り向くと、エヴァンジェリンさんは私が来た時と同じように、階段の手すりに腰かけてこちらを見下ろしていた。寝ていてくださいと言ったのに……。

思わず溜息を吐いた私を押しつけて、ネギ先生が家の中に侵入してきた。エヴァン

ジエリンさんに向けて何かを突き出す。

「……なんだそれは」

「は、果たし状ですつ。僕と、もう一度勝負してください！——あ、それにちゃんと学校にサボらず来てください！ 卒業できなくてもいいんですか？」

「だから、呪いのせいで出席しても卒業できないんだよ」

「あの、エヴァンジエリンさん……」

無駄話がいいから、早く寝てほしい。寝なければ治るものも治らないのに。

「——まあいい。じゃあ、ここで決着をつけるか？ 私は一向に構わないが」

構いますから、魔力を高めないでください。フラスコを持たないでください。興奮して、よけいに熱が上がります。

やる気満々の彼女に、とりあえず開けっ放しの扉を閉めて二階への階段に足に向けた。

「……いいですよ。そのかわり、僕が勝ったらちゃんと授業に出てくださいね!!」

よくありません、ネギ先生。あと、私の存在を忘れてますか？ 杖を構えないでください……やっぱり、警戒を強化した方が良さそうだ。何だか私まで頭が痛い。

無言で階段を上り、エヴァンジエリンさんの背後に立つ。手を伸ばせば届く距離だ。

そこまで来たところで、彼女がニヤツと笑った。そしてその直後、ぐらりと傾いた体

が階下へと倒れた。手からプラスチックが落ちて行く。

「わ~~~~~っ!?!」

「つと」

床へと倒れて行った体を引き寄せ抱き留める。ふらふらしていたから危ないとは思ったけど、やっぱりまた倒れた。床に落ちて割れたプラスチックは、後で掃除しないといけないだろう。

「見ての通り、倒れるくらいには重症です。風邪だけでは無く、花粉症も患っているようなので」

「そ、その人本当に——ッ!!」

大慌てでパニックに陥っているネギ先生に言えば、何か言いたげに口をパクパクとさせて言葉にならない声で叫ばれた。

たぶん、本当に吸血鬼なのかと聞きたいんだろう。それは私もあることに思う。

一先ずもう一度ベッドに寝かせようと、二階に上がった。抱いた体は、最初に抱いた時よりも熱い……まさか、熱が上がってる? 最後に計つたのは一時間くらい前になるし、もう一度計つたほうがいいかもしれない。

エヴァンジェリンさんをベッドに寝かせて、布団をかける。汗のせいか肌がじつとりと湿っていた。

「お粥は殆ど出来てるから、それを食べさせて薬を飲ませて、汗もかいてるから服を着替えさせないと。それから……」

枕元に落ちていたタオルを濡らして絞って、エヴァンジェリンさんの額に乗せた。

やることを確認しながら立ち上がり、振り向いたらネギ先生がいて、思わず首を傾げる。

「ネギ先生、まだ何か用事が？」

「え？」

「エヴァンジェリンさんは見ての通りですので、今日はお休みさせていただきます。あと、私も彼女をこのまま一人には出来ませんので、すみませんが一緒にお休みします。先ほどの話についてはよく分かりませんが、家庭訪問は日を改めた方が良いかと……」

「あ、は、はい！ そうですね……」

頷きながら、チラチラとエヴァンジェリンさんに視線を向けるネギ先生を追いやって、一階へ下りる。

時計を見上げると、九時を少し過ぎたところだった。茶々丸さん、そろそろ帰って来るだろうか。

お粥と薬を持って階段を上り始めたら、何やら二階が騒がしい事に気づいた。

「ネギ先生？」

「せ、刹那さん!」

部屋に入ると、杖を振り上げた……掲げたネギ先生がいた。まさかとは思うが、寝ているエヴァンジェリンさん相手に暴行を? そんな筈は無い、彼はそんなひどい事をする少年では無い……筈だ。

「どうしよう、不安になってきた……」

思わず呟いたのは、きつと改めて見るネギ先生の迂闊さとか不甲斐なさに自分でも思ったより戸惑っているせいだろう。

手に持った杖を背中にやっつて隠そうとする辺りを見ると、一応は秘匿の意思がある……のだろうが、何度見ても穴だらけな対応に呆れを隠して溜息を飲み込んだ。

「あ、あの、これは!」

「ネギ先生、すみませんがもう少し静かにお願いします。エヴァンジェリンさんは病人ですから」

「あ、あう……」

押し黙ったネギ先生を追い越して、ベッドの傍らに膝をつく。

ベッド横に置かれた小さなテーブルにお粥の乗ったお盆を置いて、エヴァンジェリンさんの様子を伺った。

「サ、サウザンドマスター……やめ、ろ……」

「……………」

どうやら、ネギ先生の父親の夢を見ているらしかった。ということとは、先ほどのネギ先生の行動は、エヴァンジェリンさんの夢を覗くための魔法を使おうとしていたのかも
しれない。

「……………エヴァンジェリンさん、起きてください」

「あ……………」

軽く体を揺すって、エヴァンジェリンさんを起こしにかかる。後ろで、ネギ先生が声をあげたけどそれには気づかないふりをした。

ネギ先生には悪いが、今はエヴァンジェリンさんに朝食を食べさせて薬を飲ませるのが優先だ。本当に父親の情報をネギ先生が求めているなら、彼女に直接聞けば良い話だし……………素直に教えてくれるかは、別として。

「……………」

「エヴァンジェリンさん」

「……………刹那か……………なぜ、お前が……………」

「茶々丸さんに頼まれて、貴女の看病をしていたんですよ。ほら、起きてご飯を食べてください」

「む、う……………」

熱があるせいかぼんやりした様子のエヴァンジェリンさんの背中を支えて、体を起こさせる。

土鍋ごと持って来たお粥を取り皿に移して、彼女と見比べた。ふらふらとまともに体も起こしてられない彼女が、自力で食べられるとは思えなかった。

「エヴァンジェリンさん、口を開けてください」

「……あ？」

「あーんですよ。あーん」

「……あー、ん……」

開けられた口に、レンゲをそつと差し込む。お粥は一応冷ましたから、熱くないと思うけど。

「ん、ぐ……」

「ゆっくり飲み込んでください。無理しないでいいですから」

「……んく」

「それじゃ、もう一度口を開けてください。あーん」

「あー……ん」

喉も少し腫れているのか、エヴァンジェリンさんは時間をかけて少しずつお粥を飲み込んだ。

何度か同じ動作を繰り返し、取り皿が空になったところで首を振られた。茶々丸さんの話だと食欲は無かったみたいだし、これだけ食べてくれたんだから十分か。

「寝る前に薬を飲んでください。はい」

「……いやだ」

「エヴァンジェリンさん……」

「ふんっ……」

薬と水を差しだすと、エヴァンジェリンさんは嫌だと首を振った。困ったように名前を呼ぶと、顔を背けられた。

そのしぐさがあまりにも子ども染みていて、熱は精神の退行を促すんだっだろうかとか考えた。

でも、どうしよう。薬を飲まないのも困るし、だからといって強引に飲ませようとして飲んでくれるだろうか。

『んとなー、せつちゃんが口移ししてくれたら、飲んでもええよ』

不意に蘇った声に、手の中の錠剤を見て知らず目を細めた。

散々私を困らせて、中々飲んでくれなくて……最終的には私が折れてしまったわけだが。翌日には治ってくれたから良かったもの、あれは本当に困った。

全く、悪ふざけの度を越している。それに最後には応じてしまう私も私だったけど。

「飲んでください、エヴァンジェリンさん」

「嫌だ」

「……素直に飲むのと、口移しと、どちらが良いですか？」

「はあっ!？」

驚いた彼女に、私は努めて静かに言った。

「あまり我儘が過ぎると、本気でやりますよ」

「……………チツ」

エヴァンジェリンさんは舌打ちの後に、私が差し出した菓を奪うように手に取って口に放り込み、水で一氣に飲み干した。

私はそれに満足して笑みを浮かべる。

「茶々丸さんが、大学に菓を貰いに行ってくれています。そちらも素直に飲んでくださいね」

「……分かったよ。つたく、貴様、本気でやるきだっただろ」

「手っ取り早いですから」

それから私は部屋を見回して、けれど目的の物が見つけれず首を傾げた。

「エヴァンジェリンさん、着替えはどこですか？」

「そのタンスの下から二段目だ」

「二段目ですね」

タンスから新しい寝巻を取り出して、エヴァンジェリンさんに差し出した。

「自分で着替えられますか？」

「それくらい出来る」

「なら、私は薬とか片付けてきますから。その間に着替えてしまってください」

「ああ」

「あと、着替え終わったら大人しく寝てくださいね。動き回って悪化しても大変ですから」

「わかっている」

最後はもうしつこいぞと呆れたように言われて、私は苦笑いして立ち上がった。

お盆を持って、部屋を出ようとしたところで、呆然と立ち竦んでいたネギ先生に言う。

「ネギ先生、エヴァンジェリンさんこれから着替えますから……」

「えっ、あ、はあ……」

心ここに非ず、といった様子で返事をするネギ先生に、再度促した。

「ネギ先生、覗きはよくないですよ」

「……うわわわっ！ すみません!!」

慌てて部屋を飛び出していくネギ先生を追うように、私も一階へと下りて行った。

「ん？」

階段を下りたところで、ヴーンと唸るような音が聞こえた。

何の音だろう。考えて、お盆をテーブルに置いたところでその音が、私の携帯の音だと気づいた。

学校に行くときはマナーモードにしていたから気づかなかった。というより、普段からあまり頻繁に使わないから、それ自体を忘れていた。

「（このちゃんに連絡、すればよかったな）」

そうすれば、わざわざ真名に伝言を頼む必要は無かったのに。

鞆に入れたままの携帯を取り出す。履歴を見ると、着信が二十件を超えていて驚いた。着信はこのちゃん、千雨さん、真名。最も多いのがこのちゃん、半分くらいがそうだ。

「えつと……」

とにかく連絡しようとボタンを押そうとしたら、また携帯が振動した。千雨さんだ。

「はい」

『あ、お利那か？ お前、今どこにいるんだよ』

「エヴァンジェリンさんの家です。エヴァンジェリンさんが、風邪をひいたのでその看

病に」

『そうなのか？ こっちはスゲー騒ぎになってんだけど。あの子ども先生は来ないし、龍宮より先に出た筈のお前がいつまでたっても来ないから、クラスの連中は何か事件に巻き込まれたんじゃないかってふざけた事言い出すし、それ聞いた木乃香が泣き出して、もう収拾つかねえよ』

「……すみません、このちゃんに代わってもらえますか？」

『ああ。おーい、木乃香』

電話越しの喧騒の中、千雨さんがこのちゃんを呼ぶ。

まさか、そんな騒ぎになるとは……直接、このちゃんに連絡しなかった自分の失態が悔やまれる。泣いていると聞いてから、心臓がいやに早鐘を打っていた。

『せつちゃん！ 今どこにおるん!?!』

「エヴァンジェリンさんの家だよ、このちゃん。風邪をひいたって聞いて、看病に来てただけど……ごめんね」

『……つつつく、よかった、せつちゃん……』

「このちゃん？」

『学校、来てもせつちゃんおらんしつ、連絡も、つかへんから……ひつ、またせつちゃ、危ないことしてるんや、ないかって……ふええええん』

「……ごめんね。このちゃんが心配するような事、何も無いから……大丈夫だから」
『つうん、う、ん……』

電話越しにも関わらず、このちゃんの泣き声は鮮明に私の耳に届く。心臓が痛いくらいに締め付けられた感覚。

無意識に強くスカートの裾を握りしめながら、どうにかこのちゃんを宥めて千雨さんに代わってもらった。

『で、どうすんだよ？ 木乃香は少し落ち着いたみたいだけど、クラスの連中はまだ騒ぎっぱなしだぜ？』

「ネギ先生に急いで行ってもらいます。エヴァンジェリンさんの様子を見に、こちらへ来てたんです」

『はあ？ もう十時過ぎてるぜ？ 何やってんだよ……』

千雨さんが頭を抱えたような気がした。

「えつと、とりあえず委員長に伝えてもらえますか？ ネギ先生がもうすぐ行くつて……たぶん、それで少しは治まるんじゃないかと」

『ああ、りよーかい。お前はどうすんの？』

「茶々丸さんがそろそろ帰って来ると思えますから、そうしたら私も行きます」

『分かった。はあ、やれやれだつての……』

「すみません……」

『謝るんなら、次はちゃんと連絡しろよ？ 木乃香があんな大泣きするなんて、よつぽどだろ』

「そうですね……それじゃ、お願いします」

『おう』

電話を切つて、何か考えるよりも早く私は、ネギ先生を振り返った。

「ネギ先生」

「はい？ なんですか？」

「クラスの方たちが、ネギ先生が来ないと騒ぎになっているようです。早く行ってあげた方がいいかと」

「ええっ！ わ、もうこんな時間!?!」

時計を見上げたネギ先生は、十時を過ぎた時計にあわあわと慌て始めた。

「う、うわわわっ！ どうしよう!?!」

「落ち着いてください。今は急いで学校に……あ、エヴァンジェリンさんと茶々丸さんは欠席だと思います。私は……茶々丸さんが戻り次第、行けそうならば学校に行くつもりです」

「えっと、あう、はい。分かりました……ええっと、それじゃー!」

ネギ先生を玄関へと促しながら、伝える事を伝えて見送る。途中、走つていくネギ先生が何度かこちらを振り向いたが、戻ってくる様子が無いので扉を閉めた。

一気に静かになった部屋で、ズルズルと閉めた扉に背を預けて座り込む。

「……………はああああ……………」

深く深く嘆息。このちゃんを泣かせたし、千雨さんには迷惑をかけたし、真名にも心配をかけたようだし。

自分の不甲斐なさとか、犯した失敗に、膝を抱えて自己嫌悪に陥る。

「間違えたのかな……………」

泣いていたこのちゃん、余計な心配をかけてしまった。このちゃんが心配する必要は無いのに。

本当なら、今日このちゃんが泣くことは無かった筈だ。だって過去の私は、今日ここに来ることは無かったから。だから、私がないからと心配してこのちゃんが泣く事は無かった。

……………今日だけじゃない。図書館島だってそうだ。

本当なら私はあの場にいなかった。だから、私があそこで飛び出すことも無く、このちゃんが泣くことも無かった。思えば、どちらもこのちゃんを泣かせたのは私か。

未来を変えようと動いた結果、私は過去にいなかった場所にいる。結局、このちゃん

を泣かせてしまっている。

もしかしたら私は、まだ手を出さずにいるべきだったのかもしれない。昔の私と同じように、今はまだ離れて見守っていた方が良かったのかもしれない。

……分からない。そもそも、私が今していることで、本当に未来が変わるのか？

仮契約をさせず、このちゃんが望む世界で生きられるように長に話して、それで何かが変わるのだろうか。

このちゃんを泣かせて、悲しませて……本当にこのちゃんは、幸せになれるのだろうか。

「——何を悩む、刹那」

「ツエヴァンジェリンさん……」

階段の途中で、エヴァンジェリンさんが私を見下ろしていた。

僅かに顔をあげた私は、ゆっくりとした足取りで下りてくる彼女を視線だけで追いかけて、駄目ですよと声をかけた。

「まだ寝てないと……」

「平気だ。それよりも、そんな所でいったい何を悩んでいる？」

「……悩んでないませんよ。私の事より、早くベッドに戻ってください」

「ふんっ、お前の事だ。近衛木乃香を泣かせてしまったとでも、思っていたんだろう」

「ツ……」

ピタリと言い当てられて、私は言葉を喉に詰まらせた。

そんな私の前に立って、エヴァンジェリンさんは腕を組んで馬鹿にするように笑った。

「近衛木乃香は、随分と泣いていたようだな」

「どうして……」

「あれだけ騒いでいれば、電話越しだろうと聞こえてくる。ましてや泣き声などすぐに分かる」

聞こえていたんだ。抱え込んだ膝に、額を押し付けた。

「……私は本当に、これで良かったんでしょか」

目を閉じる。暗闇は私に心地よさも何も与えてくれなくて、ただ私の中ではぐちやぐちやと消化しきれない感情が入り混じり続ける。

「このちゃんともとの関係に戻ってから、私は二回もこのちゃんを、私のせいで泣かせてしまつて……このちゃんがあんな風に泣くこと、滅多に無いのに」

散々、心配をかけて、泣かせて。このちゃんは、強い人だったから……心がとても強くて、ちよつとやそつとじゃ折れたりしないのに。あんなにも、泣かせてしまった。

それも、私が関わったせい。関わらなかつた筈のところ、私が関わったから。

「本当なら、まだ私は関わらない筈だった。影から見守ってるだけで良かった。それなのに、私は——」

このちゃんを見た瞬間に、手を取ってしまった。

生きていた事が嬉しかった、掴んだ手が温かくて、一度失った手を自分から離すことが、出来なかった。

だから、それならこのちゃんの隣に立って、このちゃんを護ろうと。今度こそ、このちゃんが死なない未来に進もうと、このちゃんが幸せになれる未来を得ようと、そう思ったのに。

その結果が、これだ。私の中で入り混じった感情が爆発する。

「私がいなければ、このちゃんは泣かずにすんだ！ 図書館島で飛び出した私に泣き叫ぶことも、今日、私を心配して泣くことも無かった!!」

全部全部全部、私がいなければ良かったことなのに。昔のように、あまり深く関わらずにいればよかったことだった。

たったそれだけなのに、どうして私はそれが出来なかった。

「っ泣かせたくなんて、なかった……このちゃんに、笑っていてほしかっただけに！ このちゃんに——このちゃんに幸せになつてほしくて、私は違う未来を目指すと決めたの!! どうして、どうしてこのちゃんをこんなにも泣かせてしまった!!」

私はまた、間違えてしまったのかもしれない。

「刹那」

静かに、何も言わずただ私の言葉を聞いていたエヴァンジェリンさんが、私を呼んだ。目を開けて暗闇から戻り、ゆっくりと顔をあげる。私の前に膝をついた彼女と目が合い、瞬間、パシンツツと音が響き渡った。

「エヴァン、ジェリンさん……」

左頬が熱い。ヒリヒリとした痛みに、衝撃で右にずれた視界を前に戻せば、無表情のようでその瞳に怒りを湛えたエヴァンジェリンさんが、変わらずそこにいた。

「お前は、馬鹿だ」

「え……？」

「馬鹿だと言ったんだ、お前は」

叩かれた頬が、手を伸ばされゆっくりと、優しく撫でられる。

怒っているように見えるのに、その手は慈愛に満ちていて、その言葉も何も分からなくて、私はただその瞳を見つめるしかない。

「刹那。全く同じ人生なんて、絶対に無い」

「なに、を……」

「過去のお前の行動を、お前が真似したとして。たしかにそれは、同じ人生を辿ってるよ

うに見えるかもしれん。だがな、そう見えるだけで、違うんだよ」

「ちがう、って」

「お前だよ、刹那」

エヴァンジェリンさんの言葉に、首を傾げる。私が、違う？

「近衛木乃香を見守るお前が、どう思うのか。たとえ行動は真似できても、思うことまでは真似できない。中身が違うんだからな。過去のお前と、今ここにいるお前。思うことは違うだろう。現にお前は、近衛木乃香を見て我慢できなかった。見守り続けるという選択を、選べなかっただろう？」

「で、も……それが、まちがって……」

「お前は、間違わずに生きていけると、本当に思っているのか？」

「そう、じゃなくて……私は、間違えたらいけない、です」

たった一つの間違いが、このちゃんを死へと導いた。

だからもう二度と、同じ間違いは許されない。間違うことは、許されない。

「このちゃんが、死なない未来を……私は、このちゃんを今度こそ護ると、誓ったんです」

「ああ、そう誓うのは悪い事じゃ無い。ならなおの事だ、刹那——間違いを、恐れるな」
静かに、けれど強く言われた言葉に、私は無言で聞き入る。

「人は間違える事で何かを学び、成長する。お前が近衛木乃香を、誰かを護りたいというのなら、間違いを恐れるな。進み続けろ。そうして間違えたなら、その時はその間違えを飲み込んで、踏み潰して、また進め。今のお前は、犯した間違いを恐れて、間違えを犯すことに怯えて立ち止まった、ただの愚か者だ」

恐れた—— たった一つの間違いがこのちゃんを死なせた。

怯えた—— 私のせいでまたこのちゃんを泣かせてしまうのではと。

だからここで膝を抱えて、私は動くことが出来ずにいる。また間違えてしまったのではと、また間違うのではと。

ああ、本当にエヴァンジェリンさんの言うとおりだ。私は、間違いを恐れて、怯えている。震えて、動けなくなってしまった。

一度、辿り着いてしまったこのちゃんの死という未来に、また辿り着いてしまうのではないかと思つて、私は全てに怯えている。

「いいか、刹那。間違わない人生なんて無いし、全く同じ人生なんて無い。そして、全く同じ未来も無い。お前が過去に戻ってきた、それだけでもう未来は、お前の知るものは別の方向に向かつてるんだよ」

「…… たった、それだけでですか？」

「十分だろう。お前はお前が生きた分だけ、間違いを犯して成長してきた。その結果、お

前は近衛木乃香と仲直りをしているし、長谷川千雨を捨て置けず相手をしている。私や茶々丸と共に学校へ行っている……これは、過去のお前と同じことか？」

「……いいえ」

全然、違った。

「このちゃんとは、まともに話しをしていませんでした。千雨さんも、話したことが無くて。エヴァンジェリンさんや、茶々丸さんが、このちゃんを傷つけるんじゃないかって、警戒してて……友達になるだなんて、想像もしてなかった」

「当たり前だ。私がお前に興味を持って呼び出したのは、まあ言ってしまうえば、お前が過去に戻ってきたからだ。そうでなければ、私は今の時点ではお前にそれほどの興味を持つていないかもしれん」

「そうかも、しれませんね……」

くつりと喉を鳴らして笑った彼女に、思わず苦笑いを浮かべた。

昔の彼女は私に、どれほどの興味を抱いていたんだろう。昔の私は、私がいまこうして彼女と共にいる事を、想像できただろうか。

「お前は、少しだけ変わった知識を持った奴だ。ただ、それだけだ。神でも何でも無い、知らない事もあつて当然だ。だから、知らない事を、間違える事を恐れるな。立ち止まらずに進み続ける限り、私の目の前にいる桜咲刹那の未来は、変わり続ける」

「……はい」

ゆっくりと彼女の手が離れて行くのを追った先で、その瞳と合った。

「過去のお前じゃない。今のお前を生きろ、刹那」

それは、まるで母親のような。そんな瞳だった。

「——ありがとうございます、エヴァンジェリンさん」

未来がもう、変わり始めているというなら、私は立ち止まらずに進み続けよう。
犯した間違いを忘れずそれを踏み越えて、大切な人を護る為に——。

約束をした日

時計が十二時を過ぎて、その時間になつて私はようやく学校の玄関をくぐる事が出来た。

茶々丸さんの向かった大学が随分と忙しかったようで、彼女が薬を貰つて帰つて来たのはネギ先生がエヴァンジェリンさんの家を出てから、更に一時間以上が経つてからだった。

それでもまだお昼。このちゃんが泣いていたこともあり、私は後を茶々丸さんに任せて学校へ来た。

「……………」

目の前の教室の扉を見て、違和感に首を傾げた。

今はお昼休み。既に廊下を歩いている人もいる中、いつもなら騒がしさが教室の外まで溢れている筈の三年A組は、奇妙なまでに静かだった。

なんとなく感じる嫌な予感。少しの緊張感を抱きながら、私は扉に手をかけた。

「（これは…………）」

開けた先、教室に広がる光景に言葉を無くす。死屍累々とはまさにこのことか。

一様にぐったりと机に倒れ伏したクラスの方たちを前に、これ以上教室に入ること躊躇したが、中に入り扉を閉める。

音に気付いた一人がむくりと顔を起こして、こちらを見た。

「あ、桜咲さん」

「せつちゃん!?!」

まるで弾かれるようにして勢いよく飛んできたのは、言うまでも無くこのちゃんだつた。

その勢いに受け止めた時は踏鞴を踏んだが、全身で飛び込んできた姿にとりあえず笑った。

「おはよう、このちゃん」

「おはよ、せつちゃん! ……ううう、本物のせつちゃんやあ……」

「私は一人しかいないよ」

涙ぐむこのちゃんに胸が締め付けられた。

「ごめんね、このちゃん。心配させて」

「ええよ、もう……でも、また同じことしたら、許さんからね?」

「うん。もうしないよ」

このちゃんに心配をかけて、泣かせるような事はもうしたくない。

そう思つて言つと、約束やとこのちゃんは笑つた……許してくれたみたいだ。相変わらず、このちゃんは優しい。

「にしても、やけに静かだけどいつたいたいどうしたの？」

「あ、それはな……」

「騒ぎ過ぎて、新田先生にぶち切れたんだよ」

声と同時に、バシツと頭に衝撃。ちよつと痛い。

「あんま心配させんな、馬鹿」

見上げると、呆れ顔の千雨さんがいた。彼女にも随分と迷惑と心配をかけた。

「すみませんでした、千雨さん」

「悪いと思うなら、今度付き合えよな。この前は見れなかつた服屋行くから」

「あ、えつと………はい」

「あー、ずるい！ うちも行く！」

「へいへい」

また着せ替え人形にされるのか。このちゃんと千雨さんの組み合わせは、中々に大変なんだよなあ……振り回されるから。

「刹那さん、あの……」

近々来るであろう日に苦笑いを浮かべた私に、これまたぐつたりと教壇に突つ伏して

いたネギ先生が近寄ってきた。

彼も怒られたんだろうか……新田先生は良い先生なんだが、怒ると怖い。凄く恐いの
で、なるべく怒らせたくない相手だ。

「エヴァンジェリンさんの具合は……」

「薬を飲んだら、だいぶ落ち着いた様子でした。今は茶々丸さんが看病してくれてます
が……二、三日もすれば、よくなると思います」

「そうですか、良かったです……」

ほっと安心したような表情を見せたネギ先生は、またふらふらと教壇へ戻っていく。

依然として私たち以外は殆ど屍状態だけど……これ、明日には治ってるかな？

「あ、このちゃん。お昼は？」

「まだ〜」

「私もまだだから、一緒に食べよう？」

「うん」

「私も一緒にいいか？ ……つつか、食べるなら他行こうぜ」

「ですね……」

さすがにこの環境で楽しくお昼、というのは無理そうだ。

お昼休みの間、私たちが教室に戻ることは無かった。

穏やかな風に、流れる雲。空は青空、日差しは暖かい。

「いい天気やねえ」

「そうだね」

隣を歩いていたこのちゃんが呟いて、私も頷き返した。

エヴァンジェリオンさんの看病をした翌日の朝、私はいつもより早めに家を出た。いつもより三十分は早いだろう時間にこのちゃんと共に寮を出て、二人だけでゆつくりと学校に向かっていく。

散歩に行きたい、昨日の放課後このちゃんがそう誘って来たからだ。エヴァンジェリオンさんと学校に来た時、散歩をしていてと誤魔化したのだが、その時にこのちゃんと同じように散歩に行く約束していた。

だから、誘われたこと自体に驚いたりはしなかった。ただ気になったのは、誘われたのが昨日だったことと、その時のこのちゃんが何だか苦しそうに笑っていたことだった。

「そういえば、ネギ先生のペットは元気？」

「ああ、カモ君のことやね？ んとなー、最近は明日菜に懐いてるみたいや。よく一緒にいるえー」

「このちゃんには？」

「うちはあんまりやなあ。ちよつと寂しいんよ」

「そっか」

明日菜さんに、というのが少し気にかかるけど……このちゃんの方は、まだあまり関わってないみたいだ。気は抜けないが、少し安心した。

「今日は停電の日やし、カモ君が恐がらんとええけどな」

「大丈夫だよ、たぶん」

「んー、せやな！」

……停電、か。たしか昔は、どういうわけか学園結界が切れて、侵入してきた妖怪たちの一掃に駆り出されたんだっけ。

結局、その原因については教えてもらえなかったが……寮には結界を張って、安全を確保しておいた方が良くもしいれない。

それから、無言で歩く時間が続いた。このちゃんは私の一步先を進んでいる……何を話せばいいだろう、考えている間に、このちゃんが口を開いた。

「なあ、せつちゃん」

「ん……なに？」

「聞いても、ええんかな」

私よりも先を歩くこのちゃんの顔は見えなくて、ただ静かに問われた言葉だけが私に与えられた。

なにを？ 聞き返して首を傾げた私と、聞いたこのちゃんの足は止まらない。

「せつちゃんは、うちのボディガードなんやる？」

「うん」

「なら、教えてほしい。せつちゃんは、何からうちを守ってくれてるんや？」

「……このちゃん、それは……」

「言えへんこと？」

「……ごめんね」

何から、このちゃんを護るのか……このちゃんを襲う危険から。このちゃんを殺す、魔法から。

本当は……言いたい。それを知るだけで、このちゃんはその危険を回避する術を得る。知るだけで、あの時犯した大きな間違いを、犯さずに済む。

それはもしかすれば私の希望とか願望なのかもしれないけど、でも実際にそうなのだ。知っているのと知らないのでは、その間に大きく高い壁がある。

「ごめんね、このちゃん」

なのに言えないのは、一つは長の命令だから。今はまだこのちゃんに教えてはならぬ

と、言われているから。だけど私は、その命令に実は安心したんだ。

まだ言わなくてもいいと。まだ、このちゃんは何も知らずに生きていられると。危険の満ちるこちらの世界に、身を置かなくていいんだと。思ってしまったのは、私が迷っているせいなんだろう。

……無知は罪だ。だから知らなくてはいけない。だけど、全てを知れば戻れない。

戻れぬ世界にこのちゃんを引き込むのは、本当に正しいのか。このちゃんの立場からすれば、何も知らずにいる事の方が無茶だと分かっているけど。長の願うように、何も知らずに生きる事は叶わないと分かっているけど。

このちゃんは、言うなればこちらの世界に関わったから殺された。関わり方を間違えたんだ、だからこのちゃんは彼女の護りたかった人たちに敵とされてしまった。

だから今度は、間違えてはならない。そう思うのに。

「このまま、関わらずにいたら」

このちゃんは何も出来ずに死ぬだろうか。それとも死なずに生きるだろうか。

もしかしたら、こちらに関わるよりも生きる可能性が高いかもしれない。低いかもしれない。死ぬかもしれない。死なないかもしれない。殺されるかもしれない。殺されないかもしれない。

——幸せかもしれない

全ては推測で、希望で、願望だったから、私には分からない。

ただ、その可能性を前にして、私は迷っているんだろう。また間違える事に、怯えているんだろう。

間違いを飲み込んで、踏み潰して、進み続ければいいだけなのに。たくさんの可能性の中に、辿り着いたこのちゃんの死という未来の可能性を見て、私は何も言えずに口を閉ざすんだ。

「……昨日な、凄く恐かったんや」

「……」

「せつちゃん、いつまで経つても来なくて、電話しても出てくれなくて。ネギ君も、うちがちゃんと見送ったのに、学校に来てへんし」

「……………」

「二人ともいなくて、それで……なんか、大変な事に巻き込まれたんやないかって思ったんや。ネギ君もせつちゃんも、無茶するから。危ないこと、しようとするから」

ピタリと足を止めたこのちゃんが振り向いた。つられて私の足も止まり、見つめてくる視線を静かに受け止めた。

「なあ、せつちゃん。これだけ教えて」

「このちゃんはどこか苦しげだった。」

「あの時、図書館島で飛び出したのは——うちの、護衛やったから？」
「……………どうして、そんなこと聞くの？」

「嫌なんや。うちのせいで、うちを護る為にせつちゃんが危ないことするの」
「そう」

ネギ先生があそこで飛び出したのは、彼の性格というのもあっただろうが、彼が子どもながらも教師であつたからだろう。生徒を守るのは先生、それはよくある話だ。

なら私も、このちゃんの護衛だつたから飛び出したのか。たしかにそれもあつた、護衛が護るべき者を護るのは当たり前すぎて言う必要も無い。

でも、それだけが理由だつたのかと聞かれたなら。

「違うよ、このちゃん」

私は首を振る。否定する。それが答えだ。

「このちゃんの護衛だから、このちゃんを護ろうと行動するのは当たり前だけど。でも、私にとってはそれが全てじゃない。このちゃんの為だけに、飛び出したわけじゃ無い」
「なら、何の為？」

「自分の為」

私の答えに、否を唱える人もいるだろう。それは仕方ないと思うし、当たり前だと思
う。

でも私は、あの時の行動が全てこのちゃんの為だったと言い切ることが出来ない。私
はあの時、自分の為に飛び出したんだ。

「このちゃんは、私の大切な友達だから。絶対に護りたいって思った。このちゃんが傷
つくところ、見たくなくて」

「うちは、せつちゃんが傷つくところ、見たくない」

「……ごめんね。きつとこのちゃんがどんなに止めても、私はまた同じことをする。た
とえそれでこのちゃんが嫌われても……このちゃんが傷つくより、ずっといいから」

私の言葉に、このちゃんはひどく傷ついたように瞳を揺らした。ああ、やってしまっ
た。間違えたと私が思ったのはその直後だった。

けれど、たとえこのちゃんに嫌われてもというのは、紛れもない本心だった。それは
確かに、本当に嫌われたなら悲しいしショックだしどうしようもない感情に苛まれるだ
ろうけど、そう思ったのを嘘だとは言えない。

申し訳ないと思っても、黙するだけで撤回しようとしないうちに気づいたこのちゃん
が、唇を震わせた。

「うちに、嫌われてもって……なんでなん？ どうしてそこまでするんや？ せつちや
んがそこまでして、うちを守るのはなんで？ うちにいったい何があるん？ せつちや
んがそない思ってたまで守る価値、うちにあるん？」

今にも泣き出しそうなその瞳に、くしゃりと歪んだ顔に、また泣かせてしまおうと胸を締め付けられながら、私は手を伸ばす。

伸ばした手をこのちゃんの体に触れさせようとして、ほんの一瞬、戸惑ったけれど、手を背中に回して抱きしめた。

「……違うんだよ、このちゃん」

そうじゃない、呟いた。そんな複雑でも大そうな理由でも無いんだと続いた言葉は、音にはならずただ私の脳内に響いて消えた。

「このちゃんが、私の友達だから。傷ついてほしくないから……私がこのちゃんを護りたいと思う理由は、それだけだよ」

「友達、やから？ 本当に……？」

「うん……私にとつて、一番大切なのは、それだけ」

魔力も魔法も西も東もどれほど重要な事でも、私にとつてそれ以上の理由は無い。

友達だから、親友だから……死んでほしくなかった、今度こそ護りたかった。

「このちゃんが知りたいこと、今はまだ話せない事も、いつか絶対に話すから。だから今は……また心配させると思うけど、何の心配もいらぬから」

お願いだから私に。

「私に、このちゃんを護らせて」

願った。結局この願いも、私の為でしかないのだけだ。私は私の為にしか、このちゃんを護れないのかもしれないけど。

この温もりを失いたくないと思う私に、このちゃんはやはりどこか悲しげだった。

「嫌や言うても、せつちゃんは行ってしまおうんやね……」

「うん」

「……それはせつちゃんが、うちの友達やから？」

「友達だから」

「そか」

抱き締めた体を離すと、それでもとても近くにこのちゃんの瞳があった。

悲しげに揺れる瞳の縁に涙が無い事に、私は人知れず安堵の息を吐く。このちゃんが言った。

「約束してや、せつちゃん」

「……」

「いつでもいい、いつまでだって待つから、うちに教えて。うちが知らないこと、せつちゃんが何からうちを守るのか、全部、うちに教えて」

「……うん」

「それから、無茶したら駄目や。うちを守る為にせつちゃんが傷つくのは嫌や」

「……それは、ちよつと難しいかもしれないけど……頑張るよ」
「あと」

縋るようにこのちゃんの手が、私の両腕を掴んだ。震える声を無理矢理に抑えつけたような、絞り出すような声でこのちゃんが言った。

「絶対に、帰ってきて」

「……うん。約束するよ、このちゃん」

きつとこの先、何も知らないこのちゃんはまた不安に駆られるだろう。知らぬ間に、危険に脅かされるだろう。

でも、私が護ってみせるから。何も心配はいらないから。

「私は、帰って来るよ」

必ず、このちゃんの元に帰るから、だから泣かないで——笑っていて。

賭けの代償の日

学校に着き教室に入った私が最初に見たのは、愉快そうに笑うエヴァンジェリンさんだった。

風邪は大丈夫らしい、目が合った彼女は私を見て、ニヤリと口端をつり上げて見せた。けれどそれだけで、それ以上は言葉も無かった。

『刹那、六時にうちに来い』

ただ念話はあるって、断る間もなく、一方的に念話はブチリと切られた。呆気にとられた私を、彼女はやはりどこか楽しげに笑いながら見ていた。

今日が停電ということもあって、帰り道にはあちこちの売店でロウソクやかんばんが安売りされていた。部屋に予備が無かったのを思い出して、一応はと私と真名の分も買っておく。でも、使う暇があるんだろうかと、疑問が頭をよぎった。

「停電中は、部屋から出たらあかんもんなあ。退屈やく」

「暗くて危ないからね。先生方も見回ってるし、ばれたら怒られちゃうよ」

「新田先生に見つかったら、正座させられて説教やて、きつと」

「あははっ」

たしかに、そう考えると一番見つかりたくない先生は新田先生かもしれない。そんな他愛も無い雑談をして、このちゃんの部屋で時間を過ごす。

時刻は五時、停電は八時からだから、あと三時間か。そろそろ行かないとと、私は立ち上がった。

「エヴァちゃんと約束やったっけ？」

「うん。まあ、昨日の今日で具合も大丈夫か心配だし……ちよつと行つて来るよ」

「んー、せやねえ……うちもちーちゃんとこ遊びに行つてこよー」

「千雨さんつて、同室はハカセさんだったっけ？ 研究所に泊まるのかな……？」

「どうなんやろね？」

一緒に部屋を出て、階段のところで別れて私は寮の外へ向かう。玄関を通り抜けて、けれどそのままエヴァンジェリンさんの家に向かうことはせず、一仕事することにした。

ぐるりと女子寮を壁に沿って一周する。寮の四方を囲むようにして、目立たぬ場所にお札を貼りつけた。何かあった時の為に結界を張っておく。

「あとは……」

式神を二体放ち、このちゃんと千雨さんの傍に待機させた。お守りを持ってもらつて

いるから、何か危険があればすぐに私に知らせは来るものの、念のためだ。多少の攻撃力は備えているから、時間稼ぎくらいは出来る。

これでもしも仕事に行くことになっても、女子寮の安全はある程度確保される。そうしてから私はようやく、エヴァンジェリンさんの家へと向かった。

からんころんと呼び鈴を鳴らして、二回扉を叩く。エヴァンジェリンさん、扉越しに呼び掛けると、入れと声が返ってきた。

いつもなら茶々丸さんが開けて出迎えてくれるのに、そう不思議に思いながらも扉を開けて中へ入る。さすがに見慣れた家の中、ソファーに座り今朝と同様、愉快そうに笑うエヴァンジェリンさんがいた。

「ふむ、時間通りだな」

「いったい、何のご用ですか？ それに、茶々丸さんは……」

「茶々丸なら二階にいる。ちよつと準備をな」

「準備？」

何をするつもりなのか、訝しむ私に彼女は言った。

「刹那、約束を覚えているな？」

「約束……？」

「私のいうことを一つ、何でもきくことだ」
「あ」

それは、春休みにした賭けのことか。ゲームで負けた私は、エヴァンジェリンさんに一度だけ従わないといけないんだった。

あの時は、何も思いつかないからと先延ばしにされたけど……。

「今夜一晩、私に付き合え。なに、悪いようにはせんさ」

「……今夜、ですか……」

停電の事を考えると、あまり下手に動き回りたくは無い。出来るなら寮に戻って、このちゃんの安全を更に強固なものにしたかった。

顔を顰めた私を見て、エヴァンジェリンさんはニヤリと笑った。

「お前のことだ、寮の安全は確保してきたんだろう？ それなら、何も問題は無い」

「ありますよ。それに、あまりこのちゃんに心配をかけるような事なら……」

「心配するな、お前は何もしなくていい」

「……ええ？」

「お前はただ見ていればいいんだよ。まあ、少々手は加えさせてもらうが」

「？ あの、今なんて……」

「なにも危険は無いから、付き合えと言っているんだよ」

最後の方が聞こえなくて問いかけた私に、エヴァンジェリンさんはそう言い切った。思わず口を閉ざしたら、彼女は小さく手招きをする。

「賭けは絶対だ。諦めて、今夜は私に付き合うことだな」

「……分かりました」

半ば強引な賭けの実行だったとはいえ、負けたものは仕方ない。彼女相手に逆らうのも大変なのは分かっている。

だから大人しく従うことにして、けれど一つだけ譲れないものがあつた。

「でも、このちゃんに危険が迫つた場合、私はそちらに行きますので」

「……まあ、そうだろうな。構わんよ」

渋々と、どこかつまらなそうにしながらもエヴァンジェリンさんは軽く手を振り承諾してくれた。それなら、と私は頷いた。

「納得したなら、こつちに来い」

早くしろと促すエヴァンジェリンさんに、私は一步一步と足を踏み出す。何をそんなに急かすのか、思つたところで、それは唐突に現れた。

「——ツ!?!」

足元で光る魔法陣。例えるなら、それはネギ先生が仮契約の際に使用する魔法陣に似ていた。でも、見た目が似ているだけでそれとは何か違う感じがする。

「エヴァ、ジェリンさん……ッこれは!？」

「案ずるな。少々、手は加えさせてもらおうと言っただろう?」

くくつと喉を鳴らして笑ったエヴァンジェリンさん。

「お前をもとに戻すだけだ」

「ッ……も、とに……?」

体内を這い回る奇妙な感覚に呻きながら、私はガクリとその場に膝をついた。無理矢理何かを引きずり出されるような、訳の分からないそれに思わず両手で体を抱きしめる。

エヴァンジェリンさんが魔法陣の前に立ち、私を見下ろした。

「そろそろか」

私の体内を這い回る感覚が一際強くなったと思えば、それは唐突に掻き消えた。知らず詰めていた息を吐き出す。

魔法陣が光を失い、静かに呼吸を繰り返す。頬を汗が伝い、縛っていた髪が緩んだのか、視界に一房髪の毛が垂れてきた。白い、髪。

「!？」

認識した途端に、凍りついた。

「え……え!？」

ぐしやりと髪を押さえる。髪ゴムが取れ、ぼさりと重力に従って落ちた髪の毛はやはり真つ白で、何故と疑問が頭を巡った。

訳も分からぬまま辺りを見回した私が見つけたのは、すぐ横にあった姿見の鏡。そこに映りこんでいた姿に、呆然と目を瞠った。

「これ、は……」

ぺたりと床に座り込んだ白い髪の女。ゴムで結っていた髪が下され少し乱れているが、それはまさしく私の――、

「本来のお前の姿だ。思った通り、髪は染めていたようだな」

「う、あ……」

暴かれたその白に、さすがに落ち着いていることは出来なかった。別に、今となってはもう自分が烏族のハーフであることに囚われてはいない。言いふらしたいわけでもないが、本来の自分の姿に絶望するような事はもう無い。そんなの、このちゃんたちが私を受け入れてくれた時に、もうやめた。

でも、やはり心の準備も無しに強制的に暴かれたとなれば、それなりに衝撃は受ける。混乱した私の髪に手を伸ばし、エヴァンジェリンさんはそつと撫でてきた。

「なかなか綺麗じゃないか」

「は、あ……」

サラサラと彼女の指の間を擦り抜けて行く白い髪。少しして、私はようやく平静を取り戻し始めた。

「……何のつもりですか。こんな、ことをして」

「さつきから言っているだろう、少々手を加えると……さすがに、何もせずに付き合わせるわけにもいかないんでな」

「……いったい、何に付き合わせるつもりなんですか」

「すぐに教えてやる、が、まずはこれに着替えろ」

ばさりと渡された服は、すらつとした黒いドレス。ご丁寧にもサイズはピッタリで、背中を大きく開けたそれに羞恥が沸き起こり顔が熱くなった。言われるままに着た私も私だが。

ただでさえ誰にも見られるわけには姿なのに、こんなまで着たとなつてはいよいよ拙い。絶対に、誰にも見せるわけにはいかない。

「こんな服を着せて、夜会にでも行くつもりですか」

「そう睨むな。なに、そんな優しい物じゃないさ。参加者はほんの少しだしな」

それに、似合っているぞと続けられた言葉に、そうですかと硬く返した。とても笑って返せる余裕が無い。

「今夜、学園がメンテナンスの為に停電となるのは知っているな？」

「ええ」

「それに乗じて、あの坊やと決着をつけてやろうと思つてな。お前には、それに付き合つてもらおう」

「……それ、は……」

止めるべきなんだろうか。弱体化しているとはいえ、エヴァンジェリンさんは強い。本気を出せば、ネギ先生など太刀打ちできないだろう。実際、一度は負けたようだし。

「（ああ、でも果たし状）」

あれを持って来たということは、向こうもやる気があるというわけで……合意の上？
そもそも、止めるつもりなら彼女の吸血行為そのものを止めなければならなかった。あれを干渉せずにいた時点で、認めたと同然か。

……いや。というよりも何故、私とその勝負に付き合わなければならないのか。学園長から関わらないでほしいと言われているし、このちゃんにも危ないことはしないと
言つてるのに——全く、どうしてこうなる。

「……気づいているとは思いますが、私は学園長より今回の件には関わらないように言われています」

「分かつてるさ。なに、心配するな。今のお前を桜咲刹那と思う奴はいない」

「ですが……」

「それに翼を出してみろ？　まず間違はなく、お前だとは気付かん」

たしかに、私が鳥族とのハーフであることは学園長でさえ知らない。それを知っているのは長と、師範だけだ。

でも、だからといってこの姿で外に出るのは、やはり気が引ける。

「このちゃんに心配をかけたくありません」

「それも言っただろう。お前はただ見てるだけでいいんだよ」

「……どうして、私をつき合わせようと思うんです？」

「賭けのこともあったが、まあ一番は、私がお前を気に入っているからだよ」

なあ、刹那と。くすくすと笑ってエヴァンジェリンさんが言った。賭けの事を言われると私も言い返せないんだよなあ、強制でも負けは負け、これはさつき結論を出した。

「元に戻るのはいつですか？」

「魔力が切れてからだだから、明日の朝には戻る」

つまり、朝までは寮にも帰れないと。わざわざ逃げ道まで塞いでくれた彼女に、私はとうとう諦めの溜息を吐いた。

「(エヴァンジェリンさんとの賭けは、もうしない)」

無理やりにも連れて行きそうな彼女に、私はそう硬く心に誓った。

今夜、エヴァンジェリンさんがやろうとしているのは、電力によって張られている学園の境界を無効化し、本来の力を取り戻してネギ先生と決着をつけること。

目的はネギ先生の血液だという。それによって本当に登校地獄の呪いが解けるかは分からないけれど……あとこの前、茶々丸さんを傷つけた報いも受けてもらうんだと言っていた。だいぶお怒りらしいが、ネギ先生、大丈夫だろうか。

「(危なくなったら、止めに入ろうか……)」

さすがに死なれては拙い。

「——時間だ」

予定通り、停電が始まる。塔の上から闇色に染まった麻帆良の街を見下ろすエヴァンジェリンさんの顔は、歓喜に染まっていた。

雲に隠れた月が姿を見せた頃、幼い少女は消え、綺麗な女性がそこにいた。

「凄い魔力ですね……」

「これが、本来の私の力だ。さて、下りて坊やを待つとするか」

「あ、はい」

塔から飛び降りて移動するエヴァンジェリンさんを追って、私も翼を広げ空へと身を投じる。白い髪がふわりと風を受けた。

白い翼と、白い髪、そして赤い瞳。解いた髪は肩をゆうに超す長さ。真逆の姿に、今

の私を私だと判断する人間が、どれだけいるだろうか。

「……エヴァンジェリンさん」

「なんだ」

ネギ先生を待ち構える場所としてやって来た大浴場。私は既にそこにいた彼女たちを見て、半眼になってエヴァンジェリンさんを睨むようにして見た。彼女はまるで、心外だというような顔をしていたけれど、私がこうなるのも無理は無いと思う。

「最初の一人にとどまらず、新たにクラスメイトを餌食にするのは……さすがにどうかと」

「問題ない。坊や相手に少し働いてもらうだけだ」

「……絶対に怪我はさせないでくださいよ?」

「はっ。坊や次第だな」

聞く耳持たずとはこのことか、私は溜息を飲み込む。

やがて、過剰とも思えるほどの重装備でネギ先生がやって来た。エヴァンジェリンさん相手ならそれくらいして当然な気もする。

「——貴女はどなたですか!」

「つくく……!!」

……開口一番にそれを問う姿に、思わず嘔き出してしまった。ネギ先生らしい、そん

なことを思う。

「えっ……っ？」

笑ってしまったからだろう、ネギ先生はエヴァンジェリンさんの隣を飛ぶ私を見上げて、戸惑ったような困惑したような顔をした。エヴァンジェリンさんが不機嫌そうに私を横目で睨んでいるので、慌てて笑いを抑える。

「つたく。まあいい、仕切り直しだ」

ボンツ、と音が鳴ってエヴァンジェリンさんの体が縮む。いや、おそらくは先ほどの姿が幻覚だったのだろう。

「——さあ、いけ」

エヴァンジェリンさんの合図で、大河内さんたちが屋根から飛び降りネギ先生へと向かって行く。

「ええっ!! ひ、卑怯ですよ!!」

「なにが卑怯なものか。従者を連れず一人で来たことを後悔するがいい」

クラスメイトに襲われて、ネギ先生は満身に反撃できない様子だ。というよりも、抵抗も出ていない。

「あう、ううう……つやめてください! 風花・武装解除!!」

悲鳴にも近い情けない声とは裏腹に、放たれたのは無詠唱の武装解除。大河内さんと

和泉さんの服が吹き飛び、次いで唱えられた魔法で二人は眠らされた。

「ふっ、やるじゃないか。では本番と行こうか、坊や——茶々丸」

「失礼します、ネギ先生」

行け、エヴァンジェリンさんの合図と共に茶々丸さんが飛び出す。その後ろで、

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック」

エヴァンジェリンさんが魔法を唱え始めた。私はそれを聞きながら、静かにその場から飛び立ち大河内さんたちの回収に向かう。

「氷の精霊17頭 集い来りて敵を切り裂け」

魔法を唱えるエヴァンジェリンさんの守護として前に立った茶々丸さんに、ネギ先生が追い詰められる。その背後には大きなガラス窓があった。

エヴァンジェリンさんの魔法が発動する前に二人を回収し、抱き上げたまま魔法の被害が無いところまで飛びあがる。天井付近でとどまり、眼下で行われる光景を眺めていた。

「魔法の射手 連弾・氷の17矢!!」

「うあっ」

魔法によって碎け散るガラス窓。一緒になって飛ばされたネギ先生を追いかけて、氷の矢が進路を変える。

エヴァンジェリンさんが割れたガラス窓から外へ飛び出していくのを見て、私はようやく下り立ち、抱えていた二人を床に寝かせた。眠っているだけなので、いずれ目覚めるだろう。

「にしても……」

一人で大丈夫だろうか、ネギ先生。エヴァンジェリンさんには茶々丸さん以外にも従者がいることを考えれば、どう見ても圧倒的に不利だと思う。

割れたガラス窓から下を見下ろせば、停電中も相俟って魔法の光はよく分かる。すぐに見つけたその光を指して、宙へと身を躍らせた。

「ネギ先生はどうですか？」

「今は佐々木まき絵と明石裕奈の相手をしているよ。一人でどこまでやれるか、楽しみだな」

追いついたエヴァンジェリンさんは、心底楽しそうに笑ってそう答えた。ネギ先生がどこまで一人でやれるのか、それは分からないが……上手く終わってくれるといい。

「……あれ？」

ふと思いついた。ネギ先生、明日菜さんと仮契約を結んでいた筈だけど……それなら、どうして今は一緒にいないんだろう。どこかに隠れている様子は無いし……連れてきていないんだろうか？

「……………それが、正しいのかもしれないな」

昔の私を知る明日菜さんと、今の明日菜さんは違うから……………でも、本当にこれが正しいんだろうか。明日菜さんの事情を考えれば、彼女とネギ先生が関わるのはいいとだるうし……………でも、それによって明日菜さんが危ない目に合い続けたのも事実だ。

「……………」

これは、どちらが正しいんだろう。どちらの選択が間違いなんだろう。

「刹那、余計な事は考えるなよ」

「エヴァンジェリンさん……………」

「お前は私たちも知らない事を知ってはいるが、そればかりに囚われて今を見失うな。どうにもお前は、それに縛られ過ぎているからな」

「……………それはそうですよ。私にとつて、大切な記憶ですから」

「別に全く気にするなどは言わん、思い出としてその記憶を大切にするのはなら私も何も言わんさ。ただ、頼るといふなら本当に必要な時だけにしろと言っているんだ。お前がどれだけ昔と今を比べて悩んだところで、お前自身に出来る事はそう多くない。なのに、その記憶ばかり気にして動いていたら、そのうちまともに立つことも出来なくなるぞ」

「……………はい」

エヴァンジェリンさんの言うことは、たしかにその通りで。私は結局、答えを出せぬままに頷いていた。

停電が終わるまで、残り一時間弱——私は、どうすればいいのだろう。

一つの事件が終わった日

佐々木さんと明石さんを退けたネギ先生を、エヴァンジェリンさんと茶々丸さんが追う。空中での魔法の応酬が続いていて、エヴァンジェリンさんは手を抜いているようだけれど、ネギ先生は精いっぱい応戦のようだ。でも、やっぱり強いなネギ先生……この時点でのネギ先生の実力というのを私はあまり知らなかったけれど、さすがということろか。

「氷瀑!」

「うわああああああ!!」

……ただ時々、本当に危ないと思うときがある。たぶんエヴァンジェリンさん、茶々丸さんのことを未だ怒っているのだろうけれど、ネギ先生がひどいダメージを負わない事を祈るほかない。私は、三人の攻防を頭上から眺める事に徹しよう。

「そろそろ決着をつけようか、坊や」

やがてネギ先生は追い詰められて橋の上、エヴァンジェリンさんと茶々丸さんはまだまだ余裕があるといった様子で近づいて行く。対して、ネギ先生は杖からも落とされ倒れたまま動けないようだった。

一步、二歩と焦らす様に近づいて行く様は、何かしらの抵抗をネギ先生に期待しているようにも見えた。彼女なりにこの戦いを楽しんでいるのかもしれないが、実際のところは分からない。

「——!!」

あと少し、ネギ先生を直前にしてエヴァンジェリンさんと茶々丸さんの動きが止まった。驚愕に声をあげるエヴァンジェリンさんと茶々丸さんの足元が強く光っている。空から見下ろしている私には、その光の全容がよく見えた。

「結界か」

西洋の捕縛結界なのだろう、魔法陣から光の縄のようなものが伸び彼女たちを拘束している。私が使う東洋のものとはまた違うものだ。

さすがに予想していなかったらしいエヴァンジェリンさんが素直にその仕掛けを称え、勝利を確信して喜んでいられるネギ先生に話しかけたがその態度は一変しておかしそうに笑い出した。

「本来ならまあ、貴様の勝ちだろうが——茶々丸!」

「はい、マスター。結界解除プログラムを起動します」

「えっ!?!」

強固に見えた光の縄が、茶々丸さんが言うやいなやピキリパキリと音をたてはじめ

る。次第に罅が増え、それはやがて縄を砕くに至った。

「凄……」

「西洋の結界ならこの通りさ。まあ、東洋の結界は時間が必要だったが」

チラリとエヴァンジェリンさんがこちらを見上げたのが気まずくて、すつと彼女の視界から移動する。にしても、茶々丸さんがこちらの結界まで対応していなくてよかった、もし対応されていたら、桜通りでの戦いの時どうなっていたか……。

ネギ先生の勝利に思われた戦いは、けれどそれで決着がつかずこれで形勢逆転、ピンチは未だネギ先生のままで。

「ううっ……ラス・テル・マ・スキっああ!!」

呪文を唱えようとしたネギ先生だが、抵抗虚しく彼の持っていた杖は茶々丸さんに奪われエヴァンジェリンさんに投げ捨てられ湖へと落ちる……はずだったが、空中でそれを掴み川岸に置いておく。水の中に落ちるよりは探しやすいだろう。

「つひどいですよエヴァンジェリンさん! 本当だったら僕が勝つてたはずなのに!!」

「——甘ったれるな!!」

エヴァンジェリンさんの平手が、喚きたてるネギ先生の頬を打つ。

「二度戦いを挑んだ男がキャンキャン泣き喚くんじやない! この程度でもう負けを認めるつもりか!? —— お前の親父ならば、この程度の苦境は笑って乗り越えたものだ

ぞー！」

「う……………」

打たれた頬を押さえて、ネギ先生はエヴァンジェリンさんの説教にも似た怒鳴りに呆然としている。それにも構わず、エヴァンジェリンさんはどうやらこのまま、当初の目的通りネギ先生の血を吸うつもりのようなのだ。

これで勝負がついたのなら、それも仕方ないだろう。敗者が勝者に何をされようと文句をいえないのがこの世界で、それはネギ先生も重々承知の筈。ここでただこうして見ているだけの私が入るのも、また違うことだ。

「まあ、エヴァンジェリンさんもあまり酷い事はしないだろう……………」

いくら茶々丸さんのことで怒っていたとしても、それはさつきまでの攻防で十分に報復しただろうし。彼女自身も少なからずネギ先生のことには興味を持っているようではあるし……………まずもって、殺したりはしないだろう。さすがにそこまでいったら止めに入るつもりだ。

「……………ん？」

橋の上に人影が見えた。目を凝らしよくよく見ると、それは——

「コラーツ！ 待ちなさいい!!」

明日菜さん。エヴァンジェリンさんも気づいて、ネギ先生に近づけていた顔を離して

振り返った。

「どうやら寮にいたところをカモさんが連れてきたようだ。もしもこのまま、明日菜さんがネギ先生と組んで戦うというのなら、また勝負は変わってくるのだろうけど。」

「(……明日菜さん)」

それを私は止めるべきなのか、それともこのまま見ているべきなのか。分からなかった。

「オコジヨフラーツシュ!!」

「てりやああああ!!」

「へぶっ」

カモさんの目くらしに乘じた明日菜さんの渾身の蹴りが、エヴァンジェリンさんに見事命中する。かなりの威力に数メートル軽々と吹き飛んだエヴァンジェリンさんが気づいたところには、既にネギ先生と明日菜さんは姿を隠していた。

「あいつら、どこへ行った!」

「見失いました」

エヴァンジェリンさんに見つかる前に、私もまた姿を隠す。空から見下ろす私には目くらましもあり効果が無く、ネギ先生たちが隠れた場所はまるわかりだった。

「……すみません、明日菜さん。僕、明日菜さんに迷惑かけないように一人で戦おうと

思ったのに……」

「まったく、無理するんじゃないわよ」

橋からほど近い建物の陰にネギ先生たちはいた。落ち込み涙ぐむネギ先生に、明日菜さんが仕方なさそうに笑っている。

「それに、ここには私に来て来て来たんだから、迷惑なんかじゃないの。それで、あんたはどうしたいのさ、ネギ」

「僕は……僕は、エヴァンジェリンに勝ちたいです」

ネギ先生は、明日菜さんに会えたことで気持ちが持ち直したらしい。前向きに強気に明日菜さんを見上げて、エヴァンジェリンさんとの勝負を諦めていない。

「お願いします明日菜さん。僕に、力を貸してください」

そして明日菜さんの手を望む。彼女もまたそのつもりだったようで、頷きながらけれどどこか恥ずかしそうに頬を染めていたのが不思議で、何を思っているのだろうと首を傾げる。

「それじゃあ姐さん！ 頼みますぜ!!」

「う、うん」

「え？ え？」

明日菜さんの肩を飛び降りたカモさんが地面に何か、陣を描いている。見覚えのある

それは、もしかしくとも。

「(仮契約)」

「この前みたいなおでこにチューじや駄目ですぜ！」

「分かつてるわよ！」

犯してはならない間違い、忘れる筈も無い。

……明日菜さんはまだ、ネギ先生ときちんとした仮契約を結んだわけじゃないのだろう。それならまだ、間に合う？ 明日菜さんは、まだ戻れるかもしれない？ ああ、でも正式ではなくとも結んでいる事に変わりは無く、だけど正式なものではなくて。

「(でも、だけど、もしかして、まだ、でも、でもでもでもでも)」

明日菜さんの歩んだ道は決して楽なものではなくて、だけど彼女にとつてとても大切な道ではあった。それならきつと間違いでは無いのかもしれない、だけどそれは私が知るこの先の明日菜さんで。

今の明日菜さんはまだ何も知らない女の子でしかなくて、そんな彼女に何も知らせぬまま全てを捨てさせてもいいのか。まずもって平穩を失うという代償は発生して、彼女の生活は今までと同じではいなくなるのに。

「それで、いいのか？」

気づかぬうちに、間違いと思わないまま間違いを犯すことがあるのを私は知ってい

る。そしてたった一つの間違いが、全てを壊してしまうことを……私は、知っている。
「待ってください」

私は、彼らの前に降り立った。

「だ、誰！」

「あなたは……エヴァンジェリンさんと一緒にいた!？」

「嘘つ、それじゃあ、敵……?」

「……違います」

驚き、警戒するネギ先生たちに私は首を振る。敵では無いと言っても、警戒を解くことなど出来る筈も無い。それでもよかった、今はただ私の言葉を聞いてくれさえすれば。

「それをするのが、どれだけ危険な事か。本当に分かっていますか?」

「え?」

「仮契約を結ぶことが、魔法使いの従者になることが、どれだけ危険な事か、貴女は分かっていますか?」

ジツと見つめて問いかければ、明日菜さんは言葉を詰まらせてたじろいだ。今の私はどれだけ冷めた目をしているのか、少しばかり疑問に思った。

「何も知らなかった頃には戻れない。無関係でいたくても、望まないままに巻き込まれ

る。今まで通りに過ごそうと思っても、思い通りにいかない。平穏な日常に戻れなくなる。それでも、構わないですか？」

「な、なによ、それ……」

「魔法の世界では、命のやり取りが普通に行われるんですよ。命を狙わなくとも、戦えば怪我をするし相手を傷つける。常識が通用しない、それが魔法です。貴女には、今まで
の平穏を捨ててその危険な世界へと飛び込む、覚悟がありますか？」

「ッ……それは……」

「君もですよ、少年」

明日菜さんの隣で、呆然と聞いているネギ先生を見た。思わぬ矛先に目を見開いて、

「ぼ、僕ですか？」

そう呟くように言った。

「誰かをパートナーにするということは、その人を己の戦いに巻き込むこと。エヴァンジェリンさんたちのような人との戦いに、巻き込むことになるんですよ。貴方に、その覚悟がありますか？」

「覚悟……?」

「隣に立つその人を護り抜く覚悟」

「ッ!!」

言つて、心中で何を言っているのかと自嘲する。全く、どの口が偉そうな事を言えるんだらうな。

「(逃げていくくせに)」

話すと決めて、話さなければと思うのに。護りたいなら、絶対に避けては通れぬ道だというのに。

未だに私はその道を遠ざけ、逃げ続けている。このちゃんに全てを話す事から、このちゃんの平穩を壊してしまうことから、私は逃げている。

「(詭弁だな)」

その心はもつと単純で明快なのに、私は未だにそれに続く最初の一步を踏み出せずただ立ち止まるばかりだ。

「平穩を捨てて共に戦う覚悟、手を掴んだその人を最後まで護り抜く覚悟。あなたたちに、それがありますか？」

だけど、放っておけなかった。立ち止まりながら、その横で何も知らぬままに歩いて行く二人を見たら、黙っていることも出来なくて。

何も知らぬままに平穩を捨ててしまつたら、何も知らぬままに危険へと巻き込んでしまつたら。気づいた時には全て遅かつた、取り返しがつかなくなかつた。そんな後悔を、二人にはしてほしくなかつた。

「覚悟が無いのなら、ここは引いてください。後は私が何とかします」
「で、でもっ！」

「戦う覚悟も、護る覚悟も無いまま魔法に関わったら——死んでしまいますよ」

私は、神では無い。エヴァンジェリンさんの言うとおりでな。私はただ、人が知らない事を少し知っているだけに過ぎない。けれどそれも、日々変わり行く今を前にすればひどく曖昧なものだ。

本当なら、私の知る時では私はこの場にはいない筈だった。なら今の私は何なのだろう、彼らの前に現れて問いかける私は、ただ悪戯に彼らの前に立ちはだかる壁というところか。問いかけるだけで、その答えを彼らに任せるなんて愉快犯もいいところだ。

「(それに、私が手を出さずとも……)」

最初は、そんなつもり無かったのかもしれないけど。ネギ先生は従者となった私たちを護り、支え合い、戦えるだけの強さと覚悟を手に使っていた。明日菜さんだって、共に戦う力と覚悟を持っていた。

だからここで私が何もしくとも、ネギ先生と明日菜さんなら乗り越えることが出来たのだろう。もしかすれば私の今の行動は、そんな二人の可能性を潰そうとするものなのかもしれない。

彼らが数々の戦いを経て手にしてきた覚悟を、何も知らない彼らに求めているのだから

ら——それは、とても残酷なことなのではないだろうか。

「どうしますか？」

「……僕、は……」

答えを聞くのが恐い、問いかけたのは私なのに。もしも私の知る二人が消えてしまつたら、そう思うと恐怖で体が震えそうで、私はそれを必死に抑えた。

「僕は……」

どうしますか、ネギ先生？

「ツ僕は——エヴァンジェリンさんと戦います！」

強い意志の籠った瞳が私を見る。そうですか、答えた私の声から震えが消えていた。

「でも」

ネギ先生は大きく息を吸い、ゆっくりと吐き出してから明日菜さんを見上げた。

「仮契約は、しません」

「ネギ……」

「ちよつ、どうしてだよ！ アニキ!!」

見上げて来るネギ先生を未だ迷いのある瞳で見つめ返す明日菜さんの足元で、カモさんが彼の言葉にひどく驚き狼狽えたように叫んだ。

「……考えたんだ。今の僕に、明日菜さんを護るだけの力があるのか……自信が無いん

だ。護りたいと思うのに、エヴァンジェリンさんとの戦いで、僕が明日菜さんを護れるのか……護り切れるとは、思えないんだ」

「ネギ、あんた……」

「だからって、エヴァンジェリンさんを放っておくことも出来ないんです。彼女は僕の生徒だし、それに……父さんのことで、聞きたいこともあるから」

だから戦う、逃げない。敗北に折れかけたネギ先生の心は、傷一つついていない。

「……貴方がそうと決めたのなら、私は止めません」

もとよりそんな資格は無いのだ。キラキラと強い意志に輝くネギ先生の瞳に密かに安堵しながら、私は一歩その場から退いた。

「ちよつと、待ちなさいよ!!」

踏み出そうとしたネギ先生の腕を明日菜さんが掴む。引き留められたネギ先生が戸惑いがちに彼女を見上げ、明日菜さんは未だ困惑し、迷い、戸惑う瞳を揺らしながら、彼を見つめていた。

「その仮契約つてのをしないで、本当にエヴァちゃんに勝てるの?」

「……分かりません」

「じゃあ、どうして」

「逃げたくないんです。勝てないからって、ここで逃げてしまったら……僕は一生、父さ

んに会えない気がするんです」

「……止めても、聞かないのね?」

「はっ」

明日菜さんは、「そう」と静かに呟いて——不意に、ネギ先生に口づけた。

「——!?!」

目を見開くネギ先生と目を閉じる明日菜さんの足元で、魔法陣が強く光り輝いた。仮契約が結ばれた瞬間だった。

「あ、明日菜さん! どうして?!」

「あんたみたいなガキを放っておけるわけないでしょ。一人で勝手に無茶するし、危なっかしくて見てらんないわよ」

「でも聞いたじゃないですか! 明日菜さんだって危ないんですよ!?!」

「護りたい気持ちはあるんでしょ?」

「え……」

必死に言い募るネギ先生の頭を、明日菜さんがポンツと軽く手を置いてぐしゃぐしゃと撫でまわした。

「なら、強くなつて私を護りなさいよ。それまでは私が、あんたを護つてあげるから」

「明日菜さん……」

「死ぬかもしれないってのは、正直まだ実感ないけど……危ないってのは、十分わかったから。それでも、私はあんたを一人にしておきたくないの。護りたいっていうなら、強くなりなさい。いいわね？」

「——はいっ!!」

危険を承知で、明日菜さんはネギ先生の隣を選んだ。ネギ先生はそんな明日菜さんを、護りたいと想っている。

「(結局、私は何が出来たのだろうか)」

仮契約は結ばれて、二人はこれからエヴァアンジェリンさんと戦いに行く。何一つと変わっていない、私がいてもいなくても変わらなかっただろう結末。

顔を見合わせた二人が強く頷き合って走り出す、その直前で私を見た二人が立ち止まり笑いかけた。

「ありがとうございます」

ネギ先生の言葉に首を傾げた。お礼を言われるような事を私はしていない、むしろ邪魔をしたようなものなのに。

「あんたの言う覚悟とか、たぶん私はまだちゃんと持つてないんだと思うけど……教えなくてありがとう」

「僕、強くなって明日菜さんを護ります。護り抜く覚悟、忘れません」

二人がエヴァンジェリンさんとの決戦に向けて走り出す。振り返り、見送った後ろ姿に私は羽根を広げた。

「——頑張ってください」

ネギ先生。明日菜さん。

「(何も変わらない)」

けれど、二人の瞳だけは——違う色を秘めていた気がした。

「まったく、適当な仕事をしよって」

「大丈夫ですか？ エヴァンジェリンさん」

平気だ、エヴァンジェリンさんは不満を露わにしながら忌々しげに明るい空を睨み付けた。停電が予定時刻よりも早く終わってしまい、結果としてエヴァンジェリンさんの力を封印していた学園結果が復活、彼女は力を抑えこまれ浮いていた空から湖へと落とされた。

明日菜さんという従者を得てエヴァンジェリンさんとの戦いに臨んだネギ先生は、それは見事な戦いっぷりだった。もつとも、復旧直前の彼女にもまだ余力はあり、勝負はどう転ぶか分からなかったのだが……湖へ落ちかけた彼女を、寸でのところで受け止めたのは幸いだらう。

「にしてもお前、坊やたちに何を言った？」

「え？」

「なかなかいい顔をしていたぞ。私と戦うには相応しい覚悟を持った顔だ。お前が何か言っただんじやないのか？」

「……少し、聞いてみただけです」

橋に降り立ち、エヴァンジェリンさんを茶々丸さんに任せて私は再度、空へと飛び立つ。駆け寄ってくるネギ先生と明日菜さんが何か言いたそうに口を開いていたけれど、私はそのままエヴァンジェリンさんの家に向かって飛び始めた。

「……このちゃん」

何も知らないこのちゃん。知らなければいけないこのちゃん。知りたがってるこのちゃん。

危険を承知で、ネギ先生の隣にすることを選んだ明日菜さん。護りたいと、護る為に強くなると決めたネギ先生。二人は、今の二人なりに覚悟を決めたのに……私は。

「護りたい……」

今度こそ、このちゃんを護りたい。このちゃんを死なせたくない——だから、このちゃんを護り抜きたいというこの想いが、私の覚悟。

護る為に、このちゃんに全てを話さなければならぬなら、私は。

「護るよ、絶対に」

たとえ嫌われようと、悲しませようと、それがこのちゃんを生かす未来に繋がるなら、
護り抜く為に私は、より強い覚悟を。

「(たとえ、この命に代えても)」

私はこのちゃんを護り抜く。

護られる人の日

投函されていた手紙に無言で目を通す。それは長からの手紙だった。

「……」

昨日は大変だった。停電に乗じてのエヴァンジェリンさんとネギ先生の対決、ネギ先生と明日菜さんの仮契約。エヴァンジェリンさんに姿を変えられたせいで、昨日一晩は寮に戻れなかったし。

真名に話を聞けば、停電によって学園を守っていた結果が解除されたりもしたようで、学園側から依頼があったそうだ。いなかった私のことは、このちゃんを護っていると誤魔化してくれたようで頭が下がる。

「……」

読み終えた手紙をまた封筒へと戻した。長からの手紙は、主にこのちゃんへ魔法を話すかどうかを重役たちと話しあったことの結果だった。

このちゃんに魔法の存在を知らせ、ただし現時点では魔法に深く関わらせないこと。

他だと、麻帆良学園の修学旅行で京都市行きを打診されていること、強硬派に不穏な動きがあること。そして、このちゃんに一度、京都へ戻ってもらいたいことがあった。こ

のちゃんが京都に戻るのは、強硬派が落ち着かなければ危険であることからすぐには無理だということも。

「話す、か」

長はこのちゃんに、全てを話すことを決めた。

「……」

このちゃんの内には、あれほどの魔力が無ければこのまま、平穏に暮らしてもらえない。

覚悟していたこととはいえ、全てを話すことでその平穏を壊さなければならぬのは、少し……悲しかった。

「おじゃましまーす」

放課後になって、このちゃんを私の部屋へと誘った。朝からずっと、いつ話そうかと考えていたけれど、結局は放課後が一番無難であることに気づいた。

「好きに座って待ってて」

「りよーかいや」

テーブルの傍にこのちゃんが座るのを確認しながらお茶を用意する。こうしてる間も、何から話そう、どう話そうと頭の中で考えがぐるぐる回る。

お茶を差し出しながらテーブルを挟んだ真向かいに座れば、楽しそうに笑っているこのちやんが視界の中心に存在して、私はさらに言葉を喉に詰まらせた。どう切り出せばいいのか、あれだけ考えていた筈なのに一つも言葉は出てこない。

大切な話がある、それだけでいい。たった一言を口に出すだけで、このちやんに全てを話すことが出来るのに。話すべきだと分かっているながら、その言葉が出てこない。

「(知りたがっていることを、話すからって……約束したのにな)」

そういえば、その約束をしたのは昨日の朝だった。言ったそばから話す事になるなんて、すごい偶然だな。急すぎて、このちやん驚かないといいけど。

「せつちやん?」

「……あ、ごめん」

思考に沈んでいた私を、このちやんはいつの間にかひどく心配そうな顔で見つめていた。

「どうかしたん?」

「……ううん」

なんでもないよ、少しでも安心してほしくて小さく笑って見せる。このちやんはまだ首を傾げて心配そうに瞳を揺らしていた。

また心配させてしまった、そう思ったけどこれから私が話そうとすることを考えれ

ば、今更だろうと思った。驚かないといいけどなんて、驚かない方が無理に決まってる。きつとこれから話すことで、私はこのちゃんをもっと心配させてしまおう。驚かせてしまおう。そう思ったら、なんだかむしろ落ち着いてきて、気づかれないように小さく深呼吸した。

「ねえ、このちゃん」

なに？ 首を傾げたこのちゃんにゆっくりと言葉を紡ぐ。

大丈夫、覚悟なら決めた。護り抜く為に通らなければならぬ道だと言うのなら、どれだけ困難な道だろうと進んで見せる。

「話せなかったことを、話すよ」

無知は罪だ。ならば知り過ぎる事は罪なのか、私には分からない。

それでも、変わり続ける未来がより良い方向へ……このちゃんの生きる未来へと繋がることを、私は願う。

せつちゃんがウチに話してくれたのは、まるで子どもの頃に読んだ絵本の話のようだった。

普通じゃ無い力、魔法が実はあって、ウチの中にもでっかい魔力がある。お父様は関西呪術協会という魔法とはまた違う呪術の力を使う人たちの集まりの長で、麻帆良とは仲良くない。なのにウチがここに居るのは、お父様がウチに魔法のことを知らされずに生きてほしいと思つたからで、あのまま家にいたらウチは何や強硬派とか恐い人に利用されていたかもしれない。それから守る為にウチは麻帆良に来た。

せつちゃんはそれでもウチを利用しようと目論む人や、何や麻帆良に寄つてくる妖怪とか、他にもいろんな危険なこととか……魔法から、ウチを守る為に麻帆良に来てた。

最初に再会した時そつけなかつたんは、立場とか色々考えてたからやつたんやね。近くにいて魔法のことがウチに気づかれても困るからつて、せつちゃんは考えてくれたみたい。

……ウチはそれでも、一緒にいたかつたなあ。今が凄く楽しいから、もつと早く今みたいに仲良う出来たらつて思つてしまうのは、我儘なんかな。

「このちゃん、大丈夫？」

「……ん、平気や」

正直、難しい話とか思いもよらない話があつて驚いてるけど、大丈夫や。

「……とてもじゃなけど、信じられないとは思ふ。でも、本当のことなんだ」

「うん、わかる。信じるえ」

せつちゃんの言葉を、ウチは信じる。せつちゃんは今も昔も変わらさず、真面目で、不器用なくらいまっすぐで、それで凄く優しいから。ウチは、信じるから。

「(やから、そんな泣きそうな顔、しないで)」

話してる間、せつちゃんはずっと泣きそうやった。泣きそうで、苦しそうで、悲しそうで、辛そうで……話したくなかった、そう思ってるのがようわかる。

それでもこうして話してくれたのは、ウチとの約束もあつたんやろうけどきつと、話さなければならなくなったからなんやろう。

話さないでいることが出来なくなった、だからせつちゃんはウチに話すことを決めてくれたんやろう。お父様からの手紙もあつた言うけど、それでも今、この時に話すと決めたのはせつちゃんや。

「……魔法がな、凄いい力というのは分かったえ」

立ち上がって、泣きそうな顔をするせつちゃんの隣に座った。立った瞬間に一瞬、せつちゃんの体がビクツツて震えたのを見て、悲しくなる。

「凄いい力で、でも危ない力なんやってこと、よう分かった」

「……このちゃん」

「せつちゃんは、そんな恐いもんから、ウチを守ってくれてたんやね」

ウチの声は、震えてた。頬を涙が伝うのを感じながらせつちゃんを抱きしめて、背中

に回した腕に力を籠めた。

「ありがとう、せつちゃん……ほんとに、ありがとうな」

「……泣かないで、このちゃん」

せつちゃんの手は、少しだけ躊躇したように彷徨ってから、ウチの背中に添えられた。……どうしてやるな、こういう時のせつちゃんは、ウチに触るのを躊躇ってるみたいに思う。それがどうしてなのか、ウチには分からない。

「なあ、せつちゃん」

「なに？」

「ウチにな、凄い力があるのもわかった。立場とかも、難しいけどわかった。その魔法が凄くて、でも凄く危ないのもわかった」

「……」

「それでもな、ウチに出来ることって、ないんかな？」

「駄目だよ、このちゃん」

せつちゃんはウチの言葉に、すぐに返してきた。まるでウチが言おうとしてたことが分かってたみたいだ。

「まだ、駄目なんだよ」

「……ウチだけの問題やないのは、わかってる。でも……」

「そうじゃない」

抱き締めてたせつちゃんが、ウチの腕から離れてスツとウチを見つめてくる。どこまでもまっすぐで、何一つと譲らないという想いが、その瞳から伝わってきた。

「まだ、早すぎるよ。もつとゆつくりでいい」

「ゆつくり?」

「……このちゃんの力は確かに大きいし、このちゃん一人で決められる問題でも無いかもしれない。それでも、一番尊重されるべきはこのちゃんの意味」

「やったら」

「だからこそ、今、話を聞いたばかりの今、決めていい問題じゃない」

言い募ろうとしたウチの頭を、せつちゃんは目を細めて優しく撫でた。

「ゆつくりでいいよ。私が話したことだけじゃない、それを踏まえて色々なものを見て、私以外の人の話も聞いて。それから、このちゃんがどうしたいのか考えればいい、決めればいい。大丈夫、このちゃんが考えられるだけの時間は、私が用意するよ」

「……それでも、ウチは……」

せつちゃんが、何からウチを護ってくれてるのか知った今、ウチは、

「ウチは、ただ護られるだけなんて、嫌なんや」

「うん、知ってるよ」

また、せつちゃんはウチが言いたいことを分かってたみたいに頷いた。細めた目も撫でる手も変わらぬ、ただ瞳の奥がどことなく泣きそうに見えた。

「このちゃんがそう思うのもわかってる。でも、ね」

頭を撫でるせつちゃんの手がウチからゆっくりと離れて、片膝立てたせつちゃんは頭を下げた。

「それでも、今はまだ私に、木乃香お嬢様をお護りさせてください」

ウチは何も言えない。何も言えないまま、どれだけそれが悔しくても、悲しくても、ただ護られる事しか、出来ない。

『そうですか、木乃香がそんなことを……』

「お嬢様の心境には、早くも変化が出ているようです。これは私の見解ですが、今はまだそれを踏まえた上で、お嬢様にはどうするのか考えていただくべきかと」

『私もそう思いますよ、刹那君。木乃香はまだまだ、知らない事の方が多い』

夜、私は麻帆良を抜け出した。大きな川を挟んだ魔法の及ばない外で、長へ今日のこのちゃんのことについてお伝えしたかったからだ。

伝えるのは手早く最低限に、私の方もそうだが長の方もどこに敵がいるのか分からな
い、それが今の西の状況。本来であればこうして連絡を取るのも控えるべきなのだ。

『木乃香については、刹那君には負担をかけますがそのまま、これまで通りお願いしま
す』

「わかりました。それと、修学旅行の件ですが」

『おそらく京都に来るのは確定している事と見ていいでしょう。どうなるかはわかりま
せんが……それまでに、強硬派の方が落ち着ければよかったです』

「……難しい、ですか」

『ええ。正直、手詰まりと言ってもいいかもしれませんが。強硬派の中でも、その時に動
く者がいるのかいないのかすら……』

「……長、差し出がましいのですが、一つお願いがあります」

『なんででしょう?』

私は電話を耳に当てたまま、川の向こう岸に目をやった。凸凹な二つの人影がこちら
を見ている。

「長は、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルをご存知ですか?」

『ええ、知っています。今は麻帆良にいるそうですね、私の昔の戦友が何かしたとか』

「その彼女なのですが……修学旅行の際、私のクラスメイトとして京都に入るのを許し

てはいただけられないでしょうか？」

『それは……それはまた、難しいところですね』

「彼女自身は、東とは関係を持たない魔法使いです。また彼女には、有事の際の一般人である生徒たちの護衛をお願いしたいと思っています」

『ふむ……たしかに、人手は必要となるでしょうね』

おそらく、私の記憶通りとなるならば間違いない……この先にある修学旅行が、大きな切欠となる。このちゃんがこの先、進んで行く未来を決める切欠に。

私自身はきつと、そちらに精いっぱい他に手が回らないだろう。このちゃんを護ることに専念しようと思つたら、他の生徒たちに危険が迫つても間に合わない可能性がある。強硬派がこのちゃんを狙う際に、生徒を巻き込まない保証は無いのだ。

だから、そんな彼女たちを護れる人が必要だった。それにエヴァンジェリンさんは、恐ろしいほどに適任と思えたのだ。実力は言うまでもない、ただ一つの問題は、魔法使いである彼女を西が受け入れるか否か。

「一般人を巻き込まないようには思います、私の力が及ばなかった時のことを考えると、必要になるかと」

『そうですね。こちらでも、誰が強硬派と繋がっているのか調べてはいますが、情けない話、先ほど言った通り手詰まり状態……今回に限っては、むしろこちらと繋がりの無い

そちらの人間の方が、信用できるのかもしれない」

「では」

『刹那君がエヴァンジェリンを信用しているならば、何も問題は無いでしょう。こちら
は、私が説得しておきます』

「ご迷惑をおかけします」

『なに、組織的な繋がりが無い分、まだ納得しやすいでしょう……それでは、また何かあ
れば報告してください』

「はい」

『……木乃香のことを、よろしく頼みます』

その言葉を最後に電話は切られた。長に言われるまでも無く、このちゃんことは私
の最優先事項だ。

「……ふう」

何はともあれ、これでエヴァンジェリンさんの京都入りに対する準備は整った。あと
は私が彼女にお願ひするだけか。

私は対岸にいる二人の人影——エヴァンジェリンさんと茶々丸さんの元に戻るべ
く、強く地面を蹴った。

話しを終えてこのちゃんを部屋に送った後、私はエヴァンジェリンさんの家を訪ねていた。時間は遅く、外を出歩く人も少なくなっていた頃だ。

「近衛木乃香に話したか」

「はい」

「それで？ お前は どうするんだ？」

「これまでと変わりませんよ。このちゃんの傍で、今まで通りこのちゃんを護るだけです」

「そうじゃない」

エヴァンジェリンさんはそんなことは分かっていると、そう言っつて首を振った。

「お前のことは話したのか？」

「いえ……今回は、魔法のことを話すので私も手一杯で」

「はっ。私に偉そうに言っつておきながら、随分と臆病な事だな」

「言葉もありません……」

本当に、自分でも呆れるほどだ。

「……お前の、記憶については話さんのか？」

「話しませんよ」

「……随分と早い答えだな。なぜだ？ 話しておいた方が、お前も動きやすいだろう」

「このちゃんが死ぬ未来を、このちゃん自身に話すなんてできませんよ」

というよりも、したくない。それを話すことでどれだけ事が有利に進もうと、私はこれだけはこのちゃんに話さない。

「仮契約については話してありますから、このちゃんが自らそれをするには無いと思いますし、私も止めます」

「……まあ、お前がそれでいいなら私は止めんさ。精々、頑張る事だな」

「はい。……とところで、エヴァンジェリンさん」

「なんだ？」

「このちゃんの話はこれくらいで良いとして、私はもう一つの用を済ませるとしよう。

「少し、付き合っていただけですか？」

笑って、私は彼女を外へと連れ出した。

「……おい、刹那。どこまで行く気だ」

「外ですよ」

「ここはもう外だろう。私は、どこへ行くのかと聞いたんだ」

エヴァンジェリンさんと茶々丸さんを連れて、森の中を移動する。だんだんと苛々してきたらしいエヴァンジェリンさんに後ろから睨まれながら、目的地目指して私は歩き続ける。

文句を言いながらもこうしてついて来てくれるエヴァンジェリンさんは、やっぱり優しいと思う。

「刹那さん、これ以上は学園の外になります」

「むっ、それは拙いな。おい、刹那」

「……大丈夫です。このまま進みます」

答えると、エヴァンジェリンさんは後ろから私の腕を掴み、引き留めた。剣呑に煌めく瞳を受けて、私はちらりともうそこまで見えている学園の外に目を向けてから、口を開いた。

「登校地獄の呪いを誤魔化せるか、試したいんです」

「……なに？」

訝しむエヴァンジェリンさんの表情は険しい。何を馬鹿な、そう顔に書いてあるのがありありと分かって、それでも私は続ける。

「出来る可能性は低いですが、それでも試したいんです」

「……何か目的があるようだな」

「ええ、まあ。成功したなら、エヴァンジェリンさんに一つ、お願いがあるんです」

エヴァンジェリンさんは未だ半信半疑の様相で、その後ろに立っていた茶々丸さんが心配そうに……いつもと変わらない気もするが、彼女に言った。

「マスター、試してみてもはいかがでしょうか」

「茶々丸」

「刹那さんが何の可能性も無しに行動するとは思えません。もし本当なら、今後、呪いを解く足掛かりに出来る可能性も……」

「……ああ、そうだな。分かっているさ」

「それじゃあ」

「外に出られたら、それ相応に応えてやろう。行くぞ」

「……ありがとうございます」

エヴァンジェリンさんが率先して歩き出し、私と茶々丸さんがその後続く。学園の外はもう目の前だ。

「……」

結界の外と内の境目まで、あと一歩というところでエヴァンジェリンさんは立ち止まった。ジツと見えない境界線を睨み付け、私は黙ってその様子を見守る。

彼女にとってはこの十五年間、解ける事の無かった呪いだ。踏み出す一歩も、私が思うよりもきつと重いものなんだろう。

「……ふう」

息を吐いたエヴァンジェリンさんは、スツと一歩を踏み出した。間違いなく境界を跨

ぎ外へと出たエヴァンジェリンさんに、私と茶々丸さんは息を呑む。

沈黙が流れ、小さな後ろ姿を見つめ続ける私たちの前で、彼女は、

「ふっ、ふっ、あつはははははははははは!!」

声をあげて笑い出した。

「エヴァンジェリンさん……?」

「なあ、刹那。お前いつたい何をしたんだ? くくっ、ああ、清々しい! 最高の気分だ

!」

振り返ったエヴァンジェリンさんの笑みが、私の策は成功したことを証明している。

エヴァンジェリンさんを縛っていた登校地獄の呪いが、彼女に及んでいない。

「先ほど、エヴァンジェリンさんに魔力を箆めてもらったお札がありますよね」

「ああ、私の姿をしていたあれか。あれはいつたい何だ?」

「身代わりです」

ただし、囹用のものであるが。過去に修学旅行でネギ先生に渡したのは、姿形のみを真似するものであったが、彼女が使用したのは違う。

使用者の名前を書き、更に魔力を箆める事でより本人に近い身代わりを作る。それこそ気配まで本人と同じになるようにし、これを使って敵に気配を誤認させるのに使われたりする。

ただ、身代わりを実体化させられる時間は箆められた魔力の量に比例し、その上、使用者本人の魔力が強ければ強いほど、使用する魔力の量も増え実体化の時間が短くなる。

大抵の場合、お札の限界まで魔力を箆めて精々三日……エヴァンジェリンさんの場合、学園結界に魔力を抑えられているので、おそらくは五日ほど持つだろう。

それをエヴァンジェリンさんの家に設置することで、呪いにはエヴァンジェリンさんが敷地内にいるものと思わせようとしたわけだが、上手くいったようだ。

「この方法を使えば、エヴァンジェリンさんも修学旅行に参加できると思ったので」「ああ……ははっ。だが本当に愉快だな。まさかそんな方法で、私を苦しめていた呪いを解くとは」

「もちろん、それだけで上手くいくとは思っていませんでした。なので、もう一つ手を加えてあります」

言つて、エヴァンジェリンさんの手首に提げられた勾玉を指差す。私が着けている赤い勾玉と同じ形だが、彼女のは青色だ。

「認識障害と似た効果を持っています。それによって、呪いからはエヴァンジェリンさんの存在が不確かなものとなり、身代りを本物だとより強く誤認する仕組みです。ただ、あくまでそれは身代わりと同時に使用しないと効果がありませんので、それだけで

外に出る事は出来ません。それから、近くの人間には効果は殆ど無くて……呪い限定のものと考えてください」

仕組みとしてはひどく単純なもので、今の私に出来る精いっぱい策だ。認識阻害も急いで用意したもので、効果としては未だ不完全ではあるが、呪いに対しては上手く作動しているの、今回のところはこれで我慢してもらおうしかない。

「完全に呪いを絶つ術を、私は持っていません……一時的なもので、申し訳ありませんが」

「なに、構わんよ。これまでは一秒たりとも外に出られなかったんだ……全く、つくづくお前は興味が尽きない。ますます気に入ったよ」

「それは、有難いことですね」

「……そうだな。これからは私のことをエヴァと呼ぶがいい。これからもお前には、楽しませてもらえそうだし」

……本当に、不思議になるくらいに彼女に気に入られたようだ。どうしてこうなったのか、首を傾げるばかりだな。

「それで？ お前が私に頼みたいこととは、いったいなんだ」

「……修学旅行での護衛です」

「護衛？」

ふわりと宙に体を浮かせて腕組みするエヴァンジェリンさんを見上げて、私は続けた。

「修学旅行で、問題が発生すると思われれます。その際に、他の生徒が巻き込まれないようにしてもらいたいです」

「ふむ……構わんが、いったい何が起ころ？」

「それは、まだ……」

「……まあ、今それを聞く必要も無いか。いいぞ、引き受けよう」

「ありがとうございます」

思いのほかあつさり、彼女は私の頼みに頷いてくれた。彼女にとって十五年ぶりの外に出る修学旅行、楽しんでもらいたいのが本音だが……私には、彼女に頼るほか無い。

「……少し、ここでお待ちいただけますか？ 用事がありました」

「構わん。私もしばし、ここで外の空気に触れていることにする」

「すみません」

私は長へ連絡するために、川を挟んだ対岸に渡ろうと足に力を籠める。けれどその足を踏み出そうとした瞬間、エヴァンジェリンさんが私を呼びとめた。

「ああ、そうだ。刹那」

「はい？」

「一つ、聞きたいことがあった」

思い出したように言った彼女に、私はふつと体から力を抜いて首を傾げた。

「坊やたちにお前のことを随分と聞かれたんだが、お前いったい何を言ったんだ？」

「……私のこと？」

「ああ。私と一緒にいた、羽根の人にまた会えないか、とな」

「そうですか……いったい、どうしたんでしょう」

というより、それは今このタイミングで聞かなくてもいいことでは、そう思ったけれど口には出さず、私は今度こそ対岸へ渡る為に地面を蹴った。

……にしても、ネギ先生と明日菜さんが、私のことを……わからないけど、二人の様子を伺った方がいいのかもしれないな。